
勇者くんと魔王くん

るうたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者くんと魔王くん

【Nコード】

N6496N

【作者名】

るうたん

【あらすじ】

とある別世界。その世界では勇者と魔王が因縁の対決をずっと繰り返していました。

その世界のまたとある時代でへっぽこ勇者とちょっと変わった魔王がいました。

その二人のちょっと『いつもの対決』と違ったことを繰り広げる『勇者と魔王の奇妙な関係』とのお話。

※基本は二人の視点でお話が進みます。

始まり始まり（前書き）

初めて投稿します！ いたらない点などありましたらどうぞお気軽にビシバシ言ってやって下さい！

というわけで感想などお待ちしております！

では『勇者くん と 魔王くん』をお楽しみ（できるんかな？）下さい。

始まり始まり

「覚悟おおお！」

魔王城の玉座にて叫び声が響きわたった。

叫び声を上げた声の主は熱意溢れんばかりの瞳を持つ端正な顔立ちの青年だ。体格は俺と同様で細身の長身。出で立ちは鎧と真っ青なマントと大きな両刃剣といったところだ。

「うおおお！」

青年は叫び声を上げながらこちらに近づき剣を振り上げた。……いや、振り上げようとした。

「うわッ！」

青年は派手に転けた。どうやら振り上げようとした剣が重くて自身のバランスがとれなくなり、派手に転けてしまったようだ。

「……はぁ」

青年が作り出した光景に思わず嘆息する。

「くッ！　そこッ！　溜め息をつくな！」

青年は嘆息する俺をみて怒声をあげた。怒声をあげるぐらいなら少しはまともになって欲しいと切に願う。

「溜め息をつかたくなければちゃんとしろ。大体、剣の重みに負

けて転ける何てことはあり得ないぞ」

青年の失態を正直に告げてやると青年は黙った。とりつく島もないとは青年のような状態を言うのだろう。

「だいたいだな。歴代でも流石にお前程に酷いのはいなかっただろう。そこまでお前は出来損ないだということを自覚しろ。まったくどうしたものか……」

率直な感想を青年に告げた。すると、青年はまた黙るのだろうと思ったが、顔を真っ赤にして口を開く。

「ああ俺は確かに出来損ないだよ！　だがな、お前だってそうなんじゃないのか？　偉そうに話すだけで何も出来ないんだろうよ！　何か凄いことが出来るようならやってみろよ！　ケツ！　口だけの野郎がッ！」

正直に青年をぶち殺そうかと考えた。こんな奴にコケにされたとは酷く不愉快だからだ。だが、俺は大人なので我慢する。

それよりもこのままコケにされたままでは氣にくわないので青年の言う凄いことをやってやろう。

「ほら、黙ってるだけじゃないか。やっぱりお前も凄いこと出来ないんだな」

俺が思案している最中に青年はどうやら勘違いをしてしまったようだ。勘違いをする青年のおかげで一石二鳥の凄いことをやることに決めた。

「まあ見ていろ」

俺はそう言う手と手を前に差し出して、魔力を集束させる。魔力は赤き光を放つ。

まだ魔力を集束させたただけなのに青年は呆気にとられていた。そんなことも出来ないだろうと見くびられていたようだ。まったく舐められたものだ。

「数々の非礼の報いを身体で受け止めろ」

集束させた魔力を用いて魔法を放つ。もちろん放つ先は青年に向かってだ。

一瞬、青年は疑問を浮かべた表情をしていたが、魔法が直撃した直後に表情は変わる。

「うわあああ！」

青年の叫び声が暗い玉座に響きわたった。

叫ぶようになったのは俺の火の魔法が直撃したせいだ。ただ、火の魔法で青年が死ぬことはない。

火の魔法は威力を限りなく抑えて、回復魔法も付加し死の一手手前で燃やされ続けるようにしてある。だから死ぬことはない。ただ、地獄を長く味わうだけだ。

「た……助けてくれ！」

燃え続けている青年が助けてくれと懇願する。

「……解った。助けてやろう」

青年の様子を見て少しは反省しただろうと考えて魔法を解除して

やることにする。

俺が手を振りかざすと瞬時に火は消えた。

火が消えたことにより、青年は安堵の表情を浮かべ口を開いた。

「流石に俺は凄いな。あんなに火を浴びても死なないなんて何か凄いことをしていたのだろう。それに俺が凄くないなんてあり得ないはずだ。うんうん」

俺が攻撃魔法に回復魔法の付加という凄いことをしてみせたのに青年は自分の功績だと捉えたようだ。まったく何も解らない勘違い野郎だ。現実を教えてやろう。

「お前が死ななかったのは俺が回復魔法を攻撃魔法に付加したおかげだ。そんなことも解らないようでは凄いどころかただのバカだぞ」

俺の言葉に青年は狼狽えた。

「いや、それぐらい解っていたさ。冗談を言ってみただけだ。だいたい俺が解らないはずない」

狼狽えたようだが直ぐに嘘をついて取り繕う。

本日二度目の嘆息をする。余りにも情けない。

青年はまだ何か言っていたようだが、俺の耳に届かない。青年をどうしようかと思案する。

そしてハッと妙案を思いつく。

「おい、お前。いや、勇者よ。俺がお前を歴代最強の勇者にしてやろう。そして、俺と歴史上最大最強の死闘しろ」

青年——勇者を魔王である自分で育て上げて末代まで語られるよ

うな死闘をすればいいのだ。そうすれば、俺が幼き頃に夢みたことを実現出来る。何て凄いい妙案だ。

「ちょっと待てよ。勝手にそんなこと決めるなよ。俺はそんなこと――」

「口答えするな。お前は俺に従えばいいんだ。文句があるならば力付くで通してみろ」

勇者は「クッ……！」と声をあげる。

そんな不満顔の勇者にとっても良い事実を教えてやる。

「それより、勇者よ。ここで今すぐ殺されないし、強くもなれる。こんな俺の案はお前にとっても良い案なはずだぞ」

勇者は考えるために黙った。そして、考えた結果を口に出す。

「そうだな。まあ元々俺は凄いが少しばかり魔王より実力が下みただけだからな。その実力を埋めるためにその案に乗ってやろう」

まずはこの見栄を張るところから鍛えなおさないと。

それよりもとりあえず勇者が魔王の手により育て上げられることが決定した。

そうして、勇者と魔王の奇妙な関係が始まった。

抜け！ 漆黒の短剣！！ ――&l t;勇者& g t;――

突然だが、俺は勇者だ。

昔から永らく続いている勇者の末裔と魔王の末裔の戦い。

その勇者の末裔である俺は現代の勇者ということになっている。

それで俺は魔王に戦いを挑み、惜しくも敗退した。

そして、此度の戦いは魔王に軍配が上がって終わりを迎えた――
訳ではなく、俺は今も生きている。

但し、俺は今なお、魔王城にいる。

それでは捕らえられたのだろう。と思うのは自然だろうがそれも違う。

俺は今――。

「そのへっぴり腰は何だッ！　せっかく俺がみてやっているのにそのへっぴり腰はないだろう！　お前はそれでも俺と戦って勝つつもりはあるのかッ！」

魔王ことヴェルト・ラウム・ユーベルに叱られていた。

そう俺は今、魔王ヴェルトの元で修行を積んでいた。

ちなみにヴェルトは人間とさして変わらない見た目だ。瞳は鋭く鼻はスラッと高いのが特徴で端正な顔つきだ。髪の毛は黒くミディアムヘアで目のあたりまであり、瞳は黒き輝きを放っている。見た目年齢から人間で言う美青年といって差し支えないだろう。

「クッ！　もう一度ッ！」

魔王城の玉座の前で大きな両刃剣を振りかざす。……いや、振りかざそうとした。

俺は振りかざす前によろめいて体勢を崩した。どうやら、この剣

は少し重いような気がする。

「まったくくなってないな。そこまで酷いと言うこともないな」

ヴェルトは溜め息混じりに言った。

「少しばかり筋力が上がれば大丈夫なんだよ！」

ヴェルトに対して言い返す。俺がもう少し筋力が有ればヴェルトなんか目じゃないはずだ。そう俺だって勇者なんだ。

「お前、減らず口は相変わらずだな」

ヴェルトは呆れたように言った。酷くバカにされている。

「減らず口なんかじゃない！ 真実を言ってるだけだ！ それよりもヴェルトも俺のこと名前で呼べよ！」

「フンッ！ 名前で呼んで欲しければ、もっと認めれるような奴になれ。そうすれば、呼んでやろう」

ヴェルトはいつも俺のことを「お前」呼ばわりする。ちなみにだが、俺の名前は「お前」とかではない。一応。

「それよりもヴェルトと呼ぶな。せめてヴェルト様としろ。俺は認めた奴にしかヴェルトと呼ばせん」

「様なんて仰々しいだろうが。俺はそんな風に呼ばねえよ」

まったくヴェルトは何様だ。自分自身に様付けとは大層なことだ。

「俺は魔王様だぞ。だから、仰々しい訳などない」

そうだったヴェルトは魔王様だったのだ。忘れてた。
それでも俺はヴェルトに様付けはしない。

「でも俺は魔族ではないし、勇者だし様付けしないよ。まあそれ以上
にヴェルトなんかの様付けしたくないって気持ちが強いらな」

そうヴェルトに様付けるのは嫌だ。感情的に嫌なのだ。それが一
番の理由。

「……お前はまた地獄を味わいたいようだな」

ヴェルトはそう言いながら、右手に魔力を集束させていく。
デジャブだ。この光景をどこかで見たような気がする。

——思い出したアレは俺が魔王城に来た時の話。燃やされ続ける
『永遠なる業火』の拷問魔法だ。

「待て待て待てッ！　ここは落ち着いて話し合おう！」

あんな地獄をもう味わいたくない。だって痛いし、熱いし本気で
キツイ。

俺の必死なる訴えを聞いたヴェルトは動きを止めた。

「ふう、ヴェルトもやっと話がわかるようになったか。まったく、
一時はコイツはバカなのかと——」

「非礼を詫びろ」

「え？」

ヴェルトは手に集束させた魔力を用いて魔法を放つ。『永遠なる
業火』を俺に向かって放った。

「ギャアアー!!」

再び、俺の絶叫が魔王城に響き渡った。

「ハアハアハア……」

俺は荒々しく呼吸する。

そんな俺を見ていたヴェルトは口を開く。

「これで自分の立場を解ったか！ まったく、バカを相手にするのも疲れる」

俺のことを酷くバカにした口調で言った。

それにしても失礼な奴だ。俺はそこまでバカじゃない。立場くらいは解っている。

俺の立場それは――魔王を滅する勇者だ。そうこのヴェルトよりも凄い立場なのが俺だ。それくらいは解っている。それくらい解っていることを証明しておこう。

「自分の立場くらい解ってる。俺が勇者でヴェルトよりも上の立場だってことはな」

誇らしげに胸を張って言った。これでヴェルトも俺を認めるであろう。まったく、世話の掛かる魔王様だ。

さっそくヴェルトは俯いてワナワナと奮えていた。どうやら、感動し過ぎて奮えているのであろう。感動を誘う俺はやっぱり偉大だ。ヴェルトにも見習って欲しい。

ヴェルトはクワツと顔を上げた。

その表情は酷く赤みがかっていた。興奮し過ぎだろヴェルト。そんなに感動されたらいくら俺でも恥ずかしい。

「いや、そんなに心が奮えるとは思わなかったよ。でもヴェルト、恥じることはないよ。俺は偉大だから仕方ない」

感動をして止まないヴェルトにこれ以上、偉大だと示さなくていいという気持ちを込めて言った。

その偉大な俺の言葉を聞いてかヴェルトは更に顔を紅潮させた。また偉大だと思わせてしまった。まったく、俺ってば。

「……お前が偉大だと？」

ヴェルトは震えた声で言った。

「ああ、そりゃ偉大だろう」

当然、といった声で返す。まあ当然だからそういった声にはなる。

「偉大なら……」

ヴェルトは言いながら、手に魔力を集束させた。あれ、デジャブ？

「これぐらい防いでしろ！ このゴミがッ！」

ヴェルトは『永遠なる業火』を放った。

「これ、三度目ええええ！」

俺は必死になって避けようと剣を捨てて横に飛び派手に転がる。
なりふり構わず横に飛んだおかげで直進してきた『永遠なる業火』
を避けることが出来た。

「それで防いでみたつもりか！ 甘いわッ！」

ヴェルトは叫んだ。叫んだ内容が気になり、俺は避けた『永遠なる業火』を見た。そしてギョツとする。

「ウソッ！ マジかよッ！」

ある光景を見た俺は驚いた声をあげた。

ある光景——それは避けたはずの『永遠なる業火』が再度、俺に向かってきていた光景。

これでは『二度あることは三度ある』と証明してしまう。それは是非ともキツイので否定しなければ。

俺は必死に周りを見渡して何か回避する術がないか確認する。

「無駄だッ！ この俺が放った魔法を防ぐなど俺の魔法と同等の力がなければ防げん！」

ヴェルトは己が魔法の威力を説明した。もっと嬉しい説明をしてほしいものだ。

「クッ！」

俺は思わず呻き声をあげる。『永遠なる業火』は俺を弄ぶようにゆっくりと詰め寄ってきた。ゆっくりといってもこのままでは俺のもとへ到達してしまう。

必死に周りを見ても特に役に立ちそうなのは――。

「これだッ！」

俺は壁に掛けられていた漆黒の短剣を手にとった。これは魔王の玉座にある剣だ。だから、凄い剣に違いない。

俺は漆黒の短剣を右手に持って構えた。

漆黒の短剣は何故か俺の手に馴染むような感覚があった。

「お前がその剣を扱えるものか！ 大人しく焼かれろ！」

ヴェルトは俺の姿を見てそう言い捨てた。

「そう簡単に諦めてたまるかあああ！」

俺は叫びながら漆黒の短剣を『永遠なる業火』に向かって振るう。絶対に斬ってやる。諦めてたまるものか。あんな目にあうのは――もうゴメンだ。

「ガキィッ！」

俺の斬撃が『永遠なる業火』とぶつかりあった。

どうやら、一瞬で弾かれるような結果には繋がらなかったようだ。

「何ッ!？」

ヴェルトは予想外だったようで驚きの声をあげた。
だが、まだ本当に予想をぶった斬ってはいない。俺はそうなるように漆黒の短剣を持つ手に力を込めた。

「う……おおおおお！」

全力を振り絞るように叫び声をあげながら力を込めた。
漆黒の短剣はそれに答えるように黒き光を発した。

「まさかッ!？」

ヴェルトが驚きの声をあげた。
その声が聞こえた直後に『永遠なる業火』が俺の手によって斬られて消滅した。

「……はは、やったぜ」

俺はやってのけた。ヴェルトの予想を斬ってやった。
そのヴェルトは余りの驚きで固まっていた。
今まで俺が予想外な程に期待外れでしか相手を驚愕させられなかった。だが、今回は違うようだ。これは気分が良いな。

「どうだヴェルト! やっぱり俺はすご——」

俺はそう言いながら床に倒れた。何故か解らないが疲れたようだ。
俺は床に突っ伏したままに瞳を閉じていく。

「……今後はお前を名前で呼ぶ^{グレイ}」

俺が瞳を完全に閉じて意識が落ちる前にヴェルトは俺を名前で呼ぶと決めたようだ。

それを聞いた直後に気が抜けて意識は闇へと誘われた。

瞼を動かして目を開けた。

飛び込んできた映像は綺麗な白い天井であった。

どうやら俺はベットに横たわっているようだ。身体を起こして周りを見渡す。

周りを見渡すと部屋はとても広いことが解り、そこには高貴な雰囲気漂う絵画、置物、赤い絨毯、樹の机があった。また、自分が横たわっているベットも質のいいベットであることにも気がつく。

部屋はとても綺麗にされており、そこは魔王城に旅立つ前に案内された城の客室と遜色なかった。いや、この部屋のほうが綺麗だ。

「ここはどこだ？」

俺は記憶を辿る旅に出る。

……ふむ、俺は確か、魔王城の玉座にてヴェルトに訓練をさせられていたはずだ。

それなのに、俺は今、別の場所で横たわっていた。それに、ここは綺麗過ぎる。魔王城ではないはずだ。

ならば何故このような場所にいるのだろう。

まさか、俺が！

「そうか！ 俺が伝説の古代超魔法である長距離空間転移の魔法を無意識で発動させてしまって魔王城より脱出してしまったのか！ まったく、俺は底知れぬ程に凄い！ 凄すぎる！」

未恐ろしい程の力が俺には宿っているようだ。思わず身震いする。

「ふ……ふふ……ふははははははははッ！」

余りに凄すぎた俺に対して俺は高らかに笑う。

これならヴェルトなど片手で倒せるだろう。俺は本当に恐ろしいようだ。

「ヴェルトなんてザコ野郎は後回しでもいいな。先に俺の凄さを祝わなくてはな」

ひとしきり笑ったところで少し冷静になった俺は言った。

ヴェルト何かを基準にして比べる必要なんてない。あんな野郎はザコだ。いや、一応あれでも魔王か。それでも俺と比べると可哀想なことになるな。

それよりも祝をしなくてはいけないな。

俺は周りを見渡して――。

「誰がザコだ」

ドアに寄りかかってヴェルトが立っていた。いや、そんなはずはないはず。

「あれ？ 何でヴェルトがここに？ というよりもヴェルトがこんなところにいたら、おかしいだろう？」

ヴェルトがここにるのは可笑しい。何故ならここは魔王城ではないのだから。ならば、目の前にいるヴェルトは幻覚か偽物ってところか？

「ここは俺の城の一室だぞ。だから、俺がここにいるのも不思議はないだろう」

まったく、ヴェルトはまた可笑しなことを言う。冗談も休み休みにしてほしいとはこのシチュエーションのことを言うのだろう。とりあえず、ヴェルトには本当のことを教えてあげよう。

「こんな綺麗な高級そうな部屋が魔王城にあるはずないだろう？
まったく、ヴェルトは冗談が好きなんだから」

俺は真実をヴェルトに教えてあげた。

なのにヴェルトは嘆息した。そして、バカを見るような目で俺を見た。まったく、バカはどっちだったの。それぐらい解ってほしい。

「あのな、グレイなんか長距離空間転移魔法なんて使えるわけないだろうが。それに、魔王城だといっても客室ぐらいはある」

「え？ 俺って長距離空間転移魔法が使えるんじゃないの？」

「使えるわけない」

「え？ ここって魔王城なの？」

「そうだと言っている」

ヴェルトはキツパリと否定した。

どうやら俺のちよつとした勘違いだったようだ。まあよくあることだ。うんうん。

「うん？ ……なんで俺はここにいるんだ？ 確か、玉座で訓練し

ていたはずじゃあ」

「その訓練中にグレイが倒れたんだ」

「？」

訓練中に倒れた？

はて、何故だろうか？

全然、思い出せない。

「何でそんなことになったんだっけ？」

「俺が放った『永遠なる業火』を短剣でぶった斬った直後に倒れたんだ」

そう言われて倒れる前にしていた壮絶なる死闘を思い出した。

確か、俺は漆黒の短剣を手にとって、ヴェルトの渾身の魔法を斬った。そうぶった斬ってやった。

「あ！　そういえば、あの剣はどこに？」

あの剣は手に馴染み、手放したくない。たった一度、それも少しの時間しか手にしていないのに何故かそう強く想う。

「あの剣ならば、その台座の上だ」

ヴェルトはそう言って指差した。

ヴェルトが指し示す場所である俺の横の台座をみるとそこには鞘に収まった一本の短剣があった。

「鞘については俺の私物の至高の逸品だ。抜き身のままでは困るだろう。だから用意をしておいた」

ヴェルトが言う通り、あの時の短剣は鞘に納められていた。

俺はベツトから出てその剣を手にとった。

……剣は手に馴染む。俺は一度も短剣など手にしたことないはずなのだが何故だか馴染む。そもそも、剣自体をあまり手にすることがないのに馴染むとはおかしい話だ。

手に馴染む短剣をどうしても試しに振りたくなる。

「ヴェルト、ちょっとこの剣を使って素振りしてもいいか？」
「ああ、問題ないからいいぞ」

俺は短剣を鞘から抜く。

短剣は漆黒の輝きを放ち、見る者を魅了するほどの華麗さである。鞘もすごいのだが、やはりこの短剣に関してはさらに数段すごいことが身にしみて解る。

その短剣に魅了され逸る気持ちを抑えて振りかぶる。

「ビュッ！」

漆黒の短剣は黒の軌跡を描く。

斬撃はさして鋭くはないが、決して鈍くない。

「やっぱり、グレイには短剣が合うようだな」

「ああ、確かに振りやすいなッ」と

俺は返事しながらもう一度、素振りする。

そして、幾度か素振りを続ける。

……何度目か解らないほどに素振りを続けたあとにヴェルトが口を開く。

「グレイにはその剣が合っているようだな」

「ああ、この剣はすごく手に馴染むし、すごい気に入った」

「ならばだ。その剣をグレイにくれてやろう」

「いいのか？」

「歴代魔王が管理している秘宝だが、グレイにならなくてやろう」

ヴェルトは何気に太っ腹だな。これを渡してしまったら、大惨事だろうはずなのに。一応、その辺りについても尋ねておいてあげよ

う。

「でもヴェルト、本当に俺がコレを貰っていいのか？」

「ああ、いいぞ」

「大惨事になるのにいいのか？」

「まあ俺は魔王だから、城内の者がどれだけ騒ごうとも鎮火してやるさ」

「いや、そんなことは大惨事じゃないだろ？」

「うん？　ならば、グレイが言う大惨事とは何なのだ？」

「それは決まってるだろ。俺が強くなりすぎてヴェルトなんかすぐに追い抜いてしまうということだよ」

ヴェルトが固まった。どうやら、俺が強くなりすぎる事実を忘れていたようだ。

確かに俺に強くなって欲しかったが、余りにも強くなりすぎるのは問題があるのだろう。

「……俺を越えてしまうだと？」

「ああ、軽々とな」

当たり前の事実を尋ねるとは、相当参ってるのかと思われる。大丈夫だろうか。心配になる。

「……フツ、まあそれぐらいの気概であるほうがいいのかもしれないな」

間を開けたと思ったら急に落ち着いた表情で言った。豹変っぷりが凄いな。

とりあえず貰って問題ないのであれば、遠慮なく貰っておこう。

俺はもう一度、俺の剣を用いて素振りを行った。

「うん、やっぱりいいな。この剣、気に入った」

「それはそうと、この客室はしばらくグレイの部屋とする。だからといって余りに汚くすると馬小屋に移すからな」

「おう、解った」

「どうやら、この綺麗な部屋が俺の部屋となるらしい。ラッキーだな。」

「それから、今日の訓練はもういい」

「うん？ それよりもまだ俺に訓練は必要なのか？」

「……何故、必要でないのだ？」

ヴェルトは本当にオツムが弱いかもしれない。そんなことを聞かなくても赤子だって解るだろうに。

ヴェルトを買いかぶり過ぎていたな、と内心に秘めて諭してあげることとする。

「何故ってそれはヴェルトを越してしまっただし、訓練する必要はないと判断したんだよ」

俺はただ事実を述べた。これでヴェルトにも解るであろう。

しかし、ヴェルトは嘆息し、遠くを見るような目で俺を見た。まだ解ってないのかもしれない。まったく、バカだな。

「……本当のバカを相手にすると疲れるものだな」

「ああ、その気持ち痛い程に解る」

確かにバカを相手にすると疲れるよな。話が何も通じないし、大変なんだよな。

ヴェルトはもう一つ、大きな嘆息をした。ヴェルトも大変なのだろうな。気の毒に。

「俺はグレイと相手にするのが疲れると言ったのにそんなことも解らないのか。まったく、本物のバカは手におえないな」
「なッ！」

俺はヴェルトの発言に心底驚いた。

俺を相手にすると疲れる、など一度も言っていなかったはずだ。ヴェルトはバカだけでなく、痴呆も患ってしまっているようだ。さすがの俺もその事実には驚いて、声をあげてしまった。

「……まあ、ヴェルトが痴呆を患っていようとも大丈夫だよ。この先、何とかなるよ」

俺は慈悲深い声で言った。ヴェルトも少しは救われるだろう。

「何か話が噛み合っていないな。まあ、バカが相手だから仕方ないか」
「そうだな。バカが相手なら仕方ないよ」

すかさずフォローする俺はナイスだな。

「それよりもグレイ。グレイはまだ俺を越していない。だから、明日からも訓練を続ける」

「ヴェルトは何言ってるんだ。俺がヴェルトを越えていない？ そんなわけじゃないか。俺はヴェルトの渾身の魔法を斬ったんだぜ？ だから、認めたくないのは解るけど、越えてしまった事実是不変わらないよ」

「あれが全力だと誰が言った。俺の全力はあんなものではない」
「またまた、負け惜しみを言うねえ。素直に負けを認めたほうが潔

くてカッコいいよ」

「まったく、バカに何を言っても仕方ないようだな。ならば、身体で理解せよ」

ヴェルトはそう言うのと手に魔力を集束させて、『永遠なる業火』を放った。

「ヘッ！ 勝手に言ってる！ 俺が否定してやる！」

短剣を持って、『永遠なる業火』にぶった斬ろうとする。

「え？」

斬りつけた短剣は遠くへ弾かれた。いや、見事に弾かれたね。残念無念だ。

「つて！ ギャアアア！」

定番となりつつある火炙りの刑を受けた。

「くっそー、ヴェルトってば手加減ナシだな。本当にアレはキツいのによ」

一人言を呟いた。

今、この客室には俺一人だ。だから、一人言。でも常に一人言を言うわけではない。一応。

それにしても今日は色々あった。俺はベッドに身体を投げ出して今日を思い出す。

まずは魔王との想像を絶するほどの死闘。あれは歴史に残る戦いだった。ただ僅かな差で敗北してしまった。

そして、何故か魔王との師弟関係の結びを交わした。俺が少しばかり実力が劣っていたから、魔王の願いを受諾して師弟関係となったのだ。まあ俺に見込みがあったからどうしても弟子にしたかったのだろう。

魔王ヴェルトによる訓練。珍しく身体はダルいと感じずに動けた。ただ相変わらず大剣は重かったが。

その訓練中に漆黒の短剣で魔法を斬ったということ。初めて自分で少しは凄いことが出来た実感嬉しかった。

そして、何よりの想い出が――。

「コンコン」

「どうぞ」

外からノックされた。特に人を拒む理由もないので身体を起こして返事をした。

「グレイの荷物を返すのを忘れていたから持ってきた。それから、衣類については汚くなっているからコレを使い」

ドアを開けて入ってきたのはヴェルトだった。そして、部屋に入り手に持った荷物を机の上に置いた。

「ああ、解った。遠慮なく使わせて貰う」

「コレは今からグレイの物だから遠慮など全くいらん。それから疲れたからと言って風呂には入らんというのは許さんぞ」

「……プツ」

ヴェルトが言ったことに思わず笑んでしまう。

魔王が勇者の風呂の心配するなんてな。

ヴェルトは俺が笑顔になっているのを見て眉がつり上がる。

「何故、笑っているんだ？」

「ああ、何でもないよ」

「む！ ……何でもないならいいが」

「……プツ」

ヴェルトは無精無精といった感じで返事した。

その姿でまた笑ってしまう。

「クッ！ もういい！ 俺は部屋に戻る！」

ヴェルトは羞恥心に勝てなくなったのか部屋をズカズカと出ていこうとした。

俺はそのヴェルトに向かって一言声を掛ける。

「ヴェルト、ありがとうな」

ヴェルトは振り返って此方を見た。

「ああ、このぐらい礼にはおよばん。当然のことをしたまでだ。だから気にするな」

ヴェルトの言葉に対して思わず俺は笑んでしまう。ヴェルトは首を傾げて俺を見ている。ヴェルトからすると『普通』な事柄だからだろう。

「何故、グレイはそんなに笑顔なんだ？ ……まあ、いいか。それよりも、その剣は俺にとって大切な剣だ。だから、大事にしてやってくれよ」

「ああ、解ったよ」

「うむ、ではまた明日な」

「ああ、また明日な」

ヴェルトが部屋を出ていった。

出ていった姿を見届けた後に俺は台座へと手を伸ばして短剣をとった。

鞘は黒を基調としたシンプルな作りだが、作りには手抜きがない相当な腕の良い職人が作成したと解る程の立派な物だ。

その立派な鞘に納まってる短剣を抜いた。

「……やっぱり、この剣は良いな」

短剣は鞘と同様で黒を基調とした片刃反りの剣だ。装飾はシンプルである。だが、立派なというレベルを超越して伝説の武具以上とあって差し支えない程の逸品であった。息さえ吞んで見とれてしまうほどだ。

そして、何よりも俺にとって良いと思わせるところはこの手に馴染む感覚だ。馴染むだけでなく、力さえ湧いてくるような気がする。

「そんなわけないか。まあとりあえず寝るか」

俺は漆黒の短剣タナトスを置いて、床についた。

窓からは月の光が差し込み、部屋を照らす。それは、薄暗い光であったが、文字が読める程度には明るかったため、仕事をするぐらいいであればさして問題のない環境であった。むしろ、暗いが一人静かに仕事ができるため、はかどるくらいだ。

羊皮紙を手に取り、内容を読んでいく。そして、ひとつの羊皮紙に目を通し採決をして、また新たな羊皮紙を手に取り内容を確認していく。

採決を行った羊皮紙は山のように積み重なり、自身の伸長をも凌ぐほどとなっていた。

だが、新たに手に取り採決する必要のある羊皮紙の山は前述した山をも凌ぐほどの高さがあり、尚且つ山もひとつではなく、複数ある。

日々、ある程度の量をこなしてこの山を片づけていくのだが、少し休暇を取ると山が数個出来てしまう。これには最初は挫けそうになったが、なんとか精神を振り絞り、日々こなしていった。尚、今ではこれは自分の仕事として捉えているため、それほどの苦痛は感じられない。

「コンコン」

そして、またひとつの羊皮紙を片づけたところで、ドアからノックがした。

キリも良かったので部屋に招き入れることとする。

「入れ」

「失礼します」

部屋に入ること促すとエミリーが入ってきた。

背は女性にしても少し小柄で髪は綺麗な茶髪。髪型は腰に届くであろうほどのロングで、顔立ちは綺麗と言うよりも幼く可愛い。そして、服装はメイド服。そうエミリーはメイドであり、尚且つ俺の専属のメイドである。

「こんな時間にどうしたのだ？」

俺は本来であれば、寝ているはずのエミリーに対して質問をした。本日の職務については終わりだと告げたはずなのだ。

「そ・れ・は・私のセリフッ!!」

「ぐッ！」

目はほとばしる程に怒りの熱を宿していた。

見た目が幼く可愛い。そんなことは一切、今の形容には当てはまらない。むしろ恐怖の化身といったほうが適切ではないかと思える。

「失礼なこと考えたでしょッ!!」

「いや、考えていないぞ！」

何て鋭いメイドだ。このメイドはまさしく鬼のメイドであろう。

「また――」

「それより、こんな時間に何用でここに来たんだ？」

この話を続けても墓穴を掘るばかりであろうことは目に見えていたので話を戻しにかかる。

そう何故、こんな夜中の2時という時間に尋ねに来たのかを聞か

ねばならない。

「むッ！ まあいいけど。それよりもヴェルトは何でこんな時間まで仕事してるのよ！」

エミリーは俺と幼馴染であるため、魔王である俺のことを呼び捨てにする。ちなみにだが、俺は昔からエミリーには頭が上がらない。エミリーは俺の天敵だ。

こんな時間……俺が言った言葉をそのまま、投げ返された。それよりもここは上手い言い訳を考えなければ後がなくなる。

「そ、それはだな」

「そ・れ・は？」

何て威圧感だ。現魔王である俺をも遥かに凌ぐ威圧感。

この場にいるものが俺でなければ、すでに即死していただろう。

「……そ・れ・は？」

また、現実逃避している間に怒りのボルテージが上がってしまったようだ。

このままではまずい。

ここは正直に言おう。

「ここ最近溜っていた執務について夜のうちに片づけてしまおうと仕事をしていたのだ」

「いつも、いつも無理はするなっていってるだろうでしょうがッ！
！ ヴェルトはそのまま朝まで寝ないで仕事やってまた明日も同じこととしてというループをしてるでしょッ！！」

「だが――」

「言い訳はしないッ！ もう今日は寝るの！ 解ったッ！」
「あ、ああ、解った」

やむなく俺は白旗を上げた。

「それよりも何でこんなに仕事が溜ったの？ いつもならこんなことになる前に問題なく片づけていたでしょ？」

「それは出来れば言いたくないのだが」

「そ・れ・は？」

「……勇者との決闘が待ち遠しくて仕事が手に付かなかったのだ」

出来れば言いたくなかったが、エミリーに対して嘘はつけなさそうなので正直に告げることとした。

エミリーはポカンとした顔を作った後に、笑いだした。

「ぷっ！ あははははははは！ ヴェ……ヴェルトってば、いつまでたっても子供のままだったのね！ ぷぷっ！ ああーお腹痛いッ！」

俺が予想した通りにエミリーは大爆笑をする。だから俺は言いたくなかったのだ。

「でもヴェルトらしいね」

「俺はいつもそこまでバカではない」

「バカなんかじゃないよ。いつまでも子供な部分があるだけだよ」

「……どうしてもバカにされているようにしか聞こえんのだが？」

「まあ解んなかったらいいよ。それよりもその勇者との対決があまりにも期待はずれだったって話は本当なの？」

バカにされていることに対しては水に流して、今日のグレイとの

決闘のことを思い出す。

「はぁ」

すると、ため息を思わずついてしまった。

「その様子だと当たりみたいね。それじゃ勇者を鍛えて再決闘をするっていう話も本当なの？」

「ああ本当だ」

「そうかぁ。やっぱりヴェルトはヴェルトだね」

「うむ、俺は俺だが？ 何だいきなり？」

「ううん、なんでもなーい」

そう言ったエミリーはほくそ笑んだ。本当によくわからんヤツだ。

「そういえば、鍛えるにあたってその勇者は期待ありそうなの？」

「今のままではその辺の子供の魔族にでも負ける弱さだ」

「……まあ、残念ね」

エミリーはすごく残念そうな目で言った。確かに子供に負ける大人なんて期待できはしない。だからエミリーの思いとしては当然だろう。

「まあ、現状が酷いとは言え、力の一端である部分を垣間見た俺はある程度は期待出来ると思うのだから。それに何て言っただって俺が鍛えるのだから、ある程度期待は出来るだろう」

「うん、確かにそうだね。ヴェルトが鍛えるなら少しは期待出来るかも」

「うむ、明日からビシバシ鍛えてやる」

エミリーの中では皆無の可能性から少し期待出来る程度にまで俺が鍛えるという理由により納得したようだ。

「あッ！ それよりもヴェルト！ 明日も勇者鍛えたりするんですよ！ なら尚更、今日はもう寝るんだよッ！ 寝なかったら怒るからねッ！」

「うむ、わかった」

俺は観念して今日は寝ることとする。

まあ今は2時だから、3時には起きて仕事をしよう。

「もちろん、1時間仮眠したから何て言い訳は通じないから覚悟しておいてねッ！」

「う、うむ」

どうやらこちらの行動は既に予測済みであるようだ。

ここは観念するしかないだろう。

「まったく、その様子なら、本当は仮眠してと考えていたんでしょ！ ダメだからね！」

「ああ、解った」

本当にすべて筒抜けなようだ。

「じゃちゃんと寝るんだよ！ オヤスミ」

「ああ、オヤスミ」

エミリーはお休みの挨拶を告げて出ていく。

そして、俺も寝室へ向かうべく、執務室を出て廊下を歩いていく。

訓練 一一<t;魔王>一一

「ふあああ……」

寝ボケ眼な状態でグレイはアクビをする。

今から訓練します！

という気迫は一切見えない。これが自信からくる余裕なら『何処からその自信が出てくるのだ』と頭を抱えたくなる。

と思いつつ、その事は昨日に充分に知ったことなので今更驚くことでもない。

「ずいぶんと余裕そうだな。ただその余裕が続けばいいな」

「まあたぶん続くんじゃないね？」

「まったく……とりあえず、訓練を始めろぞ」

「はい、了解。……でまず何するの？」

「まず基礎能力の強化から始める」

「基礎能力の強化？」

基礎能力がどうしたの？ 問題でもあるの？

といったげな表情で返答してきた。まったくもって自分のことが解っていないようだ。

「ああ、グレイの基礎能力が著しく低いことから、まず基礎能力から鍛えることとする」

「ふーん、まあ解ったよ」

「では本日の訓練は走り込みを行う」

「思ったより楽そうだな」

確かに『走るだけ』となると脅しをかけた程、キツイ訳ではない。

だが、まだあるのだ。キツい訳が。

「まあ待て。説明はまだ続きがあるから聞け」

そう言つて前に手を出し魔力を集束させる。

そして『エンドレス・ヘルフレイム永遠なる業火』を出す。

「この俺が放つ『エンドレス・ヘルフレイム永遠なる業火』の特性は覚えているか？」

「……対象者を燃やし続ける？」

「ああ、それもあるがコイツには自動追尾という特性も備えていただろう？」

「……ああ」

「それで今から放つこの魔法の自動追尾の矛先はグレイだ。それでグレイはコイツに捕まらないように走り込む訳だ。どうだ、簡単だろう？」

「なッ!？」

グレイは驚愕の表情を浮かべる。たぶん、焼かれた時のことを思いだしてしまったせいだろう。あと、今から焼かれる時のことも。とりあえず、先程までの余裕は何処かに消し飛んだみたいだ。

「じゃあ始めるぞ」

「ま、待てッ……」

「問答無用!」

そう言つてグレイに向かって魔法を放った。

「つてギヤアアああ!」

グレイは勢いよく走り込みを始めた。叫び声を上げながら。

ちなみに魔法の初速は遅く徐々に速度が上がっていくという特殊な仕様とした為、一般人なら30分程度は逃げ続けられる。

よって、少なくとも見積もっても30分程度は逃げ続けられるだろう。そのあとは容赦なくやられるだろうが。

それから魔法が対象者に命中したり、消し飛んだ場合は使用者である自分には離れていても解る。

というわけで時間も空いたことにより、昨日残ってしまった執務を行うために執務室へと戻ろうとする。戻ろうとしたところで一言。

「期待してるぞ。頑張れよ」

「ギャアアあああ!!」

どうやら聞こえないほど余裕がないようだが、気にせず執務室へと直行した。

執務が一段落着いたことにより、一息漏らす。

まさかここまで執務が出来るとは思わなかった。これで今晚は遅くまで仕事をしなくてもいいだろう。

……ん？　　そういえば、何故ここまで執務が出来ると思わなかったのだ？

何故だったか……。

「……そういえばアイツはどうなっているのだ？」

思い出した。俺は 그레이 の訓練中に暇が出来たから仕事をしていたのだ。ただ、それは30分程度を予想していたのに3時間は経過している。

魔法が消滅しているのを見逃したのかと思い、魔力探知すると確かに魔法は存在した。

ならば、何故なんだ？

疑問を浮かべながら執務室を出て 그레이 の所へと足を進める。

あの魔法には徐々にスピードが上がる特殊な仕様になっていたため、これだけ時間が経った今ではかなりのスピードに達しているはずだ。それこそ、走り続けて逃げるのにはけっこうな実力者ではないといけないぐらいに。

何か特殊な手を用いて逃げたのだろうか？　それとも……。

考えている間に辿り着いた。そして、そこでは 그레이 は走っておらず突っ立っていた。

そして、素早く動きブレた。

そう、 그레이 は追尾してくる永遠なる業火を瞬間的に速く動き回避しているのだ。エンドレス・ヘルフレイム

確かにスピードの上がった魔法を走り回って避け続けるよりも効率の良い避け方だ。

だが、そう簡単に一朝一夕で出来るようなことではない。まして

や自分が知っているグレイなら尚更だ。

グレイはかなり集中しているようで俺が来たことにも気付いていない。本当に精度の高い集中力だ。

そうこうしている間にもグレイは何度も魔法を避け続けている。そして、幾度目か回避したところで魔法は消失する。どうやら、込めた魔力が切れたようだ。

魔法が消失したところでグレイはドカッと座り込む。息も切れ切れになっている。体力的にも精神的にもかなり消耗した様子だ。

「思っていたよりもかなり良かったぞ」

「ハア、ハア……ああ、俺も、そ、う思うよ……ハア、ハア」

素直に称賛したところ、素直な返答があつたことに驚く。グレイにも色々と自覚が目覚め始めたのだろう。うれしい限りだ。

そうこう頭の中で考えて返答出来ないでいるうちにグレイは息を整えて再び口を開く。

「まあ良く考えれば俺だから当然か」

いや、前言撤回だ。グレイはグレイだ。^{バカ}

見直そうとした俺が間違っていた。

「……はあ」

「うん？　なんだ溜め息なんか吐いて。もしや、俺にすぐ実力を抜かれることを気にしているのか？　まあ、それは……なんだ……その……し、仕方ないことなんだから気にやむなよ」

嘆息の意味をはき違えたグレイは励ましをくれた。突っ込むところが多すぎだ。

だが、今は良しとしよう。グレイは本気で頑張ったのだから。

「ふん、まあ良いだろう。それよりも次の訓練に移るぞ」

「ええー今日はもう終わりじゃないのかよ」

「そんな訳はないだろう」

「へいへい、解りましたよー」

「まあ、次の訓練はとりあえず測定をメインとするつもりだから、大丈夫だろう」

「ふーん、で何の測定？」

今からやる測定は本来、小さな頃もしくは修行を積んだ者がやることだ。だから、普通は今することではない。だが、昨日と先程のグレイを見て気になったのだ。いや、一つの予測が出来た。だから測定を行う。

「それは魔力と属性の測定だ」

そして、恐らく予想はあたっているはずだ。それも測定をすればハッキリするだろう。

訓練 一一&1t;勇者>一一

「期待してるぞ。頑張れよ」

「ギヤアアあああ!!」

気軽に言っ去るヴェルトめ、いつか殺してやるううう!

あッ! でも元々殺すつもりか。じゃあアイツがもつとも悔しがるように殺ってやるぜ!

というかヤベエよ! 逃げないと焼かれるうううう!

ってそのわりに意外と他のこと考える余裕があるな。なんでだ? うーむ、何か俺の身体軽い気がするな。というよりか必死で走り始めたと思っていたのに何故か余力がかなりあるな。まだまだスピートも出るし、体力もまだまだあるぞ。

それに後ろを見てみるとまだ魔法との距離は少しあるしな。

大体、追尾してきている魔法の速度は遅いと感じられるくらいだし。

うん? なんだ思ったより余裕だな。

ワハハハハッ!

ついに来たか! 俺、無双の時代がッ! これでヴェルトも殺れる! 殺ってやるう!!

どうやってやろうか。ふむふむ、あれがいいかな。いや、ああ殺ってやろうか。悩んでしまうな。うーむ。

「アチッ!」

あれ? 何か尻が熱い。いや、まさかねと思いつつ後ろを振り返ると……やっぱり炎がそこまで来ている。うん、真後ろにあるね。近いね。熱いね。

っつーかうソ!? 何で!? さっきまではもつと余裕があった

はずなのに!？

いや、っつーか速度上がってるよね？

「ゴオオオオオッ！」

しばらく後ろを観察しながら走っていると後ろの炎が音を立てて激しさを増しスピードが速くなった。

ってもしかして段々と速くなるとかじゃねーのか！ チクシヨウ
ー！！

死ぬ気で逃げてやるううう！！

……そして、ヴェルト殺してやるッ！！

「ハアハア」

あれからずーっと逃げっぱなしだ。

その間、魔法の速度は徐々に上がって、今ではまったく軽口が叩くことは出来なくなってしまった。

おおよそ2時間は経過しただろう。もう体力もスピードも限界に差し迫っていた。

「も、うい……いだろ。無……理……だ」

己の限界と相談した結果、弱音を吐いてしまう。

大体、これだけもったほうが上出来な話だ。いつもであれば、この半分も持たなかったはずだ。自分でもそれぐらいは解る。

言い訳などではない。本当に頑張った上での諦めなんだ。ヴェルトも納得してくれるだろう。だから、もう……無理だ。

——ふと、無理だと諦めようとした時にヴェルトの最後の言葉が浮かぶ。

そう『期待してる』という言葉が。

あの言葉は勇者の末裔ではなく、俺グレイに対してくれたのだろう。俺グレイに対して『期待してくれた』のだ。

そんなことは初めてだ。

俺は俺だ。グレイだが、周りからするとそれ以前に俺は『勇者の末裔』

だった。

だから、俺グレイに期待なんてするヤツは居なかったはずだ。

でもアイツはしてくれた。グレイ俺に期待してくれた。

だったら不格好でも何でもいいから限界まで悪足掻きしてやるッ！
それこそが期待に応えるってことだろうがッ！

決意を胸に秘め、足に力を込める。

「ッ!？」

足に力を込めるが身体は正直で力が入らない。スピードもさして上がらない。

やはり限界が近いのは確かだ。

くそッ! どうにかして……。

何か案がないかと考えた時に思い出す。この魔法を避けた時のことを。

確かにこの魔法は追尾機能を備えていて避けても再び追ってくる。だが、避けられた後に再度追尾するには一度止まってから反対方向へと転向する必要がある。それにより、時間を少し稼げる。

それから、逃げるではなく避けるのにはスピードも持久的に必要とならず、瞬間的にさえあれば事足りる。

「ふう」

一呼吸つき、足を止め振り返る。

「ッ!？」

振り返ると炎は眼前にまで迫っていた。

やはり、相対すると迫力が違う。だが、負けてはいられない。

俺はヴェルトの期待に応え、期待を越えてやるんだ。

「うおおおおッ!！」

気合いを声として発しながら力いっぱい横へ避ける。

「ブォッ!」

耳元で炎が直進していく音を捉えた。

どうやら避けることが出来たようだ。炎は真横を通過した。

「ふう」

一呼吸つき、集中力を高める。

まだ一度避けたただけだ。これから、何度だって避けなければなら
ない。

だったら避けてやる。諦めてなんてやらない。

何度目かも解らないがずっと避け続けている。

集中力はかなり高い状態を維持していて俺と炎しか認識していな
い。

何度か避けているうちに炎のスピードが徐々に上がっていくが、
それ以上に俺の瞬間的なスピードが上がっていく。

昨日の俺が今の俺を目の当たりすると別人だと思えるくらいにスピ
ードが出ている。

また、炎が目前へと迫った。俺は必死に動き避ける。

そして、炎は横を通過して消えた。

何故、炎が消えたのか解らないが、炎が消えたことで集中も途切れて疲れを身体に感じる。

かなり疲れていたためか身体から力が抜けてドカツと腰を下ろす。

「思っていたよりもかなり良かったぞ」

いつの間にか現れたヴェルトが声を掛けてきた。

「ハア、ハア……ああ、俺も、そ、う思うよ……ハア、ハア」

俺は満身創痍ながらもなんとか返答する。身体が限界を突破してしまっただけ。余裕がないんだよ。

あと俺自身、こんなにまでいける何て思ってたなかった。

まあ、なんだその。ここまで頑張れたのはヴェルトが俺に期待してくれたからという要因は大きいかな。

——ん？

でも頑張って尚且つ秘められた才能を開花させたのは俺自身だし、良く考えると俺のおかげだ。うん、やっぱり俺ってすごいな。

「まあ良く考えれば俺だから当然か」

思ったことを口にする。

ヴェルトが俺の凄さを理解出来ていないかもしれないので捕捉として言ったのだ。

色々勘違いしているのは傍から見ていると可哀想だからな。ちゃんと理解してもらわないとな。

「……はあ」

「うん？　なんだ溜め息なんか吐いて。もしか、俺にすぐ実力を抜

かれることを気にしているのか？」

ヴェルトは嘆息した。

俺の偉大な程までの凄さにヴェルトは自身の小ささと比べ落胆したのかもしれない。

理解してもらえたなら嬉しい。だが、ここまで凹むとは予想していなかったな。

仕方ない。俺のせいで凹んだのなら俺がフォローしてやろう。

「まあ、それは……なんだ……その……し、仕方ないことなんだから気にやむなよ」

相変わらず俺のフォローは完璧としかいいようのないくらいの出
来栄えだ。

自分のことが自分で怖くなる。この感覚は才能グレイある俺にしか解らないのかもしれないな。

「ふん、まあ良いだろう」

どうやらヴェルトは立ち直ったようだ。これも完璧な俺のフォローのおかげだろう。

「それよりも次の訓練に移るぞ」

「ええー今日はもう終わりじゃないのかよ」

「そんな訳はないだろう」

「へいへい、解りましたよー」

「まあ、次の訓練はとりあえず測定をメインとするつもりだから、大丈夫だろう」

「ふーん、で何の測定？」

測定と聞いて嫌な予感がする。当たらなければいいが。

「それは魔力と属性の測定だ」

どうやら俺の予感が的中したようだ。

「終わった後で美味しい物でも食べに行こう」

「うん、解ったあ！」

「あらあら、外食せずとも私が美味しい手料理を作りますよ」

「だが、どうせならたまには外食も良いかと思うぞ」

「でもやはり愛し子のお祝いだからこそ手料理にすべきだと思うわ」
「うーむ、それもそうだがやはり——」

黒の衣装を身に纏うお父さん。赤を基調としたドレスを身に纏う綺麗なお母さん。

二人は今日の晩御飯について話し合っているようだ。

祝いは祝いとして豪華なご飯を食べるというのは二人とも同じ意見だ。だが外か家かで食べることで揉めている。

揉めていると言っても喧嘩しているというわけではない。笑顔は絶えずお互いにじゃれあっているような感じだ。その光景を見ていて、僕も笑顔になる。

「——はどっちがいいんだ？」

「もちろんママの手料理よねー」

「こらこら、強制しない」

二人は笑顔で話しかけてくれる。これにまた幸せを感じて笑顔になる。

「えーと、えーと……」

どっちにしようか考える。だけど、簡単に答えが出せずに悩む。どっちも良いから仕方ない。

「うーんと……」

「いっぱい悩んでるみたいだな。ならこうしようか。今日の出来が良かったら、手料理ということで。それで出来が凄く良かったら外食。どうだ？」

「あら、あなたズルいじゃない。だってこの子なんだから、凄く良い出来に決まってるじゃない。勝負にならないわ」

「はははは。まあ、そうだな。でもほら、時間だ。これで決定だ」

「まったくズルいわ」

「ほら二人とも早く行くぞ」

「「はい」」

「この水晶の上に手をおいてね」
「はい」

ブカブカの修道服を着た赤毛ツインテールの小さな女の子に促され、水晶に手を置く。

「今回はどのくらいの凄い結果が出るんだろうね？」

「そんなの解んないよ。でもやっぱり凄い結果でしょ」

「やっぱり凄い結果が出るのかしら？」

「そりゃあ当たり前だろう。アイツは『――』なんだから」

「そりゃあそうよね。だって『――』なんですから」

周りの人たちが騒いでこちらを見ていた。

教会にはかなり人数が集まっている。満員といった様子だ。

「ほら、その人達黙って下さい！ そろそろ『――』の測定を始めますので」

ガヤガヤとうるさくなっていた周りを注意して女の子は測定を始めようとする。

女の子は僕と同じ歳なのに凄く立派だ。確か女の子は天才と名高い女の子呼ばれていた。だから、僕と比べて大人なんだろうな。といても服は大きすぎるようでブカブカな感じが僕より子供にも見えるが。

「それでは測定を始めます。汝の魂は――」

周りが静かになる。

ここにいる全ての人達が僕の結果を待っている。いや、期待しているのかな？

さすがに緊張してきて手が汗ばむ。だけど僕は『――』だ。だから大丈夫。いや、結果を出さないと。

緊張のせいか時間がとても長く感じる。

「……え？ ウソ……」

何十分も待ったような感覚の後に女の子が声をあげた。たぶん、測定が終わったのかな？

でもまだ驚愕の表情のみをただけだ。結果はまだ解らない。ただ、表情からかなり変わった結果だということが解る。どうなのだろう？ 凄かったのかな？

「え？ 何々？ 凄かったのかな？」

「たぶん、そうだろうな」

「歴史を覆すような凄い結果だったのだろう」

「いやあ、俺はこの時代に生まれて良かったね。これで資源が豊かになる」

周りもうるさくなる。周りの期待も大きくなる。笑顔が伝播している。

そんな中、僕も期待が大きくなる。ワクワクだ止まらない。

そんな状態が続いた後に、女の子は表情を取り戻し口を開く。

「すみません。動揺してしまい、結果発表が遅れました。では結果発表します」

「ゴクリ」

この場に居合わせている全ての人間が息を飲んだ。それだけ結果が待ち遠しく、期待が高い。

そんな中、女の子は口を開く。

「魔力はゼロです」

「え？」

僕は思わず啞然としてしまった。

そして誰もが結果発表の内容を理解しきれていないようで静寂が続いている。僕自身も当然、理解しきれていない。本当に？ 魔力がゼロなの？

「ま、魔力ゼロなの？」

僕は理解できないため、確認をする。というよりも間違った結果を聞いてしまったんだと。そう信じてもう一度確認した。

「……ええ、魔力ゼロです。でも——」

聞き間違っていたということではなかった。

「ありえねえだろッ！ 今度の戦いどうするんだよッ！」

「最悪だ。何て時代に生まれたんだ。クソ！」

「そいつは『——』じゃあねえッ！ 偽者だあ！」

静かにしていた周りの人達から罵詈雑言が飛び交う。
周りを見渡すと全ての人達が睨んでいる。皆は笑ってはいない。
怒りが伝播する。

恐怖のあまりにお父さん、お母さんを捜して見つけ出す。
お父さん、お母さんは睨んでおらず。笑顔であった。
そのことに安堵し、飛び込むように走り抱きついた。

「？」

抱きついた後にポンッと突き放された。
いつもなら抱きしめ返してくれるのに。
顔をあげるとそこには笑顔のお父さん、お母さんがいた。

「おとうさ——」

「誰が『お父さん』だ」

「まったく勘違いも止めて欲しいわね」

「えッ?？」

お父さんとお母さんの言葉に驚く。お父さんがお母さんが。何で聞き間違いかな?

聞き間違いだと信じてもう一度抱きつく。

「おとうさー」

「離れろッ!!」

「わッ!」

今度は強く突き放され、尻もちをつく。

驚きながら、見上げてお父さんとお母さんを見る。

お父さんとお母さんは酷く顔を歪ませていた。周りの人達と同じ表情をしていた。

そしてゴミを見るような目で僕を見ていた。

「はぁ、まったく赤の他人をここまで育てたのに収穫ゼロか! 何れは育てた恩を大きく返してくれると思ったから育てたというのに!」

「まったくだわ。子供なんて鬱陶しいけど、大きな恩があるってだけで我慢出来ていたのに」

「?？」

お父さんとお母さんが何かを言った。そう何かを。僕は解らない。解りたくないッ!!

「まだ解らないのか? だからガキは嫌いなんだ! 俺はな、お前の親ではない!」

「私もそうよ。あんたみたいなバカなガキの親がなけないわよ!」

解りたくない！
解りたくないッ！
解りたくないッ！！

「ガキがッ！
もうお前の面倒をみる理由もない！
勝手に生きろ
！」

「まったくよ！　もうガキの面倒なんてイヤよ！　いきましよう」
「ああ行くぞ」

何が何だか解らない。解りたくないッ！

解りたくない！　解りたくない！　解りたくないッ！　解りたく
ないッ！　解りたくないッ！！　解りたくないッ！！　ワカリタク
ナイ！　ワカリタクナイッ！！　ワカリタクナイッ！！！！　ワカリ
タクナイッ！！！！　ワカリタクー——！！

魔力測定

――<t>魔王>――

グレイの魔力測定を始めるための準備を行う。

魔力測定を行う場所はグレイの自室とした。魔力測定には魔力測定用の水晶があれば行えるからだ。

ちなみにだが、魔力測定で解るのは魔力の量、質、属性となる。

魔力の強弱については水晶を用いて測定を行う者に暗闇内にイメージされる光の強弱や大きさや形により判別する。

少し曖昧な測り方にはなるが大まかな魔力が解る。

また属性については光の種類によって解る。

『光の強弱、量』

魔力量に比例した大きさとなり、魔力量のクラスに適した質によって光の強弱が決まる。

下級 .. 0 ～ 30 c m 程度 ⇒ 人間の兵士クラス

中級 .. 30 ～ 100 c m 程度 ⇒ 下クラス魔族、人間の隊

長クラス

上級 .. 1 ～ 10 m 程度 ⇒ 中クラス魔族、人間の大隊

長クラス

最上級 .. 10 ～ 100 m 程度 ⇒ 上クラス魔族、人間の將軍

クラス

伝説級… 100 m 程度 ⇒ 勇者、魔王、魔将軍、英雄

クラス

究極級… 測定不能 ⇒ 神クラス

『形』

形には本人が宿す魔力の本質を示す。
クラス別による形はない。

『光の種類』

属色は赤、青、黄、緑、白、黒の色を基本とする。

属種は純正属性と単属性と複属性というものがあり、色の純度や色そのものにより決まる。

『属色』

赤	⇒	火属性
青	⇒	水属性
黄	⇒	天属性
茶	⇒	地属性
白	⇒	光属性
黒	⇒	闇属性

『属種』

・純正属性（純白、漆黒、真紅など）

属性に対する神の化身として生まれてきたとされる者のみが持つ属性。勇者や魔王のみといった特定の者にしか持つことを許されな

い属性となる。

- ・単属性（通常の色）

属性に対する神の加護を受けて生まれてきた者の属性。一般的に一番多いとされる属性。

- ・複属性（複合色）

主とする神の加護と副とする神の加護の複数の属性神から加護を受けて生まれてきた者の属性。二つの加護を受けて生まれる者は普属性と変わらないぐらいに多い。

「マジで測るのか？」

珍しくグレイが苦々しい顔をして聞いてきた。

「ああ、本当に測る」

「……ふう、そうか。解った」

いつもの能天気は何処に行ったのだと訊ねたくなるほど、おかしいのだ。

だが、これはどうしてもしておく必要がある。今後に関わることなので仕方ない。

「それでは開始する」

「あいよ」

無精無精といった様子で返事してきた。

一応、了承ということもあり、このまま続ける。といっても反対されたとしても俺は関係なく力付くで続けさせるのだから。

「まずはこの水晶の上に手を置いてくれ」

「……おう」

グレイは呼吸を整えてから水晶に手を置いた。顔には汗が浮かんでいる。

いつもの調子は本当にどこにいったのかと思えるほどに深刻な表情をしている。

だが、俺は気にせず止めずに魔力測定を行うこととする。相手していても仕方ないためだ。

「それでは魔力測定を行う」

瞼を閉じて魔力測定を開始する。

『汝の魂が宿す器。
汝の魂が宿す姿。
汝の魂が宿す色。
汝の魂の輝きを示せ』

『一振りの純白の剣。
一振りの漆黒の剣。
弱くもゆらめき。
強くもゆらめく。
小さくもあり、
大きくもある。
二振りの――』

突如として光景が変わり、暗闇が広がった。

というよりも瞼を閉じていたので暗いのは当たり前だ。

測定が終わり、感覚が元に戻ったということだ。

それから測定は予想通り、いや、予想以上の結果をもたらした。

やはり、グレイは今まで魔力封印を行われていたが、何らかの理由により魔力封印が最近になって解けたようだ。訓練時に補正されていた力にも納得がいく。グレイの身体能力から察するに魔力補正がなければ、あのスピードは出せないはずだからな。

しかも、何故かは解らないが、光と闇の属性が純正属性として現れていた。純正属性が二つ現れるということは聞いたことがなかった。流石に驚いた。

「……結果はどうだったんだ？」

俺が色々、考えて固まっている間にグレイは期待はしていないが一応という形で聞いてきた。

「ああ、結果だが――」

「どうせダメだったんだろう？ あんなに無言で固まっていたんならよ」

こちらが結果を伝える前に割り込んできた。それに、どうやら勘違いをしているようだな。

とりあえず結果を報告してやることとする。

「聞け。グレイは光と闇の純正属性を宿していたのだ。ただ魔力の量、質はまだ不安定な状態で強いとも弱いともとれる」

「え? ? な、なんて? 」

「もう一度言うが、グレイは光と闇の純正属性を宿していたのだ。ただ魔力はまだ不安定な状態で強いとも弱いともとれるだ。……どうだ、解ったか? 」

「……え? 」

グレイは驚いたまま固まる。

グレイにとっては予想外な結果だったのだろう。

というよりも誰であろうが驚くような結果か。純正属性を二つも宿すなんてな。

「恐らく、つい最近までは魔力封印を施されていたようだ。だが、何かの拍子にそれが解けたのだろう。だから、魔力は最近になって現れたと考えられる。それと、魔力があるということだし、昼からは魔法の訓練を行う……ぞ」

「……………うッ……………え、ぐッ! ひぐッ! 」

後で魔法の訓練を行うことを伝えていたら、いきなりグレイが鳴咽しだした。

「……」

俺は何も追及せずに部屋を出た。

誰だって一人になりたいときはあるだろう？

魔法の訓練をするということで訓練場に来た。

訓練場には普段、兵士たちが練習するの場所とは別の魔王専用の訓練場だ。

「魔法の訓練を開始する。まずは魔力を意識することから始める」

「はい、りょーかい」

グレイは若干、嬉しそうに返事した。たぶん、魔法を使うことを楽しみにしているのだろう。

とりあえず魔法を使う第一段階である魔力の意識から始めることとする。

「では、目を閉じて体内に循環する魔力を意識しろ。イメージ的には血液が身体を巡るような感じだ」

グレイは目を閉じて集中を始めた。

グレイの周りの空気がはりつめる。

「ほお」

思ったよりも高い集中力に感心をした。この分だと早く魔力を意識することが可能かもしれない。

といっても訓練の際に魔力による補正を行っていたので早く出来るだろうとは踏んでいる。無意識でやったことを意識的にするだけのだから通常よりは楽に出来るはずだ。

「……うん、コレか？」

「!？ もう意識出来たのか？」

「ああ、多分だが」

開始して直ぐに魔力の意識が出来るということは中々ない。無意識に使用していたことを意識するようになっただけとはいえ、これだけ早く出来れば優秀といっても過言ではない。いや、かなり優秀と言える。

とりあえず次のステップへと進めることとする。

「ではこのように手を前に出して、魔力を手に集めるようにしてくれ」

そう言って目の前で実践させる。

「こうか？」

グレイは特に苦にした感じもなく、真似してみせた。

確かに虚言ではなく魔力が手に集まっているのが解る。

「次はこの玉を持って魔力を込めてみてくれ」
「おう」

魔玉を渡すと魔玉が発光し始めた。

魔玉は込められた魔力に応じて発光をする。一応、魔力がキチンと込められていることを確認するために渡した。そして、やはり魔

力をキチンと集めることが出来ているようだ。

普通のセンスならば、ここまで1週間程度はかかる。そのことを考えるとグレイはかなり優秀だ。と言ってもグレイが調子に乗るので口に出して褒めはしない。

「今行っているソレが魔力を集束させるという技術だ。魔法を扱う上で基本となる技術だからしっかりと身体で覚えろ」

「おう！」

「では反復練習で今から何度も行うぞ。十回連続で成功したら、次のステップへと進む」

あのあと、危なげもなく魔力の集束を成功させた。コレもまた感覚を掴めたからと言って、直ぐには出来ないことが多いのだがな。

勿論、そのことはグレイを調子に乗らせないようにするため、教えていない。

「魔力の集束は出来るようだから、次のステップにも進めよう」

「おう！」

ここまで順調にいていたのでステップを次へと進めることとした。

あとグレイはかなり嬉しそうに返事をする。やっとな魔法を使えるという感じだ。よっぽど魔法に焦がれていたのだろう。

「では光属性の魔法の一つを使ってもらう。あと、俺が普段使用しているのは無詠唱魔法になるがグレイは初めて魔法を使うのだから、詠唱魔法を用いる」

「解ったが詠唱無しと詠唱有りでは何が異なるんだ？」

『詠唱』

・詠唱魔法

魔法に関する制御を詠唱により、補正することにより魔法の発動・制御が容易となる。

威力についても詠唱による補正が掛かるため、無詠唱と比べて威力が高い。

詠唱魔法は一つの魔法（大魔法）を一人だけではなく複数人で発動させることが出来る。

大戦などで用いられる大魔法についても大人数による詠唱魔法を用いることが多い。

※高速詠唱などは詠唱魔法も同等の威力を持つ。

・無詠唱魔法

魔法に関する制御を自身の魔力のみで行うため、魔法の熟練度が低いと制御はおろか発動すら出来ない。

威力についても自身の魔力のみが反映される。

詠唱がないことにより前もって発動する魔法の種類などが事前に相手に察知されないことと発動に時間を要しないことより、接近戦

においても使用出来る。

「と言ったところだが、理解出来たか？」

「そうか、発動が簡単ということでは詠唱魔法で魔法を発動させるのか」

「そうだ。だから、魔法名と詠唱を教える。魔法名は『ライト・ブレット光の銃弾』だ。単体で放つ詠唱魔法では魔法をイメージしやすい意味を持つ言葉を入れるだけでいい。例えば、だ」

俺は手を模擬訓練人形に対して向けた。

『光よ、銃弾と化し敵を穿てライト・ブレット光の銃弾』

模擬訓練人形に向けていた手から『ライト・ブレット光の銃弾』が発射され、模擬訓練人形に命中し、穴があく。

「あくまでも自分がしつくりとくる詠唱を行うことがポイントだ」
「おう、解った！」

実践して見せた俺のようにグレイは模擬訓練人形に手を向けた。
そして、深呼吸をし、魔力を手に集中させた。

『光よ、銃弾と化し敵を穿てライト・ブレット光の銃弾』

グレイの手から『ライト・ブレット光の銃弾』が発射され、模擬訓練人形に命中し、穴があく。

どうやら、一回で成功させたようだ。一回で成功させるのはかなり、珍しいというか凄いことだ。

一回も泳いだことのない人間が海でいきなり泳ぎ始めるようなものだ。

これにもまた、驚かされる。

「やったッ！ マジで出たッ！」

どうやら、魔力封印されていなければ、勇者であり天才と呼んでも差し支えない程の人物だったのかもしれない。

と言っても今はまだヒヨッコには変わりがないがな。

「って聞いているのかよッ！」

……いや、ヒヨッコというより子供そのものだな。うるさい。

「ああ聞いている。それよりも何度か魔法が使ってみて熟練度をあげておけ」

「おう、解った！」

そう言ってグレイは再び、魔法を使って訓練を再開した。

「そう言えば、ヴェルトって何で光属性の魔法が使えるんだ？」

グレイが何度目かの魔法を放った後に聞いてきた。

「確か魔族は闇属性の神の眷族だから、さすがに光属性の魔法は使えないようになっていなかったっけ？」

そして追撃をするように属性の話を持ち出す。

グレイは俺を見ている。

どうやら、答えを待っているようだ。

「……それよりも俺は仕事があるから失礼する。昨日のように晩御飯を運ばせるから訓練に区切りをつけて自室に戻っている」

だが、俺は質問に対して答えずに、そう言って訓練場を後にした。

誰にだって秘密にしたいことはあるだろう？

「この度の勇者と魔王の戦いはやはり、魔王の勝利に終わったのではないのか？」

「うむ、そうだな。連絡はないが、勇者の実力から考えて恐らく外れていないだろう」

「ならば、やはり戦を行うべきではないのですか？ 我が国は大飢饉により蓄えもなくなり、飢餓で苦しむ人が溢れてしまっている。これ以上、魔族に領土を取られては我が国には滅びます」

この場では人間の国王と將軍などと言った人間族の層々たる面々が一同に会し話を行っている。

勇者と魔王との戦いに関する話をしている。
そして戦争を始めようという会談だ。

「また戦争を始めるとこの協定を結ぶ前の状態のように泥沼化して問題があるのではないですか？」

私は教会の聖女の地位をもってこの場で反対意見を出した。
そして意見すると同時に皆が会談している場に一枚の羊皮紙を出す。

それは協定の書かれた羊皮紙。

『勇者と魔王の戦い』

嘗て、勇者の属する光の民^{人間}と魔王の属する闇^{魔族}の民により戦争は泥沼状態で行われていた。

戦争は泥沼状態で長く長く続いてしまっていた。その戦争は地獄と呼んでも差し支えないほどにひどかった。

餓えた人間は人間を襲って食料を確保し、魔族と通じている者ではないかと魔族裁判を行われたりした。

敗走する魔族は同じ魔族に誇りなき者として処刑された。

戦争により土地は疲弊し、作物は育たなくなり、人口は著しく減退した。

この戦争の両国を代表する勇者と魔王は問題視をし、協定を結ぶこととした。

・勇者・魔王協定

戦争については一時休戦とし、相手の領土に許可なく侵入することを禁ずる。

また、代表する勇者の末裔と魔王の末裔の一騎討ちを行い、勝者に領土を譲渡する。

また一騎討ちは20年に一度行うこととする。

「この勇者が記した通り、協定は両国の代表により取りきめられた協定。それを破るとなると悲惨な戦争に発展し、我が国の民に被害が出ます」

「ふん、その前に暴動が起きてしまうわッ！ それをどうするというのだ小娘がッ！」

「それでも――」

「双方ともに黙れッ！」

「……くッ！」

將軍と私の間に国王が割って入る。

さすがの私と言えど国王に意見する程、立場は強くない。
というよりもこの場で一番低い立場だ。

「トランター將軍、お主の意見を申してみよ」

「はッ！ それでは意見を述べさせて頂きます」

先程まで私に対して高圧的な態度をしていた、髭をたっぷりと生やした大男のトランター將軍が立ち上がり、意見を述べる。

ちなみに立ち上がる時にこちらを見て勝ち誇った顔をしていた。

……本当にむかつく。

「この度の勇者と魔王の戦いは我が国の勇者の負けと判断し、戦争を行おうと思います。それから先程、小娘――失敬、聖女マリア殿が仰ったように泥沼化は免れたいことは必至です。だから、私はそうならぬように策を用意しております」

「うむ、どういった策だ」

国王はトランター將軍の意見に口をはさむことなく、先を促す。私も意見をしたかったが、国王の意見に介入し、話を止めるようなことは出来ない。

「それはです。我が国の民はあれから、何倍にも膨れ上がったこともあり、兵力も数倍となりました。それに対して魔族はあれからそこまでの民の増大もなかったため、兵力の増大もそこまでないと考えられます。このことより、まず真正面から敵対したとしても数倍の兵力となった我が国の勝利は間違いないでしょう。」

また、我が国が誇る兵士を宣戦布告の使いと出して、宣戦のついでに魔王を暗殺するのです。史実から読み取るに奴等は正面からの戦いにしか慣れていないはず。だから、魔王は暗殺できるはず。そして、魔王が暗殺できたとするなら話は早いです。後は相手が降伏でもしてきたところをバツサリと切り捨てていくだけですから」

「うむ、良い考えだな」

「ハッ！　ありがたき言葉でございます」

国王はトランター將軍の意見に賛同の意を示した。

これ以上のない愚策だというのに。

確かに兵士の人数でいえば、魔族比べるほどないくらいに多いだろう。

……だが、魔族は民一人一人が戦おうと思えば、人間の下級兵士並には戦える。そのことにより実際に考えているよりも兵士の人数の差は少ない。

あと、もちろんだが人数のみで戦の勝者が決まるといったことはない。

やはり人数も勝つためには必要だが兵士の熟練度も必要となる。なぜならば、いくら兵士の人数が多くても熟練度が低い兵士であれば、戦いでも役に立たない。

人間は平和ボケしたということもあり、熟練度はそこまで高いと

は評価しにくいだろう。

それに比べて魔族の兵士はモンスターが住む森などが近いということもあり、実戦は豊富で熟練度も高く、一人一人の魔力も魔族特有で高い。

それから暗殺などを行い、敵の大將を打ち取ったところで汚い策で打ち取ったということになるだろう。すると魔族の怒りを買う可能性も非常に高い。怒りを買ったため、彼らが死兵にもなって我が国を責めるとなれば我が国もろとも両国が減びることだろう。

大体、暗殺を行ってきた国に対して降伏するなどと思っているよ。うだが、そんなことはありえない。汚い策により、国王を暗殺されて黙っている国などないはずだ。

といったようにダメな点を挙げればキリがないといった程にまったくもって愚策としかいいようのない策だ。

だから、この策には反対しようと口を開く。

「国王様、先程の策に関しては――」

「黙れッ！ お前は軍の人間ではなく教会の人間だろうがッ！ 戦いの素人のお前如きに策に対する意見など出来んはずだぞッ！ それとも教会様は絶対の境界を飛び出して、軍も取り仕切り国の掌握でも行うつもりか？」

「くッ！」

確かにトランター將軍の言う通りだ。

だが、策が採用されてしまったからでは全てが終わってしまう。

「私は――」

「うむ、この度はトランター將軍の良策に任せてみるぞ！」

自分の処罰は気にせずに意見をしようとした矢先に国王が割って入り、決定してしまった。

地獄の選択を決定してしまった。

「策を挙げたトランター將軍よ。後のことはお主に任せた。朗報を期待して待っておるぞ」

「ははッ！ 国王様のご期待に添えるように努力致します！」

「うむ、良い返事だ。では会議については以上とする」

国王は会議を以上とし、部屋を出て行った。

私は先程決まった策の内容に茫然としたまま、椅子に座っていた。

「ふん、小娘がッ！ お前はただの教会のお飾りでしかないのに意見などしよって！ だがな、お前の意見に反して戦争は決まってしまったのだ。だから、お前は教会にでも戻って黙って指でも加えて俺の活躍でも聞いておけ！」

トランター將軍は私にそう言って「ガハハハッ」と笑いながら出て行った。

その後にトランター將軍と共に幾名かの將軍と大貴族が私を睨みながら出て行った。恐らく、トランターと同様で戦争を行うことに賛成している者達なのだろう。

そうして、人を見送っている内にほとんどの者達が会議室を出て行ってしまった。

そうほとんど出て行った。だが、ほとんどということは残った者達がいたということだ。それは私を除いて二人いた。そして、そこに残った一人となる青年と呼べる程に若い將軍——レニが口を開く。

「 MARIA 殿、私は MARIA 殿が考えていることと酷似した考えをしていると思います。恐らく、これが地獄を作るの引き金になると」

「そうですわね。私は確かにこれが地獄を作るの引き金と考えています。だから——」

「何としても止める必要があるでしょ？」

私のセリフを奪ったのはこの場に残ったもう一人、大貴族の一人であり『凍結の魔女』という異名を持つほどの実力のある若い女性――ミネアだ。

「そうです。止める必要があります。だから、今から私たちで作戦会議をしませんか？」

「あら、奇遇ね。私もちょうどそれを提案しようと思っていたところだわ」

「そうですね。及ばずながら、一將軍である私も参加させていただきますしょう」

「いいわよ。というよりもあなたの参加は決まっていたのだけどね。それに先程のは会議と呼べる代物ではなかったしね。ちなみにだけど、私は参加しているつもりはなかったわよ。仕方なく来てやってだけだしね」

「確かに、私もそうですね。さっきのは軍を掌握したトランター將軍のしたいようにしていた会議ですしね。正直に言って意味があったのかは疑問ですね」

「あんたよく言うねえ」

「はは、ミネア殿程ではないですよ」

「なにおおー！」

はつきりとしたミネアの言葉とレニの言葉のやり取りに思わず笑みがこぼれる。先程までの絶望とは打って変わって余裕があるのかもしれない。

この国はまだ捨てたものじゃないと思わせてくれて、余裕を与えてくれるには十分な程に心強い二人だったから。

鬱蒼とした森林。人間と変わらない程の背丈をし、猪のような頭を持つ野蠻で人を襲うモンスター^{オーク・コモン}。

オーク達はこちらに気づいた様子もなく森を散策していた。

「ふう、俺は出来る。俺は出来る。俺は出来る」

オーク達に聞こえないように小さく呟いた。

今、俺はオーク達を相手にして戦闘経験を積むといった訓練を受けている。

魔王の訓練をし始めてから2週間が経ったこともあり、実力はかなりアップしていた。うん、我ながら凄いね。

そのため、そろそろ実戦経験を積むには良い頃だと、このオークの森へと連れてこられたんだよね。……ヴェルトめ、好き勝手にしやがって。

オークの森——ここはオーク・エイシャントが統治する森。ゆえにオークの森と呼ばれてるんだよね。

そして現状。今、見える範囲にオーク・コモンが6匹いる。いやあ、さすがオークの森って言うだけあって、オークがいるねえ。オーク恐いなあ。

オーク・コモンはE X 級〜G 級まであるランクのF 級に該当するモンスター。

正直に言ってモンスターとしては弱い。強くなった俺の実力を考えると余裕の相手だ。うん、俺強くなったね。やっぱ才能あるよ

ね。

「俺は強い。……俺は勝てる」

だが、俺は生死を賭けた実戦経験というのがない。

だからまだ相手を見つけても襲撃出来ずにいた。

正直に言うのと逃げ出したい。怖い。嫌だ。

……だが、俺は強くなりたい。ヴェルトの期待に応えるためにも。
俺自身が憧れた本当の勇者になるためにも。

「……行くぞ！」

「グウオオオオオオッ！！！」

決心を決めて飛び出そうとした瞬間に相手もこちらに気づいた。

オーク達は怒鳴るような荒々しい未発達な言葉を発しながら、手にしたこん棒を構えて突撃をしてきた。

「遅いッ！」

突撃してきたオーク達の横をオーク達が対応出来ない速度で駆け抜けていく。

速度は日々行われる『エンドレス・ヘルフレイム永遠なる業火』の回避訓練イジメと魔法訓練にて覚えた魔力補正による身体能力向上のおかげにより、かなり上がっていた。

だから、オーク・コモンなどに後れをとることなどない。

「一匹目っ」と

そして、通り過ぎ様に漆黒タナトスの短剣を持って一人を切り裂いた。

漆黒の短剣は全長40？程度といったところなのでそこまで深く

は斬れないが、斬ったところはパツクリと斬れているため、十分なダメージは与えたはずだ。

「グギギイイイイツ!!」

やはり、ダメージは十分だったようで斬ったオーク・コモンの一匹は奇声をあげながら倒れた。

他のオーク・コモンは何があったのか理解出来ないように固まってしまうている。

「もう二匹と」

固まっている間に二匹のオーク・コモンを一匹目同様に斬り裂く。やはり、オーク・コモン程度なら、余裕で倒せるようだ。

「グウオオオオオオツ!!!」

残りのオークが怒声をあげながら、突撃してきたが、一匹目と同様に一匹ずつ倒していき、三匹のオークを葬りさっていく。

「余裕♪」

俺は調子に乗って散策が続いている。もっと、倒してやる。

……ふふふ、オーク・コモン……敵にもならないぜ。ほんとうに弱いね。いや違う、俺が強すぎるんだよな。

ぬははははははははッ！ ヴェルト抜く日も近いなコレは！ 俺、無双時代突入の予感♪

「ググオオオオオッ！！！」

うん？ またオーク・コモンか？ また葬り去ってやるぜ！ 来いよ！ 来いよ！

というわけで意気揚々と声が聞こえた後ろへと振り向く。

「えーと、調子乗ってました。はい、すみません」

目の前に現れたのは大男より大きい体躯のトサカが赤いオーク……オーク・ジェネラル。オークの中でも強い部類に入り、モンスターとしてもD＋＋ランクに該当する程に強いとされる。

正直に言ってさっきのオーク・コモンとは比べると強さは比じゃない。うん、これは本当にヤバイ。調子に乗って森の奥なんかに来るんじゃないかった。

「ググオオオオオッ！！！」

「くッ！」

オーク・ジェネラルは俺との距離を詰めて手に持ったこん棒を縦に振り下ろす。

何とか、振り下ろされる前に後ろへと飛んで回避する。

「ググオオオオオッ！！！」

追撃されるが、先程と同じように回避する。

どうやらスピードはやや俺のほうが速いようだ。

だが、武器の間合いが違うということで迂闊に近づけない。

オーク・ジェネラルが持つこん棒は1m以上も長さがあるため、間合いが広い。力の差もあって相手の攻撃を受け止めることは出来ない。だから、攻撃を仕掛けるためにはオーク・ジェネラルのこん棒による攻撃は避けて近づく必要がある。だが、攻撃を避けて近づくには危険が伴う。

「くッ！」

避けて近づくことも出来ない状態となってしまったため、相手の攻撃を距離をとって回避することに努める。

だが、このまま回避していても勝てない。それよりも他のオークが来てしまったら、もう終わりだ。

だったら……！

「うおおおおッ！」

意を決して飛び込んだ。振り下ろされるこん棒を見極めて攻撃を回避しオーク・ジェネラルの懐へと飛び込むことが成功する。

やった！ もう懐だ！ こんな棒をもう一度、振り回す暇なんてない。もらったッ！！

「もら……ぐあッ！！！」

懐に飛び込んで一撃を入れる寸前に横からの衝撃パンチによって吹き飛ばされた。

「グオオオオ！」

吹き飛ばされたところにこん棒がまた振り下ろされたので回避する。くッ！ さっきの衝撃は当り所も悪くなかったように致命傷とはならなかったがダメージが蓄積されてしまった。ダメージのせいかスピードも相手と同じくらいしか出せない。

しかも、懷に飛び込んでもパンチによる攻撃があるのは厳しい。ダメージがない状態なら意識していれば避けれたかもしれないが、今ではかなり厳しい。

相手に誘いこまれたということか。クソッ！ もっと冷静に戦う必要があったな。

これは本当にヤバイ。

ここはもうヴェルトに助けを求めるか？ ヴェルトなら助けることが出来るようにしているかもしれない。

……いや、やっぱりダメだ。まだ、勝負がついた訳でもないのに助けを求めるだなんて。

俺は強くなるって決めたんだ！ だったら、足掻いてやる！！

だが、回避している内にダメージが身体に響いてきているため、

スピードが下がってきている。クソッ！ 早く勝つ方法を考えないと。

どうやって俺はコイツに勝てる。俺は何が出来る？ 俺は……そうだ。俺はコイツよりも間合いが広い武器がある。優位に立っているオーク・ジェネラルは油断しているから当るはず。だから、それを使えば……勝てる！

距離をとるため、後ろに大きく跳んだ。

そして、一直線に追ってきながら大きくこん棒を振り上げているオーク・ジェネラルに手を向ける。……今だッ！

『光よ、銃弾と化し敵を穿て光の銃弾』
ライト・プレット

ライト・プレット
光の銃弾がオーク・ジェネラルに的中し、オーク・ジェネラルを貫く。さらにオーク・ジェネラルは少し後ろの方向に態勢を崩す。

「うおおおおお！！！」

そして、その一瞬の隙をついて近づき漆黒の短剣により斬り裂く。
タナトス

「ギオオオオオオッ！！！」

オーク・ジェネラルは光の銃弾と漆黒の短剣の攻撃により、倒れた。
ライト・プレット
タナトス

「ははは、足掻けば何とかなるもんだな」

どうやら、俺はオーク・ジェネラルに勝てたようだ。正直に言つて、パンチの当り所が悪かったら死んでいた。光の銃弾も相手^{ライト・ブレット}が油断せずに反撃について警戒されていたら、避けられていた。かなり、危ない戦いだった。良かったか悪かったか解らないが本当の生死を賭けた戦いが経験出来た。

……あーでも、もう無理。ダメージも響いてきているし、しんどい。早く帰ろうっと。

「……勘弁してくれよ」

帰りの方角を見るとオーク・コモンが群がっていた。

うん、確かにオーク・コモンぐらいなら今の状態でも何とかなるよ。だけどね。

ああ！！
もう、しんどいから帰りたいってのによおおおおお
おおおおおおおお！！

初めての戦闘訓練

――&l t;勇者&g t;――（後書き）

戦闘描写って難しいですね。その前に文章能力がないので『全体的にあかんやん。難しいわ』って感じではありますが。笑

あと、お気に入り登録していただいている方がいてくれたのでめちゃくちゃ嬉しかったです！

励みにさせていただいてますので本当にありがとうございます！
これからも読んでいただけるようにできたらなって感じで続けていくようにします！

「ではまず、私から今回の議題について説明させていただきます。
今回の議題は我が国よりの宣戦布告と暗殺計画を中止させて戦争
をさせないといったものです」

「はい、了解。とりあえず、大飢饉のことは置いておくのね」
「そうです。大飢饉も確かに問題ではありますが、内政をしっかりと
すれば、被害をかなり抑えることも可能かと考えていますし、それ
よりも我が国の滅亡の可能性がある戦争についてを議題とさせてい
たきます」

「そうですね。とりあえずはその議題についてお話いたしましょう」

レニ、ミネア、私がミネアの屋敷の客間で会議を行っている。

レニが会議を進行してくれる役で私とミネアが主に意見する側と
いうスタンスで会議を行う。

今回の議題は前回の国会で決まってしまった事項である宣戦布告
と暗殺計画を止めるということだ。

これを正面から止めようとする王に対する反逆となってしまう
ため、ばれないようにと細心の注意を払う必要がある。

しかも、絶対に成功をさせないといけない内容であるため、かな
り重大な議題だ。

「ではご意見などございましたら、発言をよろしくお願いいたします」

「はい、私から意見するわね」

ミネアが手をあげてその場に立つ。

「宣戦布告と暗殺計画をするということなら、その使者を縛り上げてはどう？」

「それは確かに今回行われる宣戦布告と暗殺計画を止めることは可能だと思いますが、第二の使者や第三の使者が出てきた場合も何度も捕獲することは難しいでしょう」

「あと仮に捕獲することができたとしても、犯行がばれてしまう可能性が高いと思うわ」

「うーん、それならこの案はダメだねえ」

正直に言われると元も子もないから使者をどうにかしてという策は良策とは言えない。

だが、正面から戦争反対と言って、使者を送らないようにして、戦争を始めないようにすることも難しい。

対応出来る方法をとればボロが出たり、根底からの解決にはつながらない。

かといって根底からの解決を行う正攻法などは今の状況から考えて対応出来ない具体性なき策となってしまう。

どうにかして、何か妙案を出さなければいけないのだが。

「ああ、難しいわね」

「ええ、確かに難しいです。ですが、何か考えなければいけないのは確かです」

その言葉をあとに私たち三人は各自で色々な策を考えてみたが、どれも難色を示す策ばかりとなってしまっていた。

やっぱりレニとミネアも考えてくれてはいるようだが、特に具体的な策は浮かんでないようだ。

「ご無理かとは思いますが、ミネア殿も大貴族であるので、それとなく使者を出すのを中止させたりなどは出来ないのですか？」

「それが出来たらとっくの昔に提案してるわよ。せいぜい使者の発日程を遅らせることぐらいしか出来ないわ。それから、使者の発日程を遅らせるための作業はもう開始しているわよ」

「そうですか。だが、もう既に動いているとはさすがミネア殿でございますね。マリア殿は教会から使者を止めることは出来ないですよね？」

「ええ、出来ないわ。大体、教会は軍事に関わらないようにすると規定されていますので直接的な介入はできません」

「ではやっぱり正攻法は手詰まりといったようですね」

「みたいだわね」「みたいですね」

やはり、正攻法についても確認してみてもみたが良策ではないようだ。

「ああ、もういつそのこと勇者が勝ってくれてたらいいのに！」

「それは無理でしょう。彼の實力は自分からみても低いとしか評価できない程でしたから」

「まあね。それはわかるんだけど。というか、もう今ごろ何やっているのかな？ 本当に無責任よね」

「彼は無責任なんかじゃないですッ！！」

策が浮かばないことへの苛立ちから勇者非難をしていたレニとミネアに叫び声をあげてしまう。

だって彼は無責任なんかではないから。

レニは「言いすぎましたね。すみません」と低頭し、ミネアも「確かに言いすぎたね。ごめんね」と謝ってくれた。

「いえ、こちらこそ言いすぎました。すみません」

いきなり叫んでしまったこともあり、私も頭を下げる。

「もしかして、けっこうなお知り合いだったの？」

「いえ、そんなことはありませんけど」

そう大した知り合いというわけでもない。会話なんてほとんどしたことはない。

だけど、彼の強さを知っている。彼の責任感の強さを知っている。

「そっか。なら良かった。でも本当に何やってるんだろうね」

「それは……」

「大差で負けてしまっていたなら、歴代魔王の性格から考えて、生きてはいると思うんだけどね」

「ミネア殿が言う通り、魔王の実力が如何ほどかはわかりませんが勇者との差はかなりあるとみても間違いないはずなので、私も生きてはいると思いますよ」

「じゃあやっぱり、負けたけど帰るのが恐くて逃げてるってところかな？」

「私は逃げてはいないと思います。たぶん帰ってこれない事情などがあるのだと思います」

「うーん、帰ってこれない事情ね……。何があるのかな？」

「それは……」

そう聞かれて口を閉ざしてしまった。

確かに、帰ってこれない事情となると中々、思いもつかない。
……たとえば。

「つ、捕まっているとか――」
「あッ!!」

帰ってこれない事情を考えて、発言をしている最中にミネアが叫び声をあげた。

「どうしたんですか？」
「思いついたのよ。今回の議題うってつけの策がね」

ミネアはどうやら策を思いついたようだ。

「マリアが捕まるって策なんだけど、どう？」
「……ミネア殿、確かにそれは良い策ですね」

ミネアが思いついた策というのは、私が魔王に捕まるという策。確かに私が捕まることで簡単には戦争をしかけるわけにはいかなくなる。

いかに国王が命令しようとも、教会の聖女を危険にさらすのが解っていて戦争することは出来ない。なぜならば、聖女は白神の臣下であり、民の光でもあるからだ。

聖女は白神の臣下であるために国軍の事に関与してはならないし、国軍の事に関与させてもならないという決まりがある。そして、何よりも聖女という名の民に降り注ぐ光の効果は大きい。それも単に教会からの食糧の捻出、土地再生運動、無償での治療などといった日頃からの聖女の働きということが要因だ。

そんな聖女が捕まっているのに戦争を始めるとなると民の信頼をなくしてしまうことや暴動が起ったりなどで我が国はなりたたなく

なる。

そのこともあり、聖女が魔王に捕まることによって戦争を止めることが出来る。といったところだ。

「でも私としてはマリア殿にとって危険が生じてしまうことなので、諸刃の剣の策とも感じられますが」

「確かにね。そうかもしれない」

そう、確かに戦争を止めることは出来る。

しかし、魔王に捕まる必要がある。あちらでの生活は保障されず、下手をすれば捕まるのではなく殺される可能性だってある。

得られる結果は大きいがリスクが大きい策であるというのは確かだ。

「でも、この策しか具体的に行えるようではないことと、もう時間もないです。それに私としてはこの策に賭けてみる価値はあると考えています。女の勘ですがいけると感じていますしね」

「確かにマリア殿がおっしゃる通りかもしれませんが。リスクはありますが良策と考えられるので私もこの策で問題ないかと思っています」

「私としては提案した側だし、反対する気もないわよ」

「三人とも賛成ということにより、私が魔王に捕まり戦争を止めるといった策で進めていくとします」

そうして策は決まり、魔王に捕まるまでの算段や魔王に捕まったときに説明をし協力を得られるようにするための話の内容を考えたりと会議は進んでいった。

その後は特に問題事項も発生しなかったため、トントン拍子に策の詳細が決まっていた。

策の詳細が決まったこともあり、後は策を実行する日を待つのみとなった。

この策を絶対に成功させて、戦争を止めないと。と覚悟を決めて私の今日は閉じた。

窓からは月の光が差し込み、部屋を照らす。その光を持っていつも通り仕事をしていた。

「コンコン」

そして、羊皮紙の内容を読んでいく途中にドアからノックがした。特に重要案件を考えていることでもなかったので部屋に招き入れる。

「入れ」

「失礼致します」

部屋に諜報員^{マシユ}が入ってきた。

「何かあったのか？」

マシユが部屋を訪れるということは何か重要な事があることがほとんどだ。大方、報告内容について予想もついているが、部屋に入ってきたマシユを見るなり、何かあったか尋ねた。

「はい、ヴェルト様。どうやら、人間達が戦争を行おうと算段しているようです」

マシューはいつも通り、無表情と言う言葉が似合う程に感情をなくした顔で言葉を告げた。

報告にあった内容はかなり重要というよりも魔族の将来が掛かった内容であった。

「そうか、やはり勇者の報はしておくべきだったか」

「ですが、ヴェルト様。魔族が『勇者との決戦は両者の合意の上で延期している』などと言ったところで、どの道『勇者が勝てるわけがない』と信じ込んでしまっている人間達の行動を変えることはできないでしょう」

「そうだな」

確かにそうだ。勇者があれだけ弱かったことを考えると人間達はこの度の勇者と魔王の決戦の結果など目に見えていたはず。そのこともあって、戦争への強硬派などが人間達の間で力を増したのだろう。

そして、実際に勇者が負けたことにより、強硬派の連中の思惑通りに戦争を始めようと動き出したということだろう。

これらのことは考えついていたが、報告を聞くまで杞憂であればいいのと思っていたことだ。

それがどうやら杞憂に終わらなかったのは、個人としては非常に残念なことだ。

「やはり、人間達と戦争を行うと魔族の被害も甚大なることとなると予想されているのですか？」

「うむ、そうだ。魔族の魔力が人間と比べて高いと言っても、人数の差があるのと人間にも強いヤツはいるから戦闘による魔族の被害は大きいこととなるだろう。」

それに戦闘によって農民達の生活や土地を荒らしてしまう。農民

達にも影響が出ることによって、国の自給率も下がってしまい、食物に影響は出る。そして飢餓によって苦しむ魔族も出てしまうし、荒れる魔族も出てくるだろう。

そうなれば、国は荒れすぎて手をつけられない。といった程度の被害が出る可能性があるとは予想している」

「そうですか」

魔族の能力が高いといっても魔族の兵士では十倍の戦力を相手にして無傷で戦えるわけではない。

確かに俺や魔將軍などの強い力を持った魔族にとって十人の人間の兵士が束になっても敵にはなりえない。だが、俺や魔將軍クラスの強さを持つ人間にも存在しているし、それ以下のクラスでも中々に強い人間もいる。そういった者達の十人と戦うのは俺や魔將軍でも無傷、いや、勝利を絶対に手にできるかは難しいといったところだ。

そういったところもあり、実際には戦力として魔族が人間を圧倒しているわけではなく拮抗した状態となっているため、戦争は勝てたとしても激化し長引く。

そうなると農民達にも甚大な被害を与えてしまう。土地は戦闘によって疲弊し、枯れ果ててしまい、男手は兵士として借り出すことも出てくる。弱き子供や女は戦争によって我が国に侵入してきた人間の手によって殺されてしまうことも出てくる。

農民への被害により、我が国には飢餓で苦しむ人も出てしまい、苦しむ者が荒れることも国の現状を見て荒れる者も出てくる。

もはや国は荒れすぎて立て直すには相当な時間を要するようになってしまう。

それが戦争を行った結果といったところだと予想していた。

「どうにかして戦争を止めなければな」

そうそうした状態へとなる戦争は止める必要がある。

そうでなければ、『勇者・魔王協定』を結ぶことに至った先祖達の嘆きを無視してしまうこととなる。

「そうですか。ですが、戦争を止める手立てはないと存じ上げますが」

「いや、一時的に戦争を止める手段はある」

「そうですか。ヴェルト様がそう考えておられるのであれば、問題ないことなのでしょう」

「といっても五分五分の作戦だな」

「でしたら、勝率を上げるために動くことはございませんか？」

「いや、マシューに動いてもらうようなことではないから大丈夫だ。とりあえずマシューはそのまま諜報を続けておいてくれ」

「了解しました」

そう言ってマシューは低頭した。

普通ならば、自身の諜報活動にも影響が与える可能性のある作戦内容を聞いてみたくなると思うのだが、マシューは何ひとつ聞かない。本当に優秀だと言える。恐らく、俺の言葉を信用してくれているからだろうとも思うが、中々出来ないことだ。

「そうだ、マシュー。人間が戦争をする理由は何だったのか解るか？」

「理由は『大飢饉により蓄えもなくなり、飢餓で苦しむ人がいる』といったところでした。といっても戦争の強硬派としてはあくまでキッカケとして利用しただけのようです」

「そうか、解った。その問題を解決出来れば、戦争を一時的には

なくキッチリと止めることは可能か？」

「私は可能性としては高くなると推測しております。但し、強硬派の意思を滅することは出来ないので絶対とは言い切れませんが」

「そうか、解った。戦争をキッチリと止める手立ても考えついたから、そっちを実行できるように手配しておいてくれ」

「了解致しました」

その後、手配する内容についてマシューに説明をする。

説明を聞き終わったマシューは「失礼致しました」と言って低頭して出て行った。

「ふうー、一時的に止めることが出来るといったが大丈夫だろうか？」

自身が考えた作戦の勝算を考えて頭を抱える。

実際には五分五分とは言えない程に低いかもしれないからだ。

あの場ではマシューには五分五分といったが、実際には今の状況では解らない。なんと言っても、自分次第ではなく、勇者次第といったところだからだ。

一時的に止める作戦が上手くいかなかった場合は、キッチリと止める作戦も上手くいく可能性は低くなる。

「まったく、魔王のくせに魔族の未来を守れないとはな。そのくせ、勇者が魔族の未来を守るかもしれないなんてな」

そう一人、呟いて床についた。

あれからミネアとレニとの立案した作戦を実行する日まで聖女として仕事をして過ごした。

もちろん、早く作戦を実行したかったのはあるが、そのためには色々と準備する必要があった。

まず、一つは私が行っている教会での仕事のこと。

これには私の良き相談者であり、教会のトップでもあるセイント教主と相談をして、他の者を代用することによってカバーすることとした。

これによって、私が行っている全ての仕事をカバーするところまで至らないにせよ、ある程度までカバーすることが出来る。

セイント教主にはいつも迷惑ばかりを掛けてしまいが仕方ない。

そして二つ目がどうやって聖女を魔族の地へと行くかということ。これには弊害が二つあり、まず一つ目は聖女は国から出る事が出来ないようになっていくということ。

聖女は民の光でもあるため、万が一のことがあっては困る。その

ことにより、国から出ることを禁じられている。

そして二つ目が魔族達に見つかった場合にどうするかということ。魔族の領地へと許可なく侵入することは出来ないようになっていく。それならば、許可を取ればいいのではないかと思うが、そんなことは出来ない。なぜならば、許可を得るためには我が国の国王の印と相手の国の了承が必要であるためだ。勿論だが、国王に印なぞもらうことは出来ない。

しかし、その二つの問題は協力者であるミネアとレニが解決をしてくれた。

まず一つ目の『聖女が国から出ることは出来ないということ』という点についてはレニが解決してくれた。

レニは若いながらも將軍という立場にることにより、信用たる看守に『聖女が通るが許可するように』指示を出しておくことが出来る。

といってもレニが信用する者にしかこの作戦は通用しないため、その看守が当直する日のみが実行出来る日となる。

そして二つ目の『侵入許可』についてミネアが解決してくれた。ミネアは大貴族という立場もあり、魔族の地へと商売関係で行く者を見繕ってもらった。そして、見繕ってもらった商売関係者などに紛れて聖女を魔族の地へと誘おうといった作戦だ。

こういった手配を簡単に済ましてしまうあたり、やはりミネアは相当な切れ者であり、中々の権力の持ち主であることを示している。

そして、あちらに着いた時に行動するために知識を埋めていき、作戦を行う日が訪れるのを待った。

作戦の日が訪れた。

「マリア殿、魔族の地はモンスターが色々、いるのでお氣をつけて下さい。それから、私が仕入れた情報によりますと、一日遅れで王国軍の者も出立するそうなのでお氣をつけて下さい」

「ご氣遣いありがとうございます。王国軍の者には追いつかれないようには致します」

「一応、商人であり傭兵である強い者を一緒にしておいたから、大丈夫だとは思うけどモンスターなどには氣をつけてね」

「はい、了解しました」

そうしてレニとミネアの見送りを後にして、私は馬車に乗り込んで出発した。

「マリア様、モンスターがいようと私が排除致しますのでお任せ下さい！」

「ええ、あなたは頼りにしてるわ。モンスターがいたら宜しくね」

「ははッ！ ありがたき幸せでございます！」

教会から極秘の護衛として一緒に来た女性がいた。彼女は飾り気のない白い清潔な上位と腰にまわりつく長いスカートをはいていた。そして、腰には長剣を帯びている。銀髪のみディアムヘアの勝負な感じのする強い目をした美人の聖騎士である女性。セノア

そのセノアは大げさに低頭して嬉しそうにしていた。

護衛は必要ないと言ったが、セイント教主が『絶対に一人は護衛を付けるように』ということが無理やり押し切った。

確かに護衛を付けることに対してデメリットはあまりないということもあって了承をした。

ただ、セノアが護衛するとなれば断っていたことだろう。

確かに護衛としては確かに優秀かもしれないセノア。だが、正直に言って少々面倒なところがあるため、セイント教主の人選を恨めしく思ってしまった。

「但しね。一応、商人の娘としてこの馬車に乗り込んでいることになってるのでマリアとは呼ばずに偽名マリネと呼ぶようにしてね」

「ははッ！ 解りました、マリネ様ッ！！」

「……様もつけないようにね」

「なッ！？ 私にはそのようなことは出来ません！！ 尊敬して止まないマリア様に対してそのような言葉など口にはできません！！」

「もう、だから偽名マリネで呼ぶように！ それから、様も付けないようにね！」

「なッ！ 私に死ねとおっしゃるのですか？？」

「なんでそうなるのよ」

「おい、讓ちゃん達、バレてしまうと元も子もなくなるからもう少し静かにしてくれねーか？」

「マリア様に対して何たる暴言ッ！！ 万死に値するッ！」

「ああ、もうセノア！ 私の言うことを聞きなさい！」

といったようにセノアは聖女^{わたし}を第一として行動をする。

そのことは嬉しいときもあるのだけれど行き過ぎた尊敬はときに空回りをしてしまうのだ。そう今のうちに。

確かに優秀なセノアを付けていると聖女^{わたし}には危険が少ないかもしれないが周りはそうではない。

そして、その暴走を止める必要があるのだが、暴走を止めるのは本当に疲れてしまう。

まったく、セイント教主は「仕事を押し付けられても嫌なことはないよ」と言いながら、本当は仕返しとしてセノアを付けたのではないかと思えてしまう。

「貴様あ！ 訂正しろおおお！ でなければ、殺おおおすううう！」

ああ、まだ暴走している。本当に面倒だ。

と考えている内にまた暴走していつているので止めることとする。本当に護衛付けなかったらよかったという後悔とともに。

その後、看守もレニの言いつけ通りに中にいる聖女^{わたし}の姿を見たが

知らない振りをして通してくれた。

そして、馬車が1日休みなく日暮れまで進んだ。

今日はこの平原でテントを張って休むこととするようだ。

「ささ、マリア様。このテントでお休み下さい！ 例え、モンスターが来ようとも命に代えてでも遵守致しますのでご安心下さい！」

セノアは結局、聖女^{わたし}のことを偽名で呼ぶことはしなかった。

道中に人間と思しき者に会話を聞かれなかったから良かったものの本当に危険だから止めて欲しかった。

それから、聖女^{わたし}の第一の騎士であることであることを示すとばかりにミネアより同行するように言われた商人達に対抗する。このようなことで張り合って欲しくもないのだが。

「セノアも休むようにしてね」

「いえ、私はマリア様を守るという使命があります故に休むことは許されません！」

「そうは言っても明日に響いたら問題があるわ」

「うむむ、ですが……」

「ここにいる商人達は屈強な戦士でもある者達なので信用するように。解りましたか？ 私の第一の騎士であるセノア」

「ははッ！ マリア様の第一の騎士であるセノアはマリア様の言を信じることに致します！」

第一の騎士と呼ばれてホクホク顔のセノアは途中で商人達と見張りを交代することを約束した。

ある意味扱いやすい人物かもしれないと思いがらセノアは床に就いた。

「王国軍の連中が来たぞッ！」

その一言で私は飛び上がるように目を覚ました。

王国軍は明日に出立するはずだったのに？

という疑問は頭から離れなかったが、現状確認をするためにテントから出た。

「どうやら、王国軍がこちらに向かってきているのを俺の仲間が発見したようだ。もう余り、距離もないことだよ。恐らく、譲ちゃん達のことバレたから、早く出立したのだろうな。だから、譲ちゃん達は先にこの馬車を引っ張っていた馬を使って魔王城へと向かってくれ！」

「ですがあなた達が……」

「俺らは商人であり傭兵であるプロだぜ？　王国軍相手に時間を稼ぐことぐらい、朝飯前だぜ」

と言った後に「まあ、本当に朝飯前だがな」と言いながら、馬を留意してくれた。

「聖騎士である私も残りましょうか？　戦闘になった場合はかなりの力になれることは保障できますが」

「いや、その譲ちゃん一人だと、魔族の地は色々危険だから、聖騎士の譲ちゃんには護衛としてついていけ」

「そうですか。解りました」

そう言つてセノアは馬に乗った。

それに続くように私も馬に乗った。

「魔王城はそう遠くないから、その馬達を飛ばしていけ。それから、この許可証は渡しておくから魔族に見咎められた時には許可証を出せよ」

「はい、何から何までありがとうございます」

「おう、早く行け」

「はい」

そう言つて私とセノアは馬を駆けだした。

商人達にも迷惑を掛けてしまったので絶対に王国軍に捕まる訳にはいかない。国を救うためにも。

「まったく王国軍に捕まるのではなく、魔王軍に捕まることが国を救うことになるとはおかしなことね」

そう一人呟いて、国を救うために馬を走らせた。

俺は今日もモンスターが巣くう森へといって、実戦訓練を積んでいた。ヴェルトは最近、忙しいようでヴェルトの訓練を受けずに実戦訓練をすることがここ2、3日は続いている。

といってもヴェルトの専属のメイドであるエミリーが付いてきてくれるおかげで危険はない。

初めてこのエミリーという魔族なのに天使と見間違える程に可愛いメイドがサポートするためにモンスターがいる森へと付いてくるといったときには驚いた。正直に言う足手まといになると思った。しかし、それもエミリーの直後の行動によって懸念は払拭された。そのかわり恐怖を植えつけられることになったが。

「ヴェルトが来れない代わりにこのメイドさんが来るのか？」

「ああ、そうだ」

「……正直に言って足手まといだろ？」

「あ、バカかお前は……と言っても遅いか」

「グレイは私が足手まといになると思ってるの？」

「うん？ そりゃ、足手まといに決まってるよ」

そう言った直後にメイドさんから放たれた何かが横を通り過ぎた。

知覚出来ない程に速い何かだった。

「ドゴオオオオ!!」

後ろで大きな音がした。

うん、振り返るのが怖いね。

「足手まとい?」

「いえ、滅相もございません」

そう聞いてくるメイドさんは笑顔だった。

うん、恐怖だらけだ。

本当にこれは天使の笑顔ではなく、悪魔の笑顔と言ったほうが適切だろう。

「うん? 何か言った?」

「いえ、何もありません!!」

「そう、ならいいわ」

まったく、なんていう勘というか感知能力だ。思考を全て読まれているのではないかと思えてくる。

確実にヴェルトなんかより強いだろうとも思えてしまう。警戒すべき悪魔だ。

「……まだ、失礼なこと考えてる？」

「いえ、そのようなことはありません」

「まったく……いいわ。信じておいてあげる」

ホッと胸を撫で下ろした。

「まあ、次に思ったらコロすわね！」

やっぱり、その笑顔は恐すぎる。

「それよりもヴェルトに報告してくるから、後は好きにしてね」

「はい、解りました。教官！！」

そう言ってエミリーはヴェルトがいる部屋へと向かった。

俺も帰ろうかとも思ったが、反省する点を思い出して、自主訓練をするために訓練場へと向かうこととした。

ここに来てからの訓練によって自分の能力は確実にかなり上がった。

だが、飛躍的に上がった能力は速さと魔力の二つである。臂力においては上がったことは上がったが、まだ一般兵士と特に遜色がない程度だろう。といっても魔力による身体能力補正を行えば、もう少し強くはなる。

それでも強敵と戦う場合はやはり臂力は見劣りしてしまう。

オーク・ジェネラルのときもそうだが、相手との力比べが出来ないことは戦法として大きなデメリットを背負い込んでしまっている。それを解った上で戦闘方法を決める必要がある。

まず一つ目の戦闘方法としては相手をスピードで上回り、漆黒の短剣^{トス}による攻撃で相手を倒す戦闘方法だ。

漆黒の短剣^{タナトス}による一撃を加えることが出来たら、相手には大きなダメージを与えることが出来る。一撃の威力は臂力がないといっても漆黒の短剣^{タナトス}のおかげでカバー出来ている。

但し、この戦闘方法は相手のスピードが俺よりも格下である場合にとる戦闘方法だ。

そして、相手のスピードを上回ることが出来ない場合は、魔法による遠隔攻撃を加えながら、相手の隙を作って漆黒の短剣^{タナトス}による攻撃を行うといった戦闘方法だ。

相手が俺と変わらない程度のスピードである場合、相手の隙のない相手に対して一か八かによる攻撃は行わないようにする。これはオーク・ジェネラルの時にも理解したことだ。

このことを念頭において俺は魔法攻撃と通常攻撃の連携の自主訓練を続けていた。

「誰かいませんか？」

しばらく訓練を続けていたら、人を呼ぶ声が聞こえてきた。なんだろう？　と思いつつ俺は音のする方へと足を向ける。そして声を出していたであろう人の後ろ姿を見つけた。声を出していたであろう人は修道服を着た腰まで伸びた赤毛の女性であった。

「どうしたんですか？」

俺のすごく親切なる声に気付いたようで女性は後ろへと向きながら、口を開いた。

「あの——って勇者^{グレイ}？」

「ん？ 確かに俺はグレイだけど？」

清楚で深遠の優しい曲線を描いた眉、そして優しき強き瞳をした神々しい女性が俺の名前を知っていた。

はて？ 知り合いだろうか？

「——ってあなた、今まで何してたのよ？」

「え？ 自主訓練だけど？」

「って、そういう意味じゃなくて——」

「とかどちら様？」

「わ、わたしのこと知らないというか忘れちゃったの？」

「ん？ 知り合いだっけ？」

「ばかあああああああ！！！」

「あぶねえ！！！」

何と修道服の女性はあるうことか無詠唱による魔法の攻撃をしてきた。

咄嗟に避けたが、以前の俺なら死んでる可能性のある攻撃であった。冷や汗が止まらない。

「マリア様ッ！！ どうされましたか？」

「あッ！ なんでもないわよ。ちよっと取り乱してしまっただけよ」

その魔法を放つマリア様とやらをどこかにやってくれ、と願いな

がら突如として姿を現した連れであろう銀髪の女性を一瞥した。
銀髪の女性は心なしか顔を歪ませてこちらを見ているような気がする。まさかね。

「無礼を働いたお前は万死に値する!!」

銀髪の女性は腰に付けた長剣を抜刀した。

いや、話を聞こうね。勝手に人を悪者だと決めないでほしいいいいいい。

俺は袈裟切りで斬りかかってきたところを辛うじて避けた。いや、本当に危ない。死ぬ。

「待て待て、本当に死ぬから止めろ!　というよりか話を聞け!」

「無礼な輩の話を聞く必要などない。それから私は本当に貴様を殺すつもりだああ!」

「いや、だから死ぬって!」

そういつて銀髪の女性は剣を振り回して襲ってきた。

本気で避けていたというよりか逃げまわっているというのが正しい状況だ。

「セノア、その人は勇者よ。それに私に無礼を働いた訳じゃないから剣をしまつて」

「くッ!　マリア様がそうおっしゃるのであれば」

何故、惜しそうな顔をするのだ、と聞きたかったがそれ以上に命が惜しいので止めておく。『命を大事に!』は生きていく上で重要だ。これ重要。

というよりかマリアさんとやらはどこかで見たことがあるような――。

「解ったッ！ 君は聖女様か！」

「ええ、そうですよ。私は聖女です」

「そうか、そうか。って何で聖女様がこんな所へ来てるんだ？ さすがに道に迷ったわけでないよな？」

「貴様ああ、マリア様をバカにしているのかああああ！」

「セノア、少し下がりなさい。話が進まないでしょう」

「くッ！ 止む得ないか」

本当に一々、突っかからないで欲しい。訓練以上に汗を掻いてしまうから。

「私は魔王に用があるのでここに来たのです。なので、魔王がどこにいるか解りますか？」

聖女様が魔王に用などあるものだろうか？ まったくなんの用かは解らないな。

「解るから案内するよ。着いてきてくれ」

「ありがとう」

「ふん、仕方ない。貴様に従うのは癪だが聞いてやろう」

何か約一名の返答が可笑しいがもう放っておくこととする。

「聖女め！ どこにいる！」

そうして、ヴェルトがいるところへと案内しようとした時、またも見知らぬ叫ぶような声が聞こえてきた。

「まずい、追いつかれた」

聖女の顔に危機感が見られた。

その後、またも一人の女性が馬と共に現れた。

セノアと同様に戦う女性として短い青髪の美しい女性。そして、脳裏に焼き付いて離れない美しき中に棘以上に危なさを感じさせる、寧猛な瞳をした女性。

「聖女よ、何を企んでいるのですか？ 全く、早く帰るようにしてください。……おや、そこにいるのは勇者^{クッ}じゃない。久しぶりね」

俺は固まってしまった。仇敵いや、過去に俺を散々痛めつけてきた主犯の一人。

その一人を前にして恐怖で身体が竦む。

「勇者^{クッ}はほっとくこととして。聖女よ、ここは魔族の地です。早く帰るようにして下さい。それとも、何か企みでもあるのですか？ まったく、これだから教会の連中は嫌なんですよね」

「貴様あああああ！」

「おや、あたしに剣を向けますか？ それではあなた達は王国軍に敵にするということですか？ そうなると王国は内乱にでもなるのでしょうかね？」

「セノア、止めなさい」

「さすが聖女様は賢明ですね」

そういつてヤツは笑った。

聖女は諦めきれないがどうしようもないことが解っているのか唇を噛んでいた。

「おや、俺が捕まえた人質に何かするつもりか？」
「誰ッ？」

「俺の事を聞いているのか？ それならば、お前はバカか？ 俺に宣戦布告をしに来たのだろうに」

いつの間にか現れたヴェルトが聖女の横に立っていた。
そしてよく解らないが聖女はヴェルトの人質ということになっているようだ。

「くッ！ そういうことねッ！ 聖女め！」

ヤツは聖女を睨みつけた。どうやら、思惑を崩されたようだ。

「だがな。あたしが聖女を取り返せば、人質から解放することが出来るんだよ！」

「お前如きにそんなことはさせんよ」

ヴェルトは瞬時に姿を消して、ヤツの後ろへと移動した。

「くッ！」

ヤツも瞬時に高速で距離を取り直すように動いた。

だが、やはりヴェルトに比べるとスピードが違う。多人数で挑むならまだしも一対一では勝負にはならない程に実力は離れていた。

ヤツもどうやらそのことを悟ったみたいで、殺気を消した。

「この場は引いてやるが、寝首を欠かれないように気をつけておきなさいよ」

「それは鬱陶しいな。それより少し話をするから聞いていけ」

「――何の話？」

「まず勇者のことだ。勇者は現在、俺と決戦の延期を承諾していて、修行をしている最中だ。お前らが考えていたように勇者が負けた訳

ではないので土地を奪うことはしない」

俺とヴェルト以外が驚愕と言わんばかりに固まった。やっぱりそう思われていたんだな。

「だから何だと言うの？」

「だから、お前達は早計だと言いたいのだ。勇者が俺に勝つ可能性があるのだぞ？」

「何をバカなことを。アイツはクソだ。あたしはそれを良く知っている。だからこそ言える。勇者が勝つことなどない、とね」

「それこそ、お前の間違いだ。クソだクソだ言っているがアイツはお前より強いぞ」

「は？ 何言ってるの？ アイツがあたしより強いわけないじゃない！ バカにしてるの？」

ヤツは最高にバカにされたというような顔をして返答した。

「ふん、信用出来ぬなら、明日に決闘でもして確かめて見ろ」

「ええ、そこまで言うのなら確かめてやるわよ」

「なら、話は早いな。明日に決闘を行うこととし、お前が負けたら、『決闘は延期されていた。更に勇者に勝つ見込みがあるため、戦争を行うには時期尚早である』ということを国に報告するようにしろよ」

「アイツに負けることなんてないから何でも言うことは聞いてあげるわ」

ヴェルトとヤツが勝手に話を進めてしまっただけ何もかもが決まってしまった。

当事者であるはずの俺は理解が出来ない。ヤツと戦う？ いや、無理だ。俺には勝てない。負けてしまう。

「あら、今からビビってるのね。明日が楽しみね。久しぶりに可愛
がってあげるわ」

地面が崩れ落ちていくのを感じた。

決闘前夜

――&1t;魔王>――

決闘を取り付けた後、青髪 of 兵士は他の兵士がいるだろうと思われる場所へと帰っていった。グレイも茫然とした様子で自室へと帰っていった。

「マリア様！ 私もお供いたします！」

「もうここまで来れたみたいだし、大丈夫だからセノアは教会へと帰っていいわよ」

「例えここまで来れたと言ってもここは魔族の巣窟です！ こんな場所ですら一人になるなど危険すぎます！」

「危険ではないと思うわ。そうですね？ 魔王様？」

そして残った二人である聖女ことマリアと護衛であろうセノアが言い争いを始めた。

内容としては、セノアがここに残るか残らないかといったことだ。恐らく、マリアはセノアが残ることが嫌なのだろう。正直、俺としてはどっちでもいいがな。

とりあえずマリアに味方するわけではないが聞かれたことに対してのみ返答する。

「そうだな。捕虜となった者に対して無礼な真似はしないぞ。だから、危害を加えることなどない」

「うるさあああああ！ 私はマリア様と話をしているのだッ！ 黙れッ！！」

護衛のセノアとやらはどうやら、相当に気が短いらしい。それに魔族を嫌悪しているようだ。

教会の人間ということだから、そこまで珍しくはないが、魔王で

ある俺に対してここまで言えるヤツは珍しいだろう。

それから今のやり取りでセノアが帰って欲しい理由は理解出来た。あと、マリアは常識があるようで「ごめんなさい」と俺に対して謝っていた。

「――だから、マリア様！ 一人はダメです！ 私を――」

「いーえ、あなたには帰ってやるべき――」

二人が平行線を辿ったままに言い争いを続けている。めんどうだ。これはなかなか終わる気配がない。そう感じた俺は横やりを入れることとする。

「確かにいくら、魔王である俺が信用しろと言っても信用できないことも解る。だからだ。護衛とやらもここに居たらいい。そうすれば、色々とマリアも助かることが多いだろうし、マリアの世話に手を焼くことも少なくなる」

そうセノアを帰らせるのは骨が折れそうだったので、セノアに味方することとした。

「マリア様の名を気安く呼ぶな！ この魔族め！ だが、今の発言は聞いておいてやろう。マリア様、アイツも賛同していることもありますので私もここに残ることとします！」

「……仕方ないわね。解ったわ」

どうやら、俺の後押しもありセノアもここにいることが決まった。と言っても恐らく俺が横やりを入れなくてもセノアの粘り勝ちだったろうとは予測できたがな。

「客間へと案内する。二人とも着いてきてくれ」

「はい、解りました」

「仕方ない。魔族の後に続くのは嫌だが着いて行ってやろう」

そうして、俺と二人は歩き始めた。

歩く際に二人は月明かりに照らされて幻聴的な雰囲気を出す絵画が掛けられていた廊下の壁を意外そうに眺めていた。

何故、意外そうに眺めていたのかは『魔王城なのに綺麗だ』ということらしい。そう二人が話していた。

そういえば、グレイも『綺麗ではないはず』とか言っていたな。いったい、魔族にどんなイメージがあるのか気になるな。

「何点かお尋ねしてもいいですか？」

「構わない。但し、歩きながらだがな」

少し歩いて城内の観察が終わったのか、マリアは尋ねてきた。

聞かずとも聞きたいことは予想できるのだがな。一応、聞いておこう。

「まず、一点目です。何故、直ぐに私の目的が解ったのですか？」

「お前達が入国した時点でお前達の中に聖女がいることも知っていた。その聖女が入国したとなったら、ここに来ることは予測できた。そのおかげで聖女がここに到着するまで考える時間はたっぷりあったから、時間を掛けて考えていた。だから、直ぐに解ったというわけではない」

「何故、私達がここに来ることを予測できたのですか？　もしかしたら、違う所に用があったのかもしれませんが」

「この時期に限ってその可能性は低いだろう。その辺りも考えてはいたが、外れたら外れたで構わない。元々がイレギュラー要素だったから、マイナスにさえ、ならなければいい」

「そうですね」

ここで二つのことは伏せておいた。

まず一つ目は入国前から聖女が魔王城に訪ねてくる可能性がある
と解っていたこと。これは諜報員の報告内容から推測したことによ
り可能性があると解ったのだ。もちろん確定情報ではなかったがな。
二つ目は目的について直ぐに予想できたこと。これは国を強く想
っている人間であれば、直ぐに思い付くはずだ。

あえて、隠す必要もないのだが、言う必要もないと判断して伏せ
ておいたのだ。

「ふん、魔族がそこまで考えている訳ないですよ。魔族なんて野蛮
な奴らが何かを考えることなどできません。たぶん、あの時はたま
たま解っただけですよ」

さっきまで一人黙っていたセノアが文句を言ってきた。文句の内
容はかなり幼稚だ。

相手をするのも疲れるので、適当に合わせておく。

「どう捉えようが構わんない。……それで聞きたいことはそれだけ
か？」

「いえ、もう一点、大事なことが……」

「着いたぞ。とりあえずここが客間だ。だから聞きたいことは手短
に話せ」

そうこう話をしている内に客間へと着いた。

そして、俺はやるべきことがあるので手短に話をするように促し
た。

「なッ！ マリア様に何と無礼——」

「黙れッ！ 生憎、俺はお前と付き合う暇はない！ 黙らないとい

うのであれば、無理やりにも黙らすぞ」
「ッ！」

セノアは俺の気当りに負けて一步後ずさった。額には汗が流れていた。

どうやら、相手の力量を見極める力ぐらいはあるようだな。しかも、俺の気当りで一步引く程度に留めていることから、実力はけっこうなものだろう。

「解りました。単刀直入に聞かせていただきます」

「何だ？」

「勇者が明日の決闘に勝つ見込みはあるのですか？」

「アイツなら勝つ」

俺は即答した。迷う必要もない。なぜならば、信じていたからアイツを。

「階級では隊長ですが、相手は仮にも『氷壁の騎士』と二つ名を持つほどの力量の持ち主で大隊長クラスです。そんな相手としても勝てるというのですか？」

「くだい！ アイツは勝つ」

「でも——」

「お前はアイツのことを信じてやれないのか？」

「え？」

「俺はアイツの強さを信じているのではなく、アイツ自身を信じているよ。確かに実力から考えると今回の戦いは負けるかもしれない。だがな、俺が信じてやらねば、アイツのことを誰が信じてやるんだ。それにな。アイツが本当にやってくれるだろうという気持ちは嘘じゃない。俺はアイツを信じているからな。お前はどうか？」

「私は……」

「お前も勇者じゃなくアイツを知っているなら信じてやればいい。勇者じゃなくグレイをな」

マリアは俯いたままだ。

俺はその俯いたマリアの返答を待たずに去ろうとする。

「私は……私はグレイを信じます！ あなたよりも強く信じます！」

「そうか。解ったが、俺に言っても仕方ないぞ」

「そうですね。でもあなたには言っておきます。私はグレイを信じていると」

「ふん、そうか。なら、いいが、俺は失礼する」

俺はそう言って去っていった。

「入るぞ」

俺はグレイの部屋へと訪れた。明日の決闘について話をするために。

グレイは部屋のベットへと腰かけ俯いたまま俺に反応しなかった。明日の決闘の相手がどうやら、トラウマのある相手だったのは解っていた。だから、今も放心状態であると解っていた。

そんなグレイに対して言うことがあったから、俺はここへと訪れたのだ。

「グレイ、お前は明日、アイツと決闘する気があるのか？」

「……」

「お前は俺に勝つつもりではなかったのか？ あれぐらいの小物は倒さないと俺には勝てんぞ。お前はそんなに弱かったのか？」

「お、俺は……」

「お前は負け犬か？ 地べたに這いつくばるしか能がないのか？」

お前は弱いな」

「……ああ！ 俺は弱い！ だけど、俺だって弱くなりたかったわけじゃない！ 俺だって小さい頃から頑張ってきたんだ！ でもダメだったんだ！ 俺は弱かったんだ！ いつも、いつもアイツラにやられた！ 俺は名ばかりの勇者だって言われながらやられた！ 確かに俺は名ばかりだった！ 魔王のお前には解らない！ お前には解るはずもないんだあああああ！！」

「……解るはずもない」

「そうだろ！ 努力もしたことのない才能のある奴が俺の苦労なんて解るはずもない！ 俺だって――」

「解るはずもない！ お前みたいに諦めているヤツの気持ちはな！ 俺は、お前を信じているんだ！ お前が勝てるってな！ お前は諦めてしまっているかもしれないが、俺は諦めてない！ お前は弱くなんてないからな！」

「俺は弱い！ 何でそう思っているのに言わないんだよ！ 知ってるんだ！ 全ての人が俺を弱くてどうしようもない偽^{ヤツ}勇者だと思っ

てることはな！ お前だって本当はそうなんだろうよ！」

「お前は弱くない！ 俺はお前を信じているし、期待している！ 勇者としてではなくグレイだから俺はお前を信じている！ 俺はお前が目指す強さを知っている！ そして、お前はそれに向かって歩んでいることも知っている！ 思い返せ！ お前を、勇者という過去ではなくお前自身を」

「俺は……」

「お前は俺のライバルだ。そして、お前は本当の強さを持っているはずだ。まだそれは小さくて弱弱しいがな」

言うべきことは言った。俺はもういいはずだ。

俺は後ろへと向いて扉へと向かった。

「ヴェルト」

扉に手を掛けたときにグレイに呼びとめられた。

俺は振り返らずに返答をする。

「なんだ？」

「ありがとな」

「ふん、俺は何もしていない」

「そっか、解ったよ。じゃな、お休み」

「お休み」

どうやら、明日は良い勝負になりそうだ。

決闘 ——<勇者>—— **(前書き)**

遅くなりました。。。 (待っている人がすみませんでした。。。)

決闘 ――＜勇者＞――

「へえー。逃げずにきたようだね。てっきり逃げ出すと思っていたのにね」

「逃げねえよ」

俺は青髪 of 騎士、クリュス・ブリーナの真正面へと立つために決闘場を歩む。

決闘場は直径100メートルぐらいの大きさ。そして、観客席にはチラホラとこの魔王城にいる者達とクリュスの率いてきた兵士達 がいた。

そして、俺が歩む先にいるクリュスはかつて俺を苦しめてきた一人。

その一人に勝つために俺は真正面に立つ。

「ふん、強がりぐらいはできるようになったようだね」

「強がりかどうかは自分で確かめればいいだろ？」

「そうね。確かめてやるわ！」

俺はクリュスに証明してやる。クズじゃなくて強き者であることを。

その俺らの間に近づく者がいた。ヴェルトだ。

ヴェルトは両方を見て口を開く。

「両者ともに用意はいいか？」

「問題ないわ」

「大丈夫だ」

「解った。ではこれより、クリウスとグレイの決闘を始める。決闘は相手が負けを認めるか相手を殺したほうを勝者とみなす。それから、他者による助言も援護も認めないものとする。それ以外についてはルールは特にない」

「決闘場から逃げ出した場合はどうなるの？」

「その場合は逃げ出した者を敗者とする」

「解ったわ。勇者には残念なルールね」

クリウスは見透かしたような笑みを浮かべ、言った。

おそらく、俺が逃げ出す姿でも想像しているのだろう。だが、それは絶対にならないと知っているから、挑発に乗るようなことはない。

「そんなルールがあろうがなかろうが関係ない」

「そうね。関係ないわね。自分が負けても惨めに生き残りさえすればね」

「どう捉えても構わねえよ。それよりもヴェルト、始めてくれ」

俺が早く決闘を始めるように促したことにクリウスは驚いた表情をしていた。

おおかた、俺は決闘をしたくないとも思っていたのだろう。残念ながら、大外れだがな。

「そうだな。始めるとするか」

ヴェルトは息を吸い込み、「始めッ!!」と勢いよく言って、観客席にまですぐに移動した。

「ふん、どうやらあたしの恐さを忘れたみたいだから思い出させてあげるわ!」

クリュスはそう言って、俺に向かって殺気を放つ。

俺は生死を掛けた戦いを経た。だから、クリュスの殺気だけで逃げるなんて行動はしない!

「へえ、殺気を放ったんだけど、逃げないなんてね。鈍感なの?」

「鈍感なんかじゃねえよ。殺気ぐらいは解る。殺気ぐらいじゃ逃げないってことだ」

「生意気な……」

クリュスが手を向けた。

その手には魔力が集められていた。おそらく、魔法を俺に放つ!俺は魔力を体内に循環させて、身体能力向上を行う。

「氷よ一つの槍と化し、敵を貫け、氷の槍」
アイスジャベリン

クリュスから『氷の槍』が高速で放たれた。
アイスジャベリン

俺は相手の魔法を予測できていたこともあり、サイドダッシュを行って回避した。

「へえ、小手調べとはいえ、避けるなんてね。思ったよりもクソはクソなりに頑張ってるみたいだね」

「そうだな。俺は俺で頑張っているよ」

昨日見たとき、クリュスのスピードは俺と同等ぐらいと感じた。

だから、回避した後も不用心に距離を詰めなかった。

「じゃ次はもっと攻めてあげるわ！」

「また、避けてやるよ」

「ふん、言ってな」

クリユスは魔力を身体に循環させている。

魔力はさっきと比べて大きい。これはさっきより大きいのが来る！

「数多の氷の弾丸、敵を貫け、氷の散弾」

「くッ！」

『氷の槍』より速い速度で氷が飛来する。

氷の弾丸を一つサイドステップにより、ギリギリに避ける。だが、そこにまた氷の弾丸が飛来してくる。

俺は何度も飛来してくる氷の弾丸を右へ左へと身体を動かして避けていく。この氷の弾丸は速くて数も多い。

だが、ヴェルトの回避訓練程ではない。アレはもっと速く数も多い。これぐらいなら、避けてみせる。

「うおおおおおおお！」

「なッ！」

俺は飛来してきた氷の弾丸を全て避けきった。

そのことでクリユスは茫然としている。今がチャンスだ！

「喰らえ！」

「……くっ！」

俺は無詠唱にて低威力の光の銃弾ライトブレットを放つ。

クリュスは高速で放たれた魔法に反応が遅れたため、回避を行ったあとに態勢が崩れた。

俺はクリュスが魔法を回避し態勢が崩れることを予測していたため、距離を詰めておいた。

「これで終わりだ！」

「!？」

俺はクリュスに向かってタナトスを振りかざす。

……甲高い音が鳴り響く。

「なッ！」

驚く番が変わった。

俺はクリュスに向かって振りかざしたはずなのに甲高い音があった。それはタナトスを振りかざしたがクリュスに届く前に氷壁に阻まれたためだ。

クリュスは氷壁の向こうで毒々しい笑みを浮かべた。

「ふふふ、本当に勝てると思ってたの？ このクズが！」

クリュスはそう言って、腰から剣を抜き、斜めに斬りあげた。

俺はタナトスを振りかざして止まってしまっていたため、反応が遅れる。だが、反応が遅れながらも身体をひねって出来るだけ避ける。

そして、態勢を立て直してバックダッシュをして距離をとった。

「残念ね。あれじゃ避けられなかったようね」

俺はひねって攻撃を回避したが、完璧に回避することは叶わなか

ったように胸が浅く斬られていた。

ただ、そこまで深い傷ではないため、致命傷になるほどではない。だが、斬られたところから、血が流れて体力が落ちていく。これによって長期戦を行うのは不利ということになってしまった。

それにそんなことより、大きな問題がある。

そんな俺を見透かしたようにクリュスは笑って、口を開く。

「そうね。クソの心配はあたっているわよ。私の氷壁はクソアイスウォールごときに破れないわ。それでも私は『氷壁の騎士』の二つ名持ちだからね。クソ程度には負けないわよ」

「……」

そう大きな問題——それは攻撃が無力化されてしまうということだ。

相手の氷壁アイスウォールの発動よりも速く攻撃できれば問題がないが、速く攻撃出来ない場合については恐らく全ての攻撃が無力化されてしまう。そして、発動より速く攻撃するのは先程の無詠唱からの発動を見ている限り、発動を上回る速度で攻撃することは出来ないだろう。

そう、相手の攻撃を避けることは出来ても攻撃する手段がない。これではジリ貧だ。いずれ、相手の攻撃を避けなくなり、負けてしまう。

何か勝機を見出さなければ勝負にもならない。

「何を考えても無駄！　クソは負けるだけだからね！」
「!？」

無詠唱で氷アイスショットの散弾が放たれた。しかも、先程以上のスピードで放たれた。

俺は予測出来ていなかったことと先程のダメージにより、完璧に回避出来ない。

肩・腹・足。

徐々に傷を増やしていく。

「クッ！」

「ほらほら！ さっきまでの威勢はどこにいったの？ やっぱクソはクソだねえ」

「まだ負けてねえよ。勝ちへの途中だ」

「ふん、良くそんなことが言えるわね。じゃあコレも避けてみな！」

クリュスは氷の散弾の弾幕を増やしてきた。
アイスショット

只でさえ、避けきれていなかったため、傷を増やしていく。

何とか致命的となる程の傷を負わないようには避けていくが、これではジリ貧だ。どうにかしないと。

「考え事する余裕なんて、あるのかい？ とりあえず、もう鬱陶しいしやられな」

クリュスはそう言ってもう一本の腕を上げ、魔力を込める。そして、クリュスは5メートル程度の巨大な氷の槍を中空に浮かべた。先程とは比べ物にならない。

だが、俺は氷の銃弾を避けるのに精一杯で何も迎え撃つ準備が出来ない。といっても、準備する時間があつたところであんな攻撃を迎え撃つモノなんて用意出来ないだろうがな。

しばらくすると魔力を込め終わったようでクリュスは此方をみて、バカにしたような笑みを浮かべる。

「氷よ一つの槍と化し、敵を貫け、氷の槍」
アイスジャベリン

まだ飛来していた銃弾を破壊しながら、巨大な氷の槍が突き進んでくる。巨大ながらもスピードは氷の銃弾より速い。

氷の銃弾を避け続けて態勢を崩していたこともあり、避けられそうもない。

——直撃する！

「うおおおお！」

避けられない。

だったら、俺が取る行動は一つ。タナトスで受け止めるしかない。氷の槍と衝突させる。その瞬間に強い衝撃を受ける。

「がッ！」

氷の槍の質量と威力は相当なモノであったようで、俺は受け止めきれなかった。そして、吹き飛ばされて壁に叩きつけられる。

背中を強く打ってしまったようで肺から空気が全て吐き出されてしまう。

だが、何とかタナトスで受け止めたため、直撃は逃れた。

「ハハハハッ！ 何とか直撃は免れたようだねえ。だが、クソの負け決まったようだね」

「か、勝手、な、ことを、言う、な」

「ククククッ！ そんな身体であたしに勝てると思ってんのかい？」

「か、かてる」

「何を抜かしてるのかねえ。このクソがッ！」

「がはッ！」

いつの間にか近寄ってきたクリュスに蹴り飛ばされる。

俺は地面を不様に転がる。

「ふん、不様だねえ。でも、アンタにはお似合いだよ」

クリュスはそう言って見下す。

確かに俺はダメだな。クソって言われても仕方ない。
もう負——。

「グレイ！ 私、グレイを信じてるからッ！」

聖女から俺を応援する声が聞こえた。

「はん、脳みそがクソな聖女様だね！ それから、外野は黙ってな！ 助言は無しだろう？」

「うるさいわねッ！ 助言じゃないわよ！ ただ応援しただけよ！」

「この愚弄め！ マリア様に何て口を聞く！！ それにマリア様が仰る通り、先程のは助言ではなく、応援だ！ それぐらい解れ痴れ者がッ！」

「ふん、それも禁止だって言ってんだろう？ まったく、聖女様とやらはどこか頭がおかしいんじゃないの？」

「——お前達、黙れッ！ 戦いを始める前にも言ったが、助言は無しだ。だが、今のは助言には程遠い応援モウであつたから、一回だけは許そう。だが、もうしないようにな」

——負け何て言ってるんじゃないな。

俺、自身が諦めるのは早いだろ。

「——う、うおおおお！」

力を精一杯込めて立ち上がる。

まだ負けていない。なら、まだ足掻こう。不様だ、とかは関係ない。

俺を信じてくれる人がいる。——俺が必死に戦う理由としては十

分だ。

「はあ、聖女様は頭が可笑しいようだね。こんなのがあたしに勝つと思うなんて」

「俺は、まだ負け、ていない！」

「じゃあ、勝てないとよく理解させてあげるよ」

クリュスはそう言って氷の障壁を出現させる。

「ほら、攻撃してきな。クソの攻撃なんて効かないからね」

「うおおおお！」

俺は光の銃弾を数発放つ。

そして、タナトスによる攻撃をする為に、距離を詰める。

まずは光の銃弾が氷の障壁に衝突するが、氷の障壁に阻まれる。続けてタナトスで斬りつける。だが、やはり氷の障壁を破ることは叶わない。

「うおおおおおおおお！」

一撃で破れないなら何度も攻撃を重ねるだけだ。俺はタナトスを何度も斬りつける。

……だが、やはり何度も攻撃を重ねても破ること出来ない。

「ふう、バカだね。まだ理解出来ないのかい？ アンタに付き合うのも鬱陶しいッ！」

クリュスは氷の銃弾を俺へと放つ。

俺は録に回避すら出来ず氷の銃弾に腹を撃ち抜かれ、後方へと飛ばされる。

「がはッ！」

腹を撃ち抜かれてしまったため、吐血する。
そして、力を失くして地面へと倒れこむ。

「ふん、この雑魚が。これで解ったろ？ アンタの負けだよ！！」

クリュスは勝ちを確信した声で俺に言う。

「お、おれ、は、ま、けて、ない」

俺は言いながら立つ。俺は負けていない。だから、何度でも立つ。

「ッ！！ 本当に鬱陶しいね！ もう、死なないように手加減していたが、我慢ならない。アンタのことをアタシが殺したとなると面倒だけど、もういい！ 死ねッ！」

クリュスは本当に俺を殺すつもりで魔力を集束させ始めた。

中空に浮かぶ巨大な氷の槍。それは先程の倍はあろうかという巨大さ。恐らく、クリュスが放つことが出来る最大の威力の大きさなのだろう。それを喰らえば満身創痍である俺は簡単に死んでしまうだろう。

だが、俺は止まることは出来ない。いや、俺は負けていない。無謀だと思われるが、俺はクリュスに負けたなんて一切、感じていない。俺に^{グレイ}期待してくれた人がいる。そして、俺も俺自身を信じている。

俺はまだ強くなてない。だが、俺は強くなる。そして、このクリュスを超えるのは今だ。

俺は強くなる！！

「死にな！ 氷の槍アイスジャベリン！！」

氷の槍が俺に迫り来る。

それは空気を振動させ、大地をも凍らせる直進してくる。

俺はその氷の槍アイスジャベリンに対してタナトスで斬りつける。

タナトス。俺のライバルである魔王から譲り受けた最高の剣。俺は俺を信じてくれたアイツの力を借りて、勇者としてではなく、一人の人間として、強くなる。アイツよりも、誰よりも——強く。アイツとの約束を果たすために。だから、こんなところで立ち止ってなんかいられない。

「うおおおおおおおおおッ！」

斬りつけたタナトスは俺の意思に呼応するかの如く、俺の魔力を吸い強き漆黒の光を放ち、刀身を変えていく。

漆黒の長剣——タナトス。タナトスは長剣と化した。その刀身は依然よりも黒く強き輝きを秘めた神秘なる剣となった。

そのタナトスをもってして、氷の槍アイスジャベリンを真っ二つに切り裂く。

「なッ！」

まさかの光景により、クリュスは驚愕の表情を見せ、隙が出来る。俺はその隙を見逃さずに距離を詰める。そして、氷壁をも打ち破るためにタナトスを振るう。

「くッ！」

クリュスは氷壁を張った。そして、タナトスと衝突し、甲高い音になる。

氷壁はタナトスの剣戟を止めた。

「……は、はは。……焦らせるんじゃないよ。結局、アンタはこのアタシには敵わないのさ!」

「俺は……俺は勝つッ!!」

タナトスは俺の意思に従うかの如く、更に強く強く漆黒の光を増す。

氷壁はその光に伴い、音をギシギシとたてる。そして、氷壁にヒビが生じる。

「そ、そんな? まさか?」

俺は意思と共に自分が出せる力を込める。いや、自分が出せる力の限界を超えて力を込める。

魔力が尽きようが、身体が疲弊しきっていようが、俺は——勝つために力を込めるだけだ!!

ヒビが隅々までに入った氷壁は音を立てて砕け散る。

そして、俺はすかさずタナトスをクリュスの首に突き付けて言う。

「俺の勝ちだ」

クリュスは為す術もなく、首にタナトスを突き付けられた。

それは、俺の勝ちを示すこととなる。

「あり得ないッ! こんなことはあり得るはずがない!!」

クリュスは叫ぶ。俺に負けたことが信じられないといった様子だ。いや、俺にまだ負けたということを認めていない。

クリュスは首にタナトスを突きつけられているのに動こうとしたため、首が傷ついてうっすらと血を流す。

「止まれッ！ お前が動けば、タナトスで斬りつけるぞ！」

「……ははは、やればいいじゃないか！ アンタはアタシの事が憎いんだろう？ だったら、やればいいだろ？ ええ？ やればいいだろうがッ！！」

クリュスは覚悟が決まっているのか、俺にやれと命ずる。

だけど、俺は――。

「俺はクリュス、お前が憎いと思った時期もあったよ。だがな、俺はあの頃とは違う。お前だって俺は殺したくない。いや、違うな。俺が目指す強さにはお前を殺すことで近づくとは思わない。それにお前がいてくれて、俺は感謝している。あの頃は俺が弱かったからダメだったんだと解ったし、お前のおかげで強くなる決心がついた。俺が目指すモノが見つかったんだ。だから、俺はお前を憎まないし、それよりもライバルの一人として一緒に強くなれたらいいなと考えているよ。また今回みたいに戦って二人で強くなっていきたい。だから、俺はお前を殺さず、二人で強くなっていくつもりさ」

「……ふふふ、あははははッ！ 本当にバカだね。アタシを憎んでいない？ 全く、どんだけお人よしなんだよ！ ライバル？ そんなのにはならないよ！ 今回はたまたま負けただけだけど、これからはずっとアタシが余裕で勝ち続けるからね」

「ふむ、ではクリュスよ。お前の負けでいいか？」

「ああ、いいよ。今回はグレイに対して最初で最後の負けだ」

クリュスはいつの間にか近くに来ていたヴェルトに尋ねられて負けと返した。

クリュスはバカバカしいと言わんばかりに俺をみて笑いながら言

った。

その笑顔は先程までと違い、一人の女性として可愛く綺麗だった。

「何見とれてんのよッ！」

「ぐはッ！」

いつの間にか近くに來た聖女から光の銃弾ライト・ブレットが放たれた。そんな
って俺に直撃し、俺は吹っ飛ぶ。

いや、待て。俺、怪我人だぞ。なのに何で魔法を放つ。俺、なん
かしたか？

「なによ。さっきのアレ。ま、まるで、こ、こ、こ、くは、く、み
たい、じゃない」

「何言ってるんだ？」

聖女はもう一度、魔法を放とうとする。いやいや、ちょっと待て
！ 何で？ 意味わかんねーよ！

——って、本当に放ってきたッ！

俺は必至に避ける。いや、いくら弱い威力っていつても重傷な相
手にそんなことしたら、ダメだろ。

「捕えました。聖女様！ 今です。やってしまっして下さい！！」

うん、セノアさん。アンタ、本ツツツツツ当ツツに俺を殺す気
だよな。

何で会って間もない頃から、そんなに殺気いっぱい何だ？

まったく、意味が解らない！！

——ってその間に聖女が本気の魔力込め始めてるよ。いや、俺、
重傷だよ？ いや、死ぬってええええ！！！！

「戯れるのはそんなところにしろ！」

「むう。解ったわ。これくらいにしておく」

「チッ！」

おい、待て。一人可笑しいだろ。「チッ！」ってなんだよ！ 殺したかったが仕方がないみたいな顔すんなよ！

だが、ヴェルト。ナイスなタイミングだったぜ！ さすが、俺に負ける運命のライバル。

この調子じゃ決闘の時に余りにも差があるだろうから、可哀想にならないように手加減するようにしてやるぜ！

俺はヴェルトに対してウインクを送る。ちゃんとかバカにも解るようにな。

「……後で好きにやれ」

「ならいいか」

「ふふふ、やってやる」

おい、待てええええ！

ヴェルトよ、俺の顔を見て意見変えただろう。

なんで？ 手加減してあげる約束しただけなのに！！

つつーか、セノア。俺をやる気か？

「とりあえずだ。脱線はもういいだろう」

「ああ、そうだな」

真面目な顔したヴェルトに俺はそう返した。

そして、ヴェルトは大きく息を吸い込み、口を開く。

「この度の決闘の勝者は、グレイだッ！」

ヴェルトの放った声は決闘場の隅から隅にまで聞こえるような声で俺の勝利宣言がされた。

なあ、ヴェルト。

俺、少しは強くなれたよな。

決闘　——＜勇者＞——（後書き）

相変わらず、ちよつとご都合主義すぎますかね？

とりあえず、グレイは『強さ』の欠片を手に入れました。これから、先もその目指す強さに向かって彼は強くなっていきます。

それから、駄文にお付き合いいただき、ありがとうございます。

決闘その後 ――＜魔王＞――

グレイとクリュスの決闘後、クリュスに二つのお願いをすることとしていた。

まず一つ目が、『勇者と魔王の決闘は延期』ということを手間達に伝えてもらう。もちろん、その際には『勇者は強くなっている最中であり、魔王に勝つ見込みもある』というのも流布してもらう。

この事により、戦争の開戦は時期尚早であることを悟らせる。

だが、やはり目の前の問題である食料難をどうにかしないことは開戦をすべきだと言うものもあるだろう。

その問題については二つ目のお願いにより解決させる。

二つ目、『延期を持ちかけたのが魔王からということもあるため、延期の了承の交渉材料として、食料の譲渡をする』ということを手間達に伝えてもらう。

この事により、開戦する理由を弱くする。さらにはすぐに開戦する必要を無くすことが出来る。それに幸いにも魔族の食糧は余りある程に余裕があるからな。

その二つのお願いにより、人間達が開戦する理由は弱くなり、少なくともすぐに開戦する必要はなくなる。

だが、この解決方法では一つの懸念が生まれてしまう。それは食料まで献上する魔族は恐怖して開戦をしないと考えられてしまう可能性があることだ。この事により、開戦賛成派が調子付いてしまう

だろう。

それにより、開戦の可能性は残ってしまう。ただ、このまま放っておくよりも可能性は格段に低い。

だから当初、それは仕方がないと考えていたが、聖女が協力的であるということでは話は変わってくる。

まずはだ。食料の献上量を些細な程度にする。些細とは、これでは食糧難になりそうな者たちに対する食糧で1週間程度の猶予しか得られないという程度だ。

それでは、すぐに開戦する必要を無くすことは出来ないだろう。焼け石に水程度で軍議に余裕を持たせて、少し延ばせる程度だ。

そこで聖女の出番だ。

聖女は教会でも重要なポストに位置する。だから、今回はそれを利用する。

まず聖女のポストを用いて教会に食料を贈る。そして、その食料は教会の施しと評して食料を配給する。

これにより、食料難は緩和され、開戦する必要性は薄れるはずだ。さらに表向きの食料の献上量が減ることで恐怖しているなどと思われる可能性が低くなる。

それであれば、教会からの食料配給だけで事足りるのではないかとは思いがちだが、それはそれで問題は出る。

その問題とは案の議決と配給ルート確定の時間の確保だ。

まず当案の議会は必須だろう。いくら聖女が重要なポストといっても教会の方針を一人で決めることは出来ない。だから、当案の議会が必要となる。といっても、今回の件について教会も協力的であることから議決は決まったようなものだがな。ただ、時間は要する。それから、配給もルートを確定しておかないと軍にダメ出しされたり、横領されたりする可能性も残るため、時間を要する。

だから、食料の献上は僅かな猶予を生む程度にはしておく。それ

により、僅かでも猶予が出来れば、教会が事を済すことが出来る。

という訳でクリュスには『勇者と魔王の決闘延期』連絡と『延期の詫びの食料』話を伝えるようお願いをした。

「仕方ないね。けど、言う事を聞くって言ったしやっただげるよ」

と言葉は渋々だが、本当のところは嫌そうではなさそうな表情で答えてくれた。

聞き入れてもらうためには手こずりそうな相手と思っていたが、意外とすんなり済んだ。意外と義理がたいのかもしれない。

その後、クリュスは帰国する準備をし出発した。行きと同じように道中で襲われないように手配もしておいた。襲われて機嫌を損ねると面倒だからな。

クリュスの出発後に聖女――マリアと話をする。

あの護衛とやらがいると話が進まないの二人で話をさせてもらった。

ただ二人になる際にも護衛はわめき散らして面倒だった。マリアがよく説得することで黙ったが、本当に面倒なヤツだ。

そして、二人きりになった後、マリアに食料配給の話を提案する。初めマリアは驚きの表情を見せ、次第に冷静になり考える。具体的に考えているのだろうか。

そうして、少し時間が経過した頃にマリアは口を開く。

「確かに私の立場があれば、可能な話だし、私が人質になるということで一時的のぎするより、遥かに良い話だわ」

「ああ、人質になるということでは根本的な解決にはならないからな」

やはりと言うべきか、マリアは考えることが充分に出来るようだな。これなら、話は早そうだな。

「でも、一つ問題——いや、確認があるわ」

「なんだ？」

「正直、魔族である貴方、いや魔王である貴方がここまでのことしても大丈夫なの？ 謀反が起きてしまったりしない？」

やはり、マリアは鋭いな。

確かにマリアの言う通りの懸念は大いにしてしまう。只でさえ、勇者を魔王城に住まわし、強くしていたりするのだ。

これ以上、魔族の大勢の者達に反感、不信感を抱かせてしまうと魔族の中でも調子に乗る者達が出てしまう。

だが——。

「そんなことが起こったとしても関係ないな。俺が鎮めてやるよ。なんたって俺は最強の魔王だからな」

そう俺は最強の魔王だ。

だから、力で解決させる。それに、謀反といっても一部の者が決起して、裏で決闘をやる程度だろう。

ならば、全て撃破してやればいいだけだ。

戦争なら一人の力だけではどうにも出来ないが、標的が俺。しかも、裏での戦いなら、力さえあればどうにでもなる。

「ふーん、意外とグレイと似てるのね」

「……どこがだ？」

「さあね。内緒よ」

「……」

グレイと似てる。これがこんなにも重いとはな。予想外だな。

「それよりも、それなら了解だわ。教会の件については任せて」

「ああ、頼む」

意外と色々と探られたが特に問題なく了承してくれたようだ。

「じゃあ、セノアに頼むわね」

「……待て」

「なに？」

「何故、お前が帰国しないのだ？ だいたい、お前が帰国し発言しなくれば、意味はないだろう？」

「別にセノアに私の書いた文書を持たせれば大丈夫だからよ。それだけ、教主様は協力的よ。それに万が一、策が上手くいかない場合に私の身柄を上手く使うほうがいいでしょ？」

確かにマリアの言う通りだ。マリアの身柄は此方にあるほうが戦争の開戦する可能性は下げることが可能だ。

だが、有用であることは確かだが、いくら何でも敵地のど真ん中に居ようと思うのか？

——まあ、いい。余計な詮索はせずに協力してくれるなら、協力してもらおう。

「そうか。そこまで言ってくれるなら、協力してもらおう」

「ええ、協力するわ。それよりも貴方には多大な恩があるから、それに比べれば安いモノだけだね」

マリアはそう言った後に「文書を準備するわ」と文書の準備に取りかかり行った。

その後、マリアとセノアは俺の自室に訪ねてきた。

やはりと言うか、セノアはかなりご立腹な様子だ。だが、この部屋に笑顔のマリアと一緒に訪れたということは渋々ながらも了承したということだろう。

「セノアは説得したわよ。それから、セノアは今から出発するからその連絡で来たわ」

「わざわざ、済まないな」

「お前！ 聖女様にもしものことがあったら、絶対に殺すからな！」

セノアは親の敵でもあるような目で俺を見据える。俺は随分と嫌われたものだ。いや、俺がじゃなくて魔族が、か。

といっても過去の歴史から考えるにそれは普通なのだろう。マリアみたいなのが珍しい。

「任せろ。俺がいる限り大丈夫だ。それから、万が一、もしものことがあれば、お前ごときには殺られはせんが、この命を持ってして償おう」

「貴様ッ！！」

「セノアッ！ 魔王様は命まで掛けた約束をしてくれたのよ。それに対して文句を言っではならないわ」

「……魔族が言うことなど信用出来ません」

「全く、さっきも言ったけれど、今の状況を考えたら信用に足る相手だと解るはずよ。それにはさっきも納得したわね？」

「そ、それは」

「ハイ、じゃあこの件については終了よ。魔王様、用件はそれだけです。失礼致します」

「……くッ、失礼する」

「ああ、頼んだぞ」

そう言った後、二人は部屋を出ていった。あの場では収まったもののセノアは相変わらず俺を睨むことを止めなかったな。といっても不快でもないから気にならないがな。とりあえず、これで開戦についてはどうにかなりそうだな。

後日、セノアが帰ってきて、教会から協力の意向を受けて、開戦を回避するようにした。

その行動によって、開戦はされずに済んだ。狙い通りだ。

これで魔族と人間の醜い争いが無くなった。そして、今日も変わらずに執務室で仕事を続けていたら、急にドアが勢い良く開かれる。訪問者は――。

「今日こそ覚悟しろッ！俺は最強になったんだッ！！見せてやる真の力というモノを」

「グレイ^{バカ}か」

「ククク。そう言ってもらえるのも今の内だ！」

「どうやったら、治るのだろうか」

「フッ。余裕ぶっこく暇なんて無くしてやるよ！たあああ！」

光の銃弾を数発放ってきた。

俺は避けることもせずに、手を前に出して魔力の防壁を張ってヤツの魔法を消去する。

「そんなこと予測済みだぜッ！ 本命はコッチだよ！」

グレイは机を飛び越えて、タナトスで斬りかかってきた。

「はぁ……バカが」

斬りかかってきたタナトスを華麗に回避して、バカを蹴り飛ばす。

「ガバッ!？」

バカは派手な音をたてて壁に背中を打ち付けた。
だが、バカにはまだコレでは足りないだろう。

「お、俺はまだ負けない！」

「……もういい。黙っとけ」

バカは治らないとは思うがうるさいし黙ってもらうために永遠の業火を放つ。勿論、中々消えないようにかなりの魔力を込めて。

「ヘッ、そんなの効かねえなあ。タナトスで切り裂いてやるよッ！」

そう言っバカはタナトスを振り切……れずにタナトスが吹っ飛んだ。

「へ? ……ってギヤアああああ!!」

バカは間拔けな声を出した後に、目前に迫った永遠の業火を避けきれず燃やされた。

全く、バカは死んでも治らないという言葉は確かだな。とバカを

見てると感じられずを得ない。

あれから、特に変わらないうも通りの俺と勇者の日常。
そんな人によって色々ある日常。

そんな日常を守ったんだ。グレイよ、解ってるか？

お前が目指す強さに近づいてるってな。

ある聖女の昔話　――＜聖女＞――（前書き）

マリアの昔話です。グレイくんも登場しています。

ある聖女の昔話 ――＜聖女＞――

私の告げた言葉。

それが引き金となり、一人の少年を苦しめてしまうことになった。怒声、罵倒。それは何度も何度も少年に向けられ、必要以上に少年を苦しめていた。

幼き私は訳も分からずに、周りの罵倒を聞いていた。

聖女だ、なんだ、と言われていても所詮は子どもで人の気持ちに無頓着だったということだろう。いや、むしろ人の気持ちには疎かったかもしれない。あれを聞いていて、良く解っていなかったのだから。

ただ、あの日を今になって思い出すと胸を強く強く締め付けてしまふほどにあの少年はつらかったのだろうと思うようになった。

そして、どれだけ自分が愚かであったのかを思うようにもなった。

「おお、聖女様ッ！ 私たちは聖女様にいつも感謝しております」

巡回中に国民の皆様から、感謝の言葉をいただく。

それは本当に私に感謝している言葉で、形式というものではないことが解る。

だけど、私は感謝の言葉をいただくほどのことをしていたわけではない。

だが、私は相手の気持ちを考えて笑顔で口を開く。

「ありがとうございます。私もいつも貴方たちに加護が有らんことを祈っております」

「ああ、有り難き幸せです」

「それでは失礼します」

私の気持ち。それは本当の感謝の気持ちをくれる人たちに対して、失礼だと思う。

だけど、私は何か偉いことも凄いこともまだ出来ていない。

そのことがあり、私は本当に感謝の気持ちに応えることは出来ない。

「聖女様？　どうかなさいましたか？」

「いえ、何でもありません」

「そうですか。ならいいのですが」

護衛の人が私を気遣って声をかけてくれた。

というよりも私がそこまで追い込まれているのが気づかれる程に表に出てしまっているのだろうな。

私は本当にどうしようもないし、弱いな。

信者である国民たちはいつも私に感謝してくれる。聖女である私に。

私は特別なことをしたわけではない。

むしろ、私はすぐ目の前で苦しむ少年に何も出来ない程にどうしようもないのに。

私は教会で光の神である白神の特殊な加護を持つ聖女として育った。

確かに私は聖女として強き癒しの力を持ち、聖なる加護を一身に

受けた者だ。

だが、私は聖なる加護の力を使いこなすことは出来ていない。私が今出来ることは、一般の聖職者と遜色ない程度の治療魔法を扱えるといった程度。

そのため、私は主に行っていることは普通の治療魔法による国民への救済といった程度だ。

それは聖女でなくとも出来ること。

私が治療せずとも他の者が治せるということ。

私はそんなことしか出来ていない。

そして、教会からの施しを実施する際には私が表舞台にたって行われることが多い。

それが国民からの支持を受ける理由。

そう私は作られたハリボテ。

聖女として特に何も出来ない。

そんな聖女であるが聖女でない私。

そんな私に嫌気がさしていた。

だから、皆の気持ちを否定したくなることもある。

だけど、皆の気持ちを考えるとそうは出来ない。

確かに、そうすることで皆に安らぎを与えることは出来ているのだから。

そして、それには国民の皆さんにとって必要であるということも解る。

でも私は自分に納得出来ない。それは私のワガママだろうが、気持ちは解っていても制御出来ないから。

そうして、頭の中で色々と考えながら、巡回していると、いつものあの光景を見掛ける。

あの少年がよってたかって殴られ蹴られている光景。

「何が勇者だ。ケッ！ 条約があるから殺しはしないが、本当に目障りなんだよッ！」

「いつも笑いやがって気持ち悪いなッ！ お前には笑う権利なんてないんだよッ！」

「ちッ！ 何で末裔流血事件での生き残りがお前なんだよッ！ このグズがッ！」

あの少年に暴言を吐きながら様々な人が殴り、蹴り、あの少年を傷つけていく。少年はなす術もなく地面に横になっている。

私はそれをいつも見過ごす。

止めても意味のないことであると解ってしまったているから。止めても次から私の見えないところで行われるようになるだけだから。

例え、止めたとしても、救われるのは自分。この光景を見たくない自分が見なくていいようになるだけ。

自分の心を救うために止めても意味がない。

少年が救われないのに私だけが救われる。こんなことは許されてはいけない。

だから、私はいつも通り、見過ごそうとした。

「聖女様？ どうかなされました？」

その場から遠ざかろうと一步踏み出そうとした時、足が止まった。そんな私を不思議そうに見ながら、護衛の者が声を掛けた。

私は、私の目の前から、この光景を消したい。

そう強く思ってしまった弱い私は足を止めてしまった。

そして、本当に今さら止めるために口を開いてしまう。
本当は止まらなないと知りながらも。

「その人たち、勇者を傷つけるのは、そこまでしておきましよう」

「ですけど、コイツは勇者であって勇者じゃないですよ」

「勇者でありながら勇者じゃないから、と言って痛みつけるのはダメです。彼だってこの国の民なんですから」

「……そこまで聖女様が言うなら止めます」

「ありがとうございます」

渋々といった様子で勇者を痛みつけていた者たちが去っていく。
そして、その去り際にある一人が寝そべっている勇者に「ケツ！
明日は覚えておけよ！」と囁いていたのが聞こえた。

そうやっぱ私が止めたのは意味がないと解るやり取りだった。

……いや、意味はある。

意味……私にかかる負担が減るということが。私の心が救われる
という意味が。

そう考えると私は自分に嫌気がさす。

人のために起こした行動と見せ掛けて自分のためだなんて。
救わないといけない者を救わずに自身を救うだなんてね。

「勇者さん。大丈夫ですか？ 彼方で治療しましょう」

「聖女様、巡回は終わりましたし、そのような者は放って置いて帰
りませんか？」

「いえ、大した怪我ではないとは言え、生傷だらけでは辛いでしょう。
治療しておきます」

「聖女様がそこまでおっしゃるのであれば仕方ないですね。では私はこの辺りで周りを警戒しておきます」

「ええ、宜しく願いします。さあ、勇者さん。彼方のベンチへどうぞ」

促された通り、少年は公園に設置されたベンチへと腰かける。

そういえば、少年は私のことを覚えているのだろうか？

いや、あの悲惨な出来事を作った切っ掛けの人物を忘れているはずなどない。恨まれているだろう。

何も出来なかった私に。今も何も出来ない私に。

「えっと……まだかな？」

「へ？」

「治療するんじゃない——」

「はわッ！　します！　治療します！」

ブーツとしてしまっていたのが恥ずかしく焦って返事をしてしまった。

すると、少年がクスリと笑っていた。その顔は純粹で綺麗な笑顔だった。

……ってまた意識が飛び掛けた。早く治療をしよう。

『白なる祈り。汝の傷ついた身体を癒す光を今ここに現れんことを
祈る。癒しの光』

ヒーリングライト
癒しの光を発動させ、少年の先ほど受けた生傷を治す。

私の力では、昔に受けた数々の古傷の痕……毎日増やしている傷の痕を癒すことは出来ない。

心の傷も治せない。
傷ついていくのも止めれない。

——そう私は無力。

そうしている間に、気がつく^{ヒーリングライト}と癒しの光が消えていっていた。
どうやら、魔法による癒しが終わったようだ。
結果、少年の生傷は見事に癒えていた。

「うん、痛くないや、ありがとう」

少年は傷が癒えたことにより、私にお礼を言う。
私なんかにお礼を言う。

私は自分が楽になりたくて彼を一時的に助けただけなのに。
——それなのに。

「……どうしたの？」

「私は貴方に礼を言われる資格なんてないわ」

そう私に礼を言われる資格などない。私は私を助けただけなのだから。自分の心を救いたかっただけなのだから。

だから……だから私に礼なんて言わないで。

「資格があるとかないとかよく解らないけど、俺が言いたいから言っただけだよ。だから、いいんじゃない？」

「だけど、私は貴方が苦しむのを見るに耐えなくなって助けただけ。苦しむことを止められたのは私だけ。貴方は苦しむことが止まらない。そう知っていて助けたとしても貴方は……貴方はッ！」

正直に言う。

私がとんでもない自分勝手な人間だということを。私は弱いというのを。

少年に嫌われたくなかったが、それ以上に自分を偽ることが嫌だったから素直に言った。

「うん、言うよ。俺が助かったな、と思ったのは真実だし、苦しみが続くのを止めれないのは俺のせいだしね。それに何よりも君が全てを救えなくても責任を背負う必要はないしね。だから、実際に救われた感謝してくれる人たちの気持ちを素直に受け取ったらいいよ」

「でも私は聖女。だから、私は他の人よりも救わなくてはいけない。それが私の役目なのに」

「そんなことを言ったら、俺なんてダメダメだろう？ でも君は精一杯に頑張っている。そして、少しだけど色々な人の気持ちを救っている。俺だって、今だけしか救われていないように見えるけど、こうして誰かが助けてくれたということは色々と支えになるよ。だから、本当の意味で嬉しかったし、救われたと思っているよ。だから、俺の気持ちも受け取ってね」

そして、少年は純粹な本当の笑顔をする。
それは本当に眩しくて綺麗だった。

「ありがとうッ！」

心に染み、頬を濡らす。

濡れた頬は冷たなくなり、暖かった。

「あつと、そろそろ帰らないとヤバいから、俺は帰るね。じゃあね」

そう言って少年は帰っていった。

その姿をみた護衛の者が終わったと判断して此方へ来た。そして、

私を見て驚きの声をあげる。

「聖女様！？　どうなされたのですか？　大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫です。ただ……」

「ただ？」

「嬉しくなって、救われたなって泣いただけです」

そう私は救われたのだろう。この暖かさはそうに違いない。
私は幻に囚われていた。

そして、その幻は勇者に祓われた。

だから、その日に私は泣いた。

ある聖女の昔話 ――<聖女>―― (後書き)

次はセノアの話です。

聖騎士の帰り道 ――<セノア>―― (前書き)

セノアのお話です。マリアより長いめ。

聖騎士の帰り道 ――<セノア>――

「全く、私が何故こんなお使いをしなければならぬ」

私はマリア様の使者として教会へと出向いた。

ちなみに何の使者かというと、和平のための使者だ。魔王が考えた策をマリア様がまとめた文書を届け、策の返答についても教会から預かり、魔王へと渡すといった使者。

そして、今はその帰りの道中だ。

「戦争でもして、魔族など滅ぼせばいいものを」

どうせなら、魔族など滅ぼせばいい。そうとしか、考えられない。私たちは弱きを助け、出来る限りの平穏をもたらす者なのだから。魔族など争いの元。いや、歴史から見ると悪の根源と言っても過言ではない。だから、平穏をもたらす者としては、魔族は滅ぼすべきと考えるのは当然だ。

なのに、教主様とマリア様は魔族と敵対せずに和平を選ぶという。全くもって理解出来ない。

「グルルウッ！」

「モンスターか」

唸り声をあげながら、狼型のモンスターであるフアングが森から街道に現れた。

フアングの大きさは人間程で速度が速いモンスター。なお、攻撃は自身の大きな爪と牙から繰り出すのみだ。

速度は速いが攻撃が爪と牙のみで単調ということより、E十十ランク程度のモンスターだ。

Eランクは一般兵士で相手が出来る程度だ。

ファングは唸り声を止めて、此方へ突進を始める。

私は剣を抜いて臨戦体勢をとる。

ファングは風のように駆ける。

速い……それは一般兵士レベルから見た印象。私からすれば、遅いッ！

ファングが目前へと迫ったところでサイドステップにより、攻撃を避ける。避けざまに剣を横一閃させる。

ファングは上下に二分されて、後方で倒れる。どうやら、一撃で絶命したようだ。

「ふむ、この程度のモンスターなら、余裕だな」

この程度のモンスターなら、良く倒して弱き者を守ってきた。

魔王もこのぐらいなら瞬殺してやるのに。

「きやああ、助けてッ!!」

街道の横の森から、悲鳴が聞こえた。それはいつも守ってきた弱者の悲鳴と一緒だ。

だが、ここは魔族の領域の街道。ならば、悲鳴の元は魔族だろう。助ける必要などはない。

そう思いながらも、いつの間にか私は悲鳴が聞こえたほうへと駆けていた。

悲鳴が聞こえた場所へと近づいたときに、ある光景が見えた。

それは、幼き魔族の少女をファング5匹ほどが前から追い込んでいる姿。

様子から察するに少女はファングに襲われているのだろう。少女

はカタカタと震えているのが良い証拠だ。

魔族の少女など、と思いながらも身体は勝手に動いて、ファングから少女を守るような位置へと移動していた。

「お、お姉ちゃん？ た、助けてくれるの？」

「当たり前だ。後ろへ下がっている」

震えている少女の言葉に当然と言わんばかりの返答をした。これも自然と出てきた。

そのやり取りをしている最中に一匹のファングが飛び出してきた。不用意に飛び込んできたファングを剣で真っ二つに一刀両断する。そのファングが真っ二つになったせいで他のファングが驚き固まる。その間に間に距離をつめて、もう二匹ほど剣で葬り去る。

その後の二匹が我を取り戻して、左右から攻撃を仕掛けてくる。私はバックステップをして、左右から迫りくる攻撃を避ける。そして無防備になったファングに二撃を繰り出して、葬り去る。

そうして、瞬く間にファングを全滅させた。

私は少女の元へと行き、頭を撫でてやる。

「もう倒したから、安心してよいぞ」

「……ええええん」

少女は私に抱きついてきて、息を急ききるように泣く。余程、怖かったのだろう。今もまだ震えている。

その少女を落ち着かせるために私は頭を撫でてやる。「大丈夫」と言い聞かせながら。

しばらくすると少女は震えも収まり泣くのも止めた。

そして、輝くような笑顔を見せて口を開く。

「お姉ちゃん。ありがとうッ！」

「礼にはおよばん」

そうは言うも少女の笑顔に気持ちが嬉しくなる。やはり、人は笑顔がいいな。

これを守るために私は強くなったのだとも思える瞬間だ。

といっても、本当は魔族の少女ではなく、人間のために強くなったのだから。

泣きやんだ少女を見て、一つの疑問を訪ねてみる。

「そういえば、何故こんな場所にいるのだ？　ここは集落からは離れているかと思うのだが」

「……お母さんが病気で倒れたの。それでこの森の奥に生息する薬草が必要だから、取りにきたの」

少女は全くもって無謀な話をした。恐らくだが、この森はモンスターが多く生息している。

そんな森の奥に行くとしたら、モンスターとは確実に出会うだろう。そして、モンスターに出会い戦う術がなければ、殺されるだけだ。

もちろん、この少女には戦う術などない。だから、本当に無謀なことをしている。

ただ、それでも母親を救いたいという気持ちいっぱいまでここまで来たのだろう。

悩ましいことだな。

この少女を放っておくと、モンスターに襲われて次は間違いなく

死ぬだろう。

と言ったところで、少女は言うことを聞いて集落に戻ることはしないだろう。そうでなければ、そもそもこんなところに来りはしていないだろう。

そもそもだ。私は少女を止める必要もないし、助けてやる必要もないだろう。

なぜならば、少女は魔族。

魔族なぞ死んでしまっても……。

「はぁ……。仕方ない薬草取りに付き合っでやる。貴様だけでは、死んでしまっだろうしな。それだとまたま今回助けたのに目覚めが悪い。だから、ほんとーに仕方なく付き合っでやる」

「お姉ちゃん、ありがとうッ！」

少女は満面の笑みを浮かべ、私に抱きついてくる。「えへへへ」なんて漏らしている。嬉しそうな笑顔だ。

ふ、ふん。仕方ないから、頭を撫でてやる。

……本当に仕方ないからだぞ？

それから、一人だと本当に怖かったのだろうか。そのこともあってこっやっで抱きついてきているのだろうか。

「礼はいいから、さっさと薬草を取りに行くぞ」

「うんッ！」

そう言っでから、二人は出発した。

その後、何度かフアングやゴブリンなど下級レベルのモンスターと遭遇するも問題もなく対処する。

下級レベルなら群がろうが雑魚に変わりなく、私の相手にもならない。もつとも少女一人ならそうもいかないだろうが。

「あれッ！ あの、薬草が捜していた薬草ッ！！」

「見つかった良かったな。……だが、見つけたくないものも見つけてしまったようだ」

「うん？ お姉ちゃん？ 何かあるの？」

「ああ、飛びきりにヤバいのがな」

薬草があつた位置から森の奥。そこから、レッサードラゴンが現れた。

レッサードラゴンは小さいドラゴンだ。ただ、小さいというのはドラゴン種の中での話。

実際に今、目の前にいるレッサードラゴンは体長4メートル程だ。それからレッサードラゴンの鱗は鋼鉄並に硬く、高威力の爪やブレスなどの強烈な攻撃を持つ。

ちなみにドラゴン種では下級ランク。ただ、それも普通のランクからすると高ランクに位置する。

レッサードラゴンはBランクといったレベルだ。人間では大隊長クラスの強さと遜色ない。

私の相手としてはかなり強敵だ。それでも、何とか勝てるかもしれないレベル。

といつても少女を守りながら戦うとなると、厄介な相手というか勝てない相手になる。

……いや、いざとなれば、少女を見捨てればいいか。そこまで庇ってやる必要はない。

ただ気が散ることと守りながら戦うことは出来ないのは確かなので少女を後ろへ下がるように合図する。少女も事態を解っているようにで後ろに直ぐに下がる。

さて、死闘でもするか。

剣を抜いて、身構える。そして、魔力を循環させる。

「光よ。鎧となり、剣となり、血となり、我に力をもたらせ。光の纏い」

私が唯一得意とする魔法である光の纏いを使い、戦闘能力を上げる。

光の纏いは補助魔法の一種で攻撃力、防御力を上げる効果と身体に光の属性を付加することが出来る優れた上級の魔法だ。尚、光はライトブレット光の銃弾などと同様で光による攻撃にも使用することが出来る。

先程までの敵では使用しなかった魔法だが、この敵には使っていないと勝負にならない。それだけの強敵だ。

こっちが準備が出来たのと同時にレッサードラゴンは口に瞬時に魔力を集める。

——ブレス系の攻撃が来る。そう思った瞬間に炎のブレスが放たれる。

それを見る前に光を纏った剣で一閃放った。

光は横一閃で炎のブレスへと向かい、衝突を起こすが、少しばかり炎を押し止めるだけで終わる。炎のブレスを消し去ることなど叶わない。

だが、そのことは予測出来ていた。だから、一閃を放った後に、直ぐにサイドダッシュをしていた。何とか、時間を稼げれば十分だったのだ。

ゴオオオオツ！！

炎は轟音を上げながら横を通過する。もくろみ通り、炎を回避することが出来た。

回避出来た直後に相手との距離を詰め、斬撃を繰り出す。

ザシューー。

ドラゴンの鱗を裂くが筋肉で斬撃が浅い位置で止まる。

鱗にかなり勢いが殺されたことと筋肉の固さで致命傷には程遠い結果となった。

攻撃した直後、身の危険を感じて剣を引き距離をとるために後ろへと飛ぶ。

次の瞬間、ドラゴンから炎のブレスが先程までいた場所に放たれた。

冷や汗が流れる。

あと少し遅れていれば、炎のブレスが直撃して大ダメージを負っていたところだ。

一瞬の遅れが命取りとなる。それほどまでに一撃の威力は凄まじい。

といっても、回避すれば問題はない。それに致命傷は一撃で与えることは出来ないが、ダメージを与えることは出来る。

この分なら、全て相手の攻撃を避けて、攻撃を重ねれば何とか勝てる。

勝機を見い出した後に何度も攻撃を繰り返していき、ドラゴンを弱らせる。

——あと少し攻撃をくらわせば、勝ち。

体力と魔力を消費するもそう思えるところまで勝利が見えてきた。そうして、あと何度か攻撃を加えれば、終わりを迎えるといったところで、ドラゴンは明後日の方向に炎のブレスを放とうと準備する。

——どうした？

と考え、ドラゴンの目標を追う。

すると、そこには少女がいた。

その少女を確認するやいなや私は遮二無二考えずに駆ける。

駆けてきた私が少女とドラゴンの間に入ったところで炎のブレスが放たれた。

「くッ！！」

悪足掻きだが、剣を最大限の威力で剣線を炎のブレスに向かって放つ。

——ガガッ！

光の剣線は炎のブレスと衝突し、互いに強く光る。炎のブレスの威力を半ば削ることには成功するが、全てを消しきることは出来ない。

炎のブレスはそのまま私を飲み込む。

ゴオオオオ！！

光の纏いが剥がされ、炎が私を焼く。

腕を交差して炎を受けたため、致命傷にはならなかったが、腕が焼かれてしまう。

腕はボロボロに焼きただれ、剣は地面に落してしまう。

どうやら、直ぐに剣を握る力は残されていない。残された攻撃方法である私の魔法ではこのレベルの相手には対抗できはなし。距離を稼ぎ、治療魔法を掛けて腕を治すことも少女を庇いながらでは出来ない。

これでは、相手を倒すことは出来ない。私の勝ち希望がなくなつた。

といってもそれは少女を見捨てないで戦った場合の話だ。

少女を見捨て、あまつさえ盾代わりとして使えば、隙について倒すことはまだ出来るだろう。

いや、それよりも逃げたほうが良いな。

だが――。

「お、お姉ちゃん？」

少女はこちらの様子を見て、泣きそうな顔をして口を開いた。

さっきまでは笑顔だったのに。

私はこの顔を見たくない。さっきのような笑顔が好きなのだ。

そう私は少女を見捨てて、勝利や逃げることなどはしない。

私の守るべきモノを守らずして、勝利しても逃げて生きながらえても意味がない。

私は命尽きようとも守るために戦うのだから。

「大丈夫。私がアイツを倒す。だから、もう少し待っている」
「……うん」

少女は私の声を聞いて安心する。

そして、あの表情を見せた。あの笑顔を。

さて、勝機はないが、引き分けに持ち込むことが出来る魔法を使うとしよう。

私が無事に済むかどうかは解らないけど、私は守るために戦うのだから良い。

そう決心を決めて余裕を見せているドラゴンに突撃しよう――。

「ふむ、満身創痍だな。手を貸してやろう」

ふと、後ろから見知った声が聞こえる。

私が大嫌いなアイツの声だ。

「魔王……貴様、何のつもりだ？ 私など助けて。私は敵だろう？」
「ふん、セノアは敵でない。その少女を命掛けで守る姿を見て敵などとは思えんよ。それにセノアは守るために戦うのだろう？ ならば、俺が今から戦う理由も解るはずだ」

そう言って、魔王は消えるようにドラゴンへと距離を詰めた。

ドラゴンは全く反応が出来ておらず、魔王が近づいたことにも気づいていない。

「終わりだ」

そう言って、魔王は右の拳をドラゴンへと突き出す。
突き出された拳は絶大な威力を誇り、ドラゴンを貫通した。
そうして、こっちの苦労がバカらしい程にあっさりとドラゴンは倒された。

あのドラゴンが赤子のように扱われた。本当に魔王は強い。

ドラゴンを葬った後に私のもとへ魔王は来た。

そして、私に向けて、手を向けて魔力を集束させる。

——やっぱり、私を殺す気か？

そう思っていたところで予想外の魔法が放たれた。

「ヒーリングライト
癒しの光」

そう癒しの光を使ってきたのだ。光属性であるこの魔法を。
それに私を治療するために使ったのだ訳が解らない。

「何故こんなことを？」

「何故というか、それぐらい解るだろう？ お前は傷ついていたのだ。それが見るに耐えなくてな。元々、肌が綺麗な分よけいにな」

「なッ！ わ、わたしは戦う者だッ！ 肌が綺麗なわけがないだろうがッ！ それに私の問いの答えになっていない！！」

「ん？ 何を焦っているのだ？ というよりか、肌は綺麗だぞ。俺は思ったことしか言わないから本当だ。それよりも、少女がお前を気にしているぞ。一声掛けてやれ」

「ふ、ふんッ！ 貴様に言われんでも解っているッ！ それから焦ってなどいない！！」

私は魔王から目を逸らし、後ろにいる少女へと向く。

そして少女のために口を開く。

「大丈夫か？ 私が倒したわけではないが、もう安心だぞ」

そう言っって少女の頭を撫でてやる。少女は嬉しそうに笑顔を見せて「うん」と言った。

私が見たいのはこれだ。

「うむ、やはり笑顔はいいものだな」

その後、無事薬草を摘み、少女を集落へと送る。

そして少女が持ってきた薬草を煎じてやり、寝たきり状態となっている少女の母親に飲ませてやる。

すると少女の母親は少しだけ瞼を開き、上体を起こした。どうやら、直ぐに効き目が出たようだ。

少女は母親に抱きついて、喚くように泣く。本当に嬉しそうだった。

少女の母親は泣きつかれた少女を胸に抱き、私から経緯を話す。話を聞いた少女の母親は「まったく、この子は」と言いながら、涙を流し、子の頭を優しく、優しく撫でてやっていた。

そして、私に「本当にありがとうございました。この恩は忘れません」と言っって頭を下げる。私としては当然のことをしたただけなので「どういたしまして」と返した。

その後、少女の家を後にして、魔王城へと帰る。
ちなみにだが、魔王はすぐに「仕事が残っているから、先に帰らせてもらう」と言って、一人帰っていった。

そうして、魔王城へと帰ってきたので、魔王に尋ねたいこともあり、私は執務室へと訪れた。

コンコン。

ノックをする。「構わぬ、入れ」と言われて私は執務室へと入った。

執務室へと入ってきた私を見て魔王は「うむ、お前か」と言っていて、仕事へと戻る。

私はその魔王に対して聞きたかったことを聞く。

「何故、あの場に現れたのだ？」

「ああ、セノアが街道から外れたのを確認したことと、あの場所の森ではドラゴンが出ると聞いていたからな。念のため、セノアに危害がないように俺が出向いたのだ」

魔王はそう言って、私を見ないままに応えた。そして、「ギリギリだったし、セノアに怪我があったから間にあったのかどうかは怪しいけどな」と続けて言った。

なるほど、私にも危害を加えないようにするために探知魔法を使用していたのか。

一つの疑問は解けた。では本当に聞きたかった疑問を聞く。

「なるほど。先程の問いは解った。ではもう一つだ。何故、私を助けたのだ？」

そう私が聞きたかったのはコレだ。

正直な話、道中で勝手に道を逸れた私を助ける道理などないはずだ。教会の意向を知っているといっても恐らく魔王はその情報はとくに報告を受けているだろう。それだけ優秀な部下がいることは最近、解ってきたことだ。

ならば、私の価値など特にはないはず。多少、和平に支障を来すかどうかといった程度だ。

わざわざ、魔王本人が駆けつけて助ける必要のない人物。なのに、魔王は私を助けにきた。それが疑問だったのだ。

「それは、あのときにも言ったはずだがな」

「あれでは解らん」

「……俺はお前が守りたかった。ただそれだけだ」

「なッ！」

「俺だってセノアと戦う理由は変わらない。俺は出来る限りの人を守りたいだけだ。ただそれだけだ」

「……ふふふ、そうか」

「……」

笑う私を見て、ヴェルトは酷く不機嫌そうになる。

だが、私は笑ってしまう。止めることなど出来ない。

だって、魔王がただのお人よしだったって解ったら、笑うしかない。

聖騎士の帰り道 ――<セノア>――（後書き）

次は誰の話にするかは未定！！

※今回から←付けるようにしてみました。また気が向いたら、昔の奴にも説明を付けておきます。

《補足》

・レッサードラゴン ― Bランク

鱗、爪牙、目玉、肉など良質な素材の塊である。

知能は動物程度で性質は総じて凶暴である。

そして、ドラゴンというだけあり、熟練した戦士クラス（大隊長クラス）でなければ、組みすることは出来ない。（魔王は魔族でも特別に強いため、弱く見えただけ）

・フアング ― Eランク

Eランクという中では素早く下級兵士を手こずらせるモンスター。

攻撃は自身の爪と牙による攻撃のみ。

群れて戦うことが多い。

・光の纏い

光を纏い、攻撃力・防御力を上げる上級の補助魔法。

また、光による攻撃・防御も可能で、補助魔法ながら攻撃魔法と同等のことも出来る。

使用者は聖騎士でも上級クラスでないとは使えない魔法。

勇者と少年と戦いと――<勇者>――（前書き）

ここのところなんとか連続で投稿できています。ちなみに今回は勇者（本編の主人公）のお話です。

勇者と少年と戦いと――＜勇者＞――

「最近はやつと相手が弱くて楽勝すぎるな」

俺こと勇者は最近の敵であるモンスターの強さに不満を抱いている。

F（D）ランクの敵ばかりを相手にしているのだ。だが、自分にとって、その程度の敵は相手にもならない。

正直に言って、物足りなさを感じている。

クリュスと比べて圧倒的に弱いんだから当然といってもいいだろう。といってもクリュスと再戦すれば、勝てる可能性は低そうだが。

「そうか。グレイも多少は強くなったのだな。ならば、退治依頼が来ているコイツを倒してきてもらおう。もちろん、俺は忙しいからお前に付き合うことは出来ないぞ」

そう言って、ヴェルトは不満気味である俺に一枚の羊皮紙を渡す。
ふんふん、なんて書いてあるかと言うと――。

『ワイバーンが村の近くに生息するようになってしまい、困っています。今はまだ被害が出ていませんが、いずれ被害が出てしまうかと思しますので退治を宜しく願います』

——うん、ワイバーンね。

ってオイッ！ いきなり相手がランクアップだな。

確かワイバーンってドラゴンの亜種の一種で翼竜と呼ばれ、C＋ランクだったはず。

しかも一人で行くのかよ！

「これはいきなしキツくない？」

「大丈夫だろう。クリュスよりは弱い。クリュスはB＋＋ランクぐらいの強さだったからな」

うん、知ってるよ。クリュスのほうが強いことは。

ヴェルトくん、でもだよ。あの時はクリュスが俺を格下の相手として油断し、最初から全力で挑まずに隙をみせたから勝てただけだよね。

それ知ってるよね。舐めてんのかこの野郎！！

「とりあえず、行って来い。地図は用意してあるから、行け。出来る限り早く行けよ」

「クッソー。問答無用かよ」

「ああ、問答無用だ。助けを待っている人がいるのだから、早く行け」

「まったく仕方ないな。そう言われると行くしかねーな」

俺はそうヴェルトとやり取りを行って目的地を目指す。

「えーと、もうそろそろ目的地かな？」

ワイバーン退治の依頼があつた村へと向かっている途中だ。道中にスライムやゴブリンといった雑魚クラスのモンスターが出てきたが問題なく討伐しておいた。

うん、俺は強くなったね。

ほら、今も目の前から、ゴブリンが現れたけど、相棒のタナトスで相手を葬り去る。

いやー、俺は最強じゃね？ ヴェルトを倒すのすぐそこかな。なんて考えながら歩いていると、村が遠くに見えてきた。地理的に目的地は間違いなくここだろう。

「着いたな。では村長さんのところへと行くか」

俺は村で一番大きな家を目指して歩く。やっぱり村長って言ったら威厳も必要だし。一番、大きな家に住むのが普通だろう。

テクテクと歩く俺に一人の少年が立ちはだかり、俺を睨みつける。

俺、なんか恨まれることしたかな？ いや、待て。俺はまだこの村に来たばかりなのだぞ。なのに何故？ うーん、解らない。というよりか睨んでいるって思うのは勘違いだな。勘違い。

うん、解らないから、とりあえず無視だ。むーし。

俺は少年を横から避けて、村長の家らしき場所を目指そうとする。すると、少年も横へと身体を動かし、また俺の前へと立ちはだかる。

「……」

「……」

お互い無言。

俺も特に少年に話すことないしな。そりゃ無言になる。

というか少年、お前は無言になるなよ。

と思いながらも身体をまた横に動かして通り抜けようとする。

すると、少年もまた横へ動き、俺の行く道を塞ぐ。

俺はまた横へ。少年もまた横へ。俺はまたまた横へ。少年もまたまた横へ。俺はまたまたまた横――。

「ってなんだよ。俺の行く道塞いで何だ？」

「お前がワイバーンを退治しにきたヤツか？」

「何で質問を質問で返してんだ？ バカか？」

「バカじゃない。それよりも答えろ。お前がワイバーンを退治しにいくために来た者なんだろ？」

「ああ、そうだよ」

「そうか……なら！」

いきなり少年は剣を抜いて俺に向かって走り出す。

うーん、この状況はアレだよな？

と思ったのもつかの間。少年は剣を俺に向けて振り下ろす。やっぱりね。

俺は、身体を横へと捻って剣を避ける。

振り下ろされた剣は地面へと勢い良く刺さる。いや、これあってたら、ヤバかったね。

「っていきなり何をするんだよッ!!」

「お前を倒せば、俺が代わりにワイバーン退治に行けるから、襲い

「かかったッ！」

「いやいや、そのために俺を殺す気？」

「それはもちろん。何かおかしい？」

「……」

うん、ツツコミ所がありすぎだろ。まず何で助けるために来た俺が殺されるんだよ。

それよりもワイバーン退治したいなら、勝手にしろよ。

っていうか国の使いを殺したら偉いことになるぞ、少年。そこんとこ解ってるのか？

ああ！！ 何から突っ込めばいいか解らないから黙ってしまったじゃないか！

「マルッ！ お主は何をやっているのだッ！！ その方は国より要請で来ていただいた方ではないか！！ 勝手な真似はするな！！」

「チッ！ クソ親父が」

いきなり、村長の家らしきところから出てきた中年のおっさんに少年ことマルが叱責される。

やいやい！ 良い気味だぜッ！ ふははははッ！

っと脱線しても意味がない。それよりも話をとっとと進めよう。

「えーと、俺はグレイ。アンタがこの村の村長さんで依頼主ってことでいい？」

「その通りの認識で間違いないです」

「じゃあ依頼の内容を詳しく知りたいんだけどいい？」

「良いですよ。詳しいことは中で話しますからとりあえず家へどうぞ」

「はいよ。お邪魔しますね」

そうマルを空気扱いして村長と詳しく話を聞くために家へと招かれる。

空気のマルは俺の後ろへとついて、「ケッ!」と言いながら家へと入った。

コイツ、不法侵入じゃないのか?

そう言った不安な視線を送っていると。

「その子は私の愚息になります」

村長さんは恥ずくように言った。

いやいや、解りますよッ! 確かに愚息ですね。うん、うん。

次は村長さんからも少し厳しい視線を感じる。

いや、待て。俺ちよつと同意しただけだよ。それだけで何故、そんな顔で見られる? お前さては騙しやがったな!!

とかどうでも良い思考は置いといて、話を進めよう。

「それよりも、ワイバーンの話をしてくれない?」

「はい、解りました」

村長さんから、ワイバーンについての話をしてもらう。

ワイバーンは大きな翼と長くしなやかな尻尾を持つドラゴンの亜種。前脚はなく、腕部が翼になっている。尻尾は硬く鋭い鏃のようになっている、攻撃に気をつけなくてはならない。

そんなワイバーンが村のはずれにある山で見かけるようになったらしい。

今は、村でも屈強な男たちが見張りをやっているようで、この村に襲撃がありそうな場合は、足止めと連絡をして、被害を最小限に抑えようとしているらしい。

ただ、屈強な男といってもこの村では戦闘能力が高い者は少なく、

ワイバーン相手だと分が悪いそうだ。

だから、村を襲いに来る前に、山で襲撃を行って、ワイバーンを倒して欲しいというのが依頼内容だ。

「なるほど、解った。確かにワイバーンが来たら、被害になるし倒してくるよ。場所はどこ？」

「ありがとうございます。ではワイバーンがいるところまで案内致します」

話を聞いた俺はワイバーンを倒すために、ワイバーンが潜む場所へと連れて行ってくれるように促す。

そして、それに応えるように村長が言う。

「ちょっと、待て！ 俺もワイバーンを倒すのに連れていけ！！」

スルーしていたはずのマルが口を開いた。

ぜったい、その言葉を言うと思ったけどね。そうじゃないとあんな突っかかり方しないしな。

「マルッ！ お前では危ないだろう！ 何てことを言うのだ！」

「俺では危ない？ そんなことはないッ！！ そこにいるバカ男よりも安全だ！！ 俺はそのバカ男よりも強い！！ 村で一番強いのも俺だ！」

「こらッ！ 何て失礼なことを言うのだ。だいたい、お主が強いと言っても——」

「ああ、村長さん。村長さん。説教始められたら困るんだけど。それから、たぶんその子は止めても絶対についてくるよ。だったら、道案内させてもらうようにして、余り離れた位置に行かないようにしたいんだけど」

マルとやらは、この村長が言ったことを絶対に守らないだろうな。何て予測が出来たので、どうせならフォローしやすい近い場所にいるようにしたほうが賢明だろう。

ならば、道案内もしてもらったほうが良いだろう。

そんなこんなで提案をしたのだ。

「まあ、 그레이さんがそこまで言うのであれば従わせてもらいます」「ふん、そんなバカ男の言うことなんて聞かなくてもいいが、この話は聞いてやってもいいかな」

このガキは！！

……っと気持ちを隠しながら、俺は青筋を浮かべつつ笑顔を作ることに努める。

いや、そうしないとヤバイよ。すぐにこのガキを殺してしまいそうだもん。

「とりあえず、案内してくれよ」

「……仕方ない。ついてこい」

そう言ってマルは先に家を出て行った。俺もその後に続こうとする。

すると、村長さんが俺が出ていく前に口を開いた。

「息子の事、宜しくお願いします」

「言われなくても解ってますよ。では、待っていて下さい」

村長さんは俺の返答に安心したように「ハイ」と言って、頭を下げた。

まったく、こんな良い親なんだから、もう少し素直に育ったら良

かったのにな。

「こっちだ」

「おう」

マルが前を歩き、案内してくれている。

そして、今はワイバーンが生息しているという山を歩いている。
それにしてもマルは本当に生意気だ。この道中も俺の事を「バカ男」としか呼ばない。さらに「俺はバカ男なんかと違って強い」とか何とか挑発もしてくる。

といっても一々相手するのも面倒なので相手はしない。

「もうすぐ着くぞ」

「おう」

そうこうしている内にワイバーンを見張る場所に近づいたようだ。

ギアアアアア！！

突然、天を衝くような声が響き渡る。

嫌な予感がした。それはマルも一緒なのか、いきなり走り出す。
俺もマルを追って走る。

逸る気持ちを抑えながら、走る。すると、元々近くまできていたということもあり、すぐに目的地へと到着した。

大きな翼と長くしなやかな尻尾を持つ姿のモンスター、ワイバーン。

上空にてワイバーンはその大きな翼を広げ堂々とした風格で唸り声を上げている。

その姿は狂暴で、ギロリと睨む瞳だけで人間を竦みあげる程だ。

そして、地面には青年が3人ほど倒れている。

青年たちが気になり、俺はいそいで3人に駆けよる。

青年たちは息をしており、どうやら腕や足をやられて倒れているだけのようだ。

「あ、あなたは？」

倒れていた青年の一人が俺を見て尋ねてきた。

「俺はワイバーン退治を頼まれた男だ」

返答しながら、俺は青年たちを担いでワイバーンから離れた位置へ運び出そうとする。

ワイバーンが上空にいる間に戦闘区域から離れた位置には運びださない。

「おい、バカ男。お前逃げるのか？」

俺が青年たちを運び出そうとするとところにマルが引きとめる。

俺がワイバーンに戦いを挑まないのを見て、俺が怖気づいたとも思ったのだろう。

だが違う。俺はワイバーンを倒す前にしなければいけないことがある。

だから、俺は気にせずに青年たちを運び出す。

「けっ！ ビビりか。なら、俺が倒しておいてやるよ！！」

マルはそう言って、上空にいるワイバーンへと向き直る。

そして、魔力を集束させる。どうやら、魔法で牽制するつもりのようなのだ。

「くっ！ まだ青年たちを避難させてない！ 無理はするな！」

「知らないよ！ 避難させるならとっとと勝手にやれ！！」

マルはそう言って、青年たちが運び終わっていないのに攻撃をワイバーンに仕掛ける。

「暗き闇よ。矢となり、相手を貫け。闇の矢」ダークアロー

マルは闇の矢をワイバーンに向けて放つ。ダークアロー

そして、闇の矢はワイバーンに直撃して、ワイバーンにダメージを与える。ただダメージといってもごく僅かであり、かすり傷程度だ。

それでもワイバーンは怒りをあらわにして、マルを見る。

「こいよ！」

マルはそのワイバーンを挑発するように笑みを浮かべた。

ワイバーンはそれを読みとったようで、荒れ狂うように叫びマルへと突撃してくる。

「もらったッ！」

ワイバーンが近づき、低空飛行になったところにマルは飛び込んで、剣で斬りつける。

ワイバーンは相手が突撃してくるとは考えていなかったようで、回避できずに剣で斬られる。

といっても鱗は硬かったようで致命傷にはなっていない。

尻尾を振り回し、今だ空中にいるマルへと攻撃をする。

マルは尻尾の攻撃を剣で防ぐ。ただ、威力は殺し切れていないように地面へと吹き飛ばされる。

マルは回転して、勢いを殺し危なげなく着地をする。ダメージなどはないようだ。

ワイバーンは追い打ちを掛けるために、マルへと向かって飛んでくる。

マルはそれをサイドダッシュをして回避し、剣による一撃を避けるついでにしておく。

そして、後ろへと飛んで行ったワイバーンへと闇の矢ダークアローを放ち、追撃もしておく。

ワイバーンは連続攻撃が痛むためか悲鳴をあげる。

どうやら、マルはワイバーン相手に善戦しているようだ。

もしかしたら、マルが勝つかも说不定。

青年たちを運びながら、戦いの状況を観察していた俺はそう思った。

青年たちを戦闘している場所から離れた位置へと運び終えたときに、ワイバーンは遠くに飛んで行く。どうやら、一旦、引くつもりだろう。

こちらとしても好都合だ。

この青年たちをもつと安全な村まで運べるほうが良い。

そう思い、ワイバーンが飛んで行くのを見守ろうとしていると、マルと一緒に駆けていくのも見えた。

あのバカッ！ 追い打ちを掛けるつもりか？ まったく、まだ相手の出方が全て解ったわけでもないのに、一人で行くなんて危険だ。クソッ！ でも俺は青年たちが気になる。しかし……。

「俺たちは大丈夫です。それよりもワイバーンを追いかけたマルが苦戦するはずなので、追いかけて加勢してやって下さい」

「……ありがとうッ！ 後で迎えにくる！！」

俺は青年たちの言葉に甘えて、マルを追いかけることとした。

「追いついた」

マルがワイバーンを追いかけて戦いを始めている場所へと追いついた。

しかし、マルは先程と違って、息も激しく、かなり体力を消耗しているようだ。しかも、身体のアちこちに打撲の跡が見られる。

そうマルはワイバーン相手に苦戦していた。先程までは善戦して

いたはずなのに。

それには理由がある。そうワイバーン一匹相手なら苦戦はしないが、マルが対峙しているのは三匹のワイバーン。だから、苦戦しているのだ。ただでさえ、一匹相手に対等な戦いとなる強敵なのに、三匹もいれば防戦一方になってしまうのは必然だろう。

どうやら、ワイバーンは一匹だけではなかったようで、あそこで戦った一匹のみが逸れて戦っていたようだ。

マルはワイバーンから尻尾による攻撃で強打され、こちらへと飛んできた。

剣で何とか少しは防御したものの全てを防御できたわけではなく、腕と足をやられていた。

そうして、近くにきたおかげか俺に気づく。

「お前も来たのか。だが、俺がコイツらを一人で倒す」

「……はあ、何言ってるんだよ。その傷で体力で倒せるわけないだろう？」

「まだ倒せる。それに、これは俺の戦いだ。俺が負けようが関係ないだろう」

「関係あるよ。むしろここで戦わなかったら俺が強くなる意味なんてないよ」

俺はそう言って、こちらへ向かってきていたワイバーンの尻尾の攻撃をタナトスで受ける。

……なるほど、確かにC＋ランクの強さと認定される程だな。受ける攻撃の重量感が違う。

だがな。クリュスの魔法には程遠い！！

「うおおおおお！！」

俺はタナトスに魔力をも注ぎ込む。そして、腕に力を込めて、ワイバーンの尻尾をぶった斬る。

グアアア！！

ワイバーンは悲鳴をあげる。その隙に俺はワイバーンの頭部へと近づいて、渾身の一撃を与える。

タナトスはワイバーンの頭部を真っ二つに斬り、ワイバーンを絶命させる。

その隙にワイバーンの一匹が俺に尻尾による強打をしてくる。

このワイバーンは先程の個体よりも大きい。それに最高速度からの尻尾攻撃。これを受けるのは得策ではない。

受けてしまえば、無防備にもなり、もう一匹の攻撃が回避できないかもしれない。

だが、俺が避けてしまえば、近くにいるマルに被害が及ぶ。

だったら、選択肢は一つだ。

ガッ！！

「おい、お前。何してんだよ！！」

マルは怒声をあげている。そして俺は尻尾の攻撃を受け止めている。

かなりの質量だ。吹き飛ばされそうになる。だが、俺は飛ばされるわけにはいかない。俺は力の限り踏ん張る。

そこへ、二匹目の攻撃が繰り出される。

それも尻尾による攻撃。ただ幸いにも同じ位置を攻撃してくれたようにタナトスで二つの尻尾を受け止めることが出来た。

ただ受け止めたのは一瞬だけ。

二匹の攻撃の質量に俺は耐えられずに大きく後ろへと飛ばされる。飛ばされた位置には岩壁があり、何とか受け身を取るも背中を強く打ちダメージを負う。

だが、ダメージはそこまで大したモノではない。

だから、すぐさまに立ち上がり、光の銃弾ライトブレットをワイバーンに放ち、隙を作ることとする。

一匹は光の銃弾を上空に飛翔することによって、回避した。

だが、もう一匹は反応できずに光の銃弾ライトブレットを受けて硬直する。もちろん、俺はその隙を逃さずに近づき、首を刎ねる。

これでワイバーンは二匹倒した。あと一匹だ。

そう思い、ワイバーンの行方を追う。

ワイバーンはどうやら、いつのまにかマルの元へと行き、牙による攻撃をしようとしている。

俺はすぐさま駆けつけ、牙による攻撃をタナトスで受け止める。

牙による攻撃は受け止めることには成功した。だが、次の瞬間、尻尾による攻撃を腕に受ける。

それでも俺は何とか踏ん張り、マルを庇う。

「くッ！ お前は本当に何してんだよ！ けが人の俺なんて放っておいて戦えよ！ そんなことしてたら、お前までやられるだろうが！」

「あのな。俺が戦う理由は守るために戦っているんだよ！ 俺が勝ってもお前が無事でないと意味がない！ それに俺は負けないから大丈夫だッ！」

クリュスと戦ったときのことを思い出す。俺は勝って守る。

タナトスに魔力を、力を、意思を込める！！

タナトスは強き漆黒の光を放ち、刀身を変えていく。漆黒の長剣。俺はタナトスを持ってして、目の前にいるワイバーンの牙を裂き、ワイバーン全てを裂く。

そうして、ワイバーンは全て倒した。

ダメージと力を使いすぎたせいで、動けなくなったが、異常を察した村の人たちが来てくれたおかげで、連れて帰ってもらうことが出来た。

いや、本当に助かったね。

そして、ワイバーンは全てで三匹だったみたいで、討伐は完遂したとのことであった。

というよりも複数匹いるなら、先に言ってよね。とも思ったが、どうやら見張り場所に襲撃のあったとき、初めて知ったようなので不問としておいた。俺って優しいね。

そうして、村に危険もなくなって俺は用が特になくなったのだが、怪我と体力の関係により、一日村長の家に泊めてもらうこととなった。

そういうことで、村長の家の客間で床につこうとしたが、「コンコン」とノックがあったのでドアを開けてやることとする。

「マル？　なんか用事でもあるのか？」

ドアを開けるとマルが俯き突っ立っていた。

そんなマルに質問してやるが、俯いたまま固まってやがる。

いったい、何の用なんだよ。俺、心読めないから解んないっての。

「あのさ、ありがとう」

「ってなんだよ。そんなことかよ。いいよそんなこと。俺は俺のやりたいことやっただけだしな」

「うん、解ってる。だけど、助かったから」

まったく、いきなり素直になりやがったなコイツ。生意気なところしか見てないからビクビクするな。

と思っていたら、マルがいきなりバカにしたようにニヤケ顔をして言う。

「それから、俺も強くなって、守るよ。俺もグレイみたいに守ることが出来るように強くなる。だから、グレイはいつもすぐに抜かれるとか思っ**て**ビクビクしておけよ！！」

そう言って、マルは駆けていった。

「つたく。ガキが！　俺はお前なんか**に**ビビらない**っての**！！」

やっぱりアイツは生意気なガキだ。だが、それでマル**って**感じだから良いだろう。

アイツはこれから強くなるだろうな。

俺も負けないようにもっともっと強くなろう！！

勇者と少年と戦いと――＜勇者＞――（後書き）

今回は誰の話をするかは未定。（ちなみに本編はあと2～3話ぐらい書いたら、始めようと思っています）

《補足》

・ワイバーン C＋ランク

大きな翼と長くしなやかな尻尾を持つドラゴンの亜種。前脚はなく、腕部が翼になっている。尻尾は硬く鋭い鋸のようになっており、攻撃に気をつけなくてはならない。

主な攻撃は牙による攻撃と尻尾による攻撃。
ブレス系の攻撃は使用しない。（このため、Cランク）

メイドⅡ冥土の使い?? (前書き)

ネタ回

あと更新が遅くなってすみません。。。。

メイドⅡ冥土の使い??

メイドは今日という日を本当に楽しみにしていた。

だが、それはちょっと以前の話。今は悲しみに明け暮れている。
……いや、怒りに狂い始めた。

そうして、魔王城に冥土の使いが誕生した。

時は少し遡る。

メイドはその日の夜、国中で有名なお菓子屋からケーキを仕入れていた。

そして、メイドはそのケーキを明日の3時に食べるということので冷蔵室へと保管していた。

「ふふふ、早く食べちゃいたいな」

メイドは満面の笑みを浮かべて言う。幸せという顔とはこういう顔だ。ここまで誰がみても幸せという顔をしていると言わしめることの顔はないだろう。という程の笑み。

メイドは冷蔵室を「我慢、我慢。明日には……ふふふふふ」と呟きながら出ていった。

といった様子から解る通り、メイドは無類のケーキ好き……いや、そんな程度では済まない。

ケーキ狂者といっても過言ではない。

ケーキを保管した翌日、メイドは3時の楽しみを思う存分に満喫するために、張り切って仕事をしまくる。

掃除――。

「ふふふ、これくらい一人で直ぐに掃除するわッ!!」

メイドは分身したと錯覚させてしまう程のスピードで動き掃除する。

もはや俊敏な魔族にも真似できない領域へと達している。

さらにただ速いだけでなく、正確で綺麗に掃除する。その正確さは凄く、寸分のくるいもなく隅々まで掃除を完璧に行える程だ。

そうして、メイドはたった一人で城の掃除を小一時間で終らせた。

買い出し――。

「ふふふふ、これぐらい一気に買っておこうっと」

メイドは掃除が終わった後、さらに買い出しにも出掛けた。

その買い出しで一山くらいありそうな物を買う。そして、メイドは一人で持ち上げる。

屈強な魔族でも真似できないだろう。それほどまでに凄まじい重量だ。

それをこのメイドは細腕をもってして笑顔で持ち上げる。
その光景は絶句するとしかしいようなない。という通り、出会う
人々はメイドの存在を疑うばかりの視線を送っていた。
そうして、一人で買い出しを終えてしまった。

討伐――。

「ふふふふふ、ケーキを食べる前に腹ごしらえをっ」と

魔王城から近い森での討伐。

討伐とは兵がモンスターを倒し、国の平和を保つための仕事だ。
そうあくまでも兵がやる仕事なのだがメイドは勢い余って討伐を
していく。

しかも、今メイドが行っている討伐は難易度の高い高ランクのモ
ンスターの全滅依頼。

熟練した兵であっても負傷者は出してしまう。それ程、難易度の
高い内容だ。

だが、それをメイドは一人でやる。

メイドは力を解放し、モンスターをちぎっては投げていた。

ゴミのように扱われるモンスターたち。ゴミを片付けるメイド。

そんな奇妙な光景が広がっていた。

強き魔族であっても、このような光景を生み出すことはないだろ
う。

そもそも、生み出したくもないが。

そんな感じで何時もの1000倍以上の働きをしたメイド。（作家比）

そうして、迎えた3時。
冷蔵庫へと向かう。

「3時のおやつ♪」

メイドは満面の笑みを浮かべケーキの姿を確認するも……異常な事態を察して固まる。

「あ……ありえない！」

なんとケーキが6個あったのに、今は5個しかない。そういつの間にか1個減っている。

そうして、冒頭のシーンへと戻る。

怒り狂った冥土への使いであるメイドが誕生した。

メイドはとりあえず、残ったケーキを食べる。
だが、やはり6個食べるつもりであったメイドには物足りない。
そこで怒りはさらに膨らんでいく。

「サツガイ！ SATSUGAI☆」

ケタケタ笑いながら発する言葉。狂った言葉。

狂いしメイドは、このあたりを通った可能性がある人物のところへと向かう。

この場所は、メイド専用の冷蔵庫。

そして、勇者の客室の側であり、通る者は少ない。

だから、この辺りには勇者と魔王しか来ない。

「ヴェルトかああああ!!」

メイドは過去、魔王にケーキを勝手に食べられた記憶がある。

それだけでメイドの標的にされるのは十分だ。メイドはただ八つ当たりしたいだけなのだから。

メイドは魔王と勇者がいる訓練場へと出向く。

「エミリーか? どうし……グレイ! 逃げるぞ! アレは危険だ!!」

「え? 何だよ、いきなり——」

「いいから逃げろ! さもなくば死ぬぞ」

メイドの状態を察した魔王は即座に撤退を始める。

かつて、魔王がメイドのケーキを横取りしたときに魔王はボコボコにやられた。

だから、魔王はメイドを警戒している。

「逃がすかああああ!」

メイドは一筋の閃光へとなり、魔王の逃げ道を塞ぐように前に現れる。

「覚悟は出来てるな？」

メイドは絶対零度の言葉を魔王に言い放つ。
威圧感は凄い。それだけで全ての相手を圧倒してしまいそうなほどだ。

その威圧感に押されないように魔王は踏ん張り、笑みを溢す。

「ふん、あの頃はボコボコにやられたがいい機会だ。今は狂ったお前よりも強いと解らせてやろう!」

「無駄なことを!」

魔王は渾身の力を込めた右ストレートを放った。
スピードは速く、目にも止まらないスピード。
それは、高ランクのモンスターと言えども、一瞬にして葬りさる威力を持つ。

「な! なにッ!」

高次元な威力を持つ拳。

それを意図も簡単に片手で受け止めるメイド。

それだけで一つの事が解る。

メイドのほうは何枚も上手だと言う事が。

そして、その最狂のメイドはニヤリと笑う。

そして、最後の言葉を言い放つ。

「S I N I N A ☆」

メイドは消えた。

魔王ですら、認知できないスピードの域に達している。

そのスピードはもはや神域。

そして、その神域に達したメイドは魔王に攻撃を仕掛ける。

魔王は中空に浮いて独りでにボコボコになっていく。

そんな不思議な光景が5分ほど続いた。

勇者はその光景を見て、腰を抜かしていた。

逃げたいのは山々だが、身体が言うことをきかないのだろう。恐怖が身体を支配しているようだ。

「ヒッ！」

魔王が地に落ちた。そして、メイドが姿を現す。

そして、メイドは勇者へと歩み寄ってきた。

勇者は歯をガタガタと鳴らし、もがく。

だが、身体が言うことをきかないため、逃げられない。いや、逃げようとしても同じかもしれない。

相手はあのメイドなのだから。

だが、恐怖に染まった勇者は訳も解らずに力を振り絞り、何とか駆けだす。

しかし、それは無駄となる。

逃げ出したはずなのにメイドが目の前にいる。

やはりメイドから逃げれるわけがなかったようだ。

そうして、勇者の前に立つメイドは口を開く。

「アナタはケーキ食べた？」

「ヒッ！ あ、えと、ケーキ？ た——」

「ブーッ！ 時間切れです。死にな」

ニッコリと笑顔を見せたメイドは消えた。

そして、勇者も魔王と同様に舞った。

その夜、メイドは自室に帰ってきてある事実気付いた。

自室の机の上にケーキを入れていた箱があることで気付いた。

そう——。

「朝寝惚けて一個食べちゃってたんだ」

ということではケーキはなかったようだ。

魔王と勇者は完璧に被害者。メイドは加害者。

だけど、メイドは「まあいいかぁ」とどうでもよさそうに言っ
て眠りについた。

やはり世の中は理不尽だ。

メイドⅡ冥土の使い?? (後書き)

以上、ネタ回でした。

次は魔王のお話をします!!

次は近いうちに更新出来ると思います!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6496n/>

勇者くんと魔王くん

2011年9月12日03時20分発行